

イナズマイレブン 雷  
鳴への挑戦

For AP

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

1人の男が、イナズマイレブンの世界に転生。

原作主人公の円堂守と世界大会の決勝で会うために努力を始めた。

前世の知識を活かして、修行漬けの毎日を過ごす。

そしてドイツの頂に立った後、彼は日本へと旅立った。

円堂守の活躍を見守り、さらなる成長を促すために。

最高の一戦を繰り広げるために。

ラスボスの立場から描くイナズマイレブンをテーマに執筆します。ラスボスという

立场上、非常に優れた選手として描きますので苦手な方はご注意ください。

※Aイラストを活用しています。苦手な方はご注意ください。

またドイツ代表ブロッケンボーグの代表メンバーが大きく変わる可能性があります。すぐに見れる様に挿絵をまとめておきます。

主人公      アインス

妹              シエル

専属メイド    アトリ

友人            ムクロ

# 目次

## 一章 ドイツでの日々

1 話：プロローグ 1

2 話；布石 14

3 話：必殺技 22

4 話：早すぎた覚醒 32

5 話：デュプリは友達に数えられます

か？ 44

6 話：運命との邂逅 52

7 話：約束 70

閑話：監督たちの畏れ 82

8 話：サッカー仲間 97

9 話：人の力 112

1 0 話：ドイツ最強（小学生） 126

閑話：愛と狂気と殺意と 144

1 1 話：ベータ襲来 157

1 2 話：天獄 173

1 3 話：一度の離別 193

## 二章 日本一への旅路

1 4 話：衝撃！異国からの転入生!? 214

214

1 5 話：数多の出会い 227

1 6 話：帝国と影山 243

1 7 話：青龍の目覚め 263

1 8 話：交錯する影 279

19話：女子会と漢	297
20話：データを超える進化	313
閑話：イタリアVSドイツ 前半	
333	
閑話：イタリアVSドイツ 後半	
350	
21話：埋もれてしまった者達へ	
379	
22話：余裕の勝利	392
23話：裏切り	409
24話：新監督	426
25話：暗躍	442
26話：目覚め	459



# 一章 ドイツでの日々

## 1話：プロローグ

真つ白な病室で俺は1人夢を見た。

身体を気にすることなく全力で、死力を尽くして何かに打ち込める健やかさを。

運命に望まれ、世界に愛された才能を。

人並みに優しく、暖かで知識を育むことができる環境を。

共に喜びを、怒りを、哀しみを、楽しみを分かち合うことのできる友を。

全て今の俺にはなかったものだ。

意味のない願いだと思いつつも、ただひたすら俺の後悔を想起する。

俺の命の灯火はあと数刻で消え去ると自覚しているから……

唐突だが。俺は転生してしまったようだ。

先天的な病気の悪化によって、20歳ちようどになるというめでたい年に死んでしまった……はずなんだが、俺の意識は暗闇から覚醒し、また現世に戻ることができた。

病室の冷たいベッドの上で意識が消失したと思ったら、人肌の暖かい温もりを感じて目覚めたのだ。しかも……

目の前には巨大な女性の人影……抱きかかえられている……コレ転生だなあ!?

ということで、生まれたての俺は転生したという事実を把握したのだった。前世から転生というコンテンツを消費していた立場だったから、あまり戸惑いはなく現実を受け入れられた。

にしてもとてつもなく驚いたけどな。でもそれ以上に……もう一度人生を謳歌するチャンスが与えられたことを嬉しく思った。



それからは、生前の子供時代をなぞるように過ごし、4歳の今に至るといふわけだ。最初は両親が何を言っているのかわからなかったが、断片的な知識をかき集め整理することで、情報を整理できた。

それは

- ・前世と同じ地球に生まれ変わったこと
- ・俺が生まれたのはドイツであること
- ・俺が死んだ2023年より過去の世界であること
- ・両親がめっちゃくちゃすごい人たちであること

大まかに分けるところなら、地球に転生したというのは、少しロマンに欠けるような気もするけど、俺にとっては十分な環境だ。

健康的で、思うがままに動く身体。

スポンジのように何もかも吸収する澄み渡った知性。

優しい父と母に恵まれ、可愛い双子の妹までいる暖かい家庭。

俺の願いがほとんど叶えられた樂園がそこにはあった。前世の環境なんかよりもよっぽど素晴らしい世界で、楽しすぎてあつという間に時間が過ぎ去ってしまうほど、恵まれた生活だった。……赤子の頃の恥ずかしい記憶はもう忘れませんでした。

こうして今までの遍歴を脳内で振り返っている理由だが……それは俺がたつた今、とんでもない状況に置かれ、人生の岐路に立たされているからだ。あれは選択しなければならぬ。

俺は先程、庭で運動していた時。父さんから一緒にテレビを見ないかという提案を受けた。なんでも父さんは家族だけでなく、家で仕事をしているメイドや執事まで集めてスポーツの観戦をしようじゃないかというのだ。

飲み物から軽食まで、様々な物を我が家で一番大きいテレビの前に用意する。大人数なことも相まってさながらパーティーのようだ。

そこまで準備をして何を観戦するのかというと……サッカーの試合だった。

ドイツ対日本。俺の今生の母国と、前世の母国の直接対決だ。

とてつもなく大きい会場は満員で、すべての人々が凄まじく熱の入った応援を繰り広げていた。

俺はそんな様子を眺めながらやけにカラフルな髪色や髪型の人が多いなあ……と思っていたのを覚えている。今思えばここで疑問に感じるべきだったのだ。俺も妹も地毛が銀髪だから人のことは言えないけどさ……

ピーーーー

スタジアム内に試合の開始を告げるホイッスルが鳴り響いた。画面に表示されたタイマーが時を刻み始める。

前世でもサッカーの観戦をすることはあったので、観戦を何だかんだ楽しみに待っていたのだが……試合開始直後から今まで見てきたサッカーの試合とは全く異なる試合展開が待っていたのだった。

「おおっと！ ドイツ代表————試合開始早々、いきなり強烈なドリブルを仕掛けていくぅ!!」

『ダツシユストーム』

ドイツ選手が両手を広げると共に、暴風が吹き荒れ、日本選手が吹き飛んだ。

「猛烈な一点突破だあ!! 試合開始直後、ドイツ代表の苛烈な攻めが日本代表を襲う!!」  
「しかし、日本代表もそれだけで終わるほど弱なチームではなあ!! 日本が誇る不沈山脈——がゴール前で待ち受けているう!! この人を突破しないとシュートは打てないぞドイツ代表! どうする!!」

「おおっと! 背後に仲間はない!! 無謀にも強行突破を選んだようだ! しかしそれを日本代表が許すわけがない!!」

『メガクエイク』

日本代表がその巨漢に見合わぬ跳躍力を発揮し、勢いよく飛び上がり、地面を踏みつける。すると大地が大きく隆起し、ドイツ代表は宙に浮いた。

「ドイツ代表——は吹き飛ばされ、ボールが日本代表の手に渡る!! これは独断専行しすぎたかあ!?! 日本代表は冷静にボールを回し、前線へと繋いでいくう!!」

「隙を見せないボール運びだア!! あつという間にボールはドイツのゴール前まで迫っている!!! おおっとお!!! 日本代表FW——ドイツ代表の守備陣をすりすりと躲して、既にシュート体勢だ!!」

「ドイツ代表残されたのはG K——ただ一人!!! この危機的状況を乗り越えることができるのか!!」

『ダークトルネード』

高く——高く蹴り上げたボールに対し、捻りを加えた跳躍を行うことで漆黒の螺旋を描く。そして力強く蹴り込まれたボールは闇の力を宿し、凄まじい速度でゴールに突き進んでいく。

「日本代表————の必殺シュートがゴールは迫る!! 対するG K————も真正面から受け止める構えだあ!!!」

『セーフティプロテクト』

半透明な青色のライオットシールドがゴール前に立ち並び、強烈なシュートに立ち向かう。ジリジリと、力のせめぎ合いが続いている。

空気が重い。画面越しにでも伝わってくる緊張感が、家の中で伝播する。

日本が攻め切るのか、ドイツが守り切るのか。先制点は決まるのか決まらないのか。俺はあまりの緊迫感に唾を呑んだ。すると……おもむろにせめぎ合っていた力の均衡が破れる。

ゴールネットがふわりと揺れる。盾が崩れ落ち、闇の力を纏ったボールがゴールに突き刺さったのだ。

「ゴール!!! 試合直後の攻防を制し、先制したのは日本代表!!!」

……観客の歓声が会場に鳴り響く。それと同時に、ドイツを応援していた父さんの慟哭も家の中に響き渡った。妹は呆れたように……母さんは優しげに父さんを見つめている。メイドや執事も悔しげな言葉を口々に出していた。

一方俺はというと……

ピッチ上で練り広げられていた必殺技の応酬を見て、あることに気づいていた。あれは……かつて……小学生の頃慣れ親しんだ……あの作品の……あの技だ。

（ああ〜コレエ〜ちようじげんだあ〜）

この世界がイナズマイレブンの世界だということに気づき、転生した時以上に動揺し、脳が蕩けてしまっていた。啓蒙が低かったのかもしれない。

いや!! 確かに超次元の片鱗はあったよ?

例えば俺と妹は銀髪蒼眼の超美形幼児だし、父さんと母さんなんて、俳優と女優みたいな誰もが認める美人夫婦といった非現実的な容姿をしている。それに俺の家は、超がつく程デカいしめちやくちや裕福ってこともリアリティに欠けている。

だからと言って、サッカーをすると超常現象が起こる世界だとは思わないじゃないか!

シユートをすれば炎は迸るし、ドリブルをすれば暴風が吹き荒れる。まして、シユートをキヤッチしようものなら、背後に魔神が出るんだぞ!?

!!  
そんなの現実にあるとは思わないじゃないか。だから気づかなかった俺は悪くない

いや……誰にも責められてないか……

でも……ここがイナズマイレブンの世界だとしたら俺はすごく嬉しい。なんせ……俺は大がつくほどのイナズマイレブンファンだからだ。無印からGOまでの合計6作

を残さずやり込んだ。死ぬ間際にはようやくと新作も出るって話だったけど結局どうだったのかな……

いやいや！ 後悔なんてのは後でいいんだ。気を引き締めるためにピシヤリと頬を叩く。どうにも気分が高揚して、思考がふわふわしている。状況を整理しなければ。

俺はイナズマイレブンの世界に転生したことは間違いないだろう。家にある設備とイナズマイレブンで描かれた設備を思い出して比較してみると、うちの設備の方が古そうだ……つてことはイナズマイレブンのお話は、未来に位置しているのだろうか？ コレは後でよく調べておくべきだな。

あと気になるのは……この世界は無印世界線ってことでいいのだろうか……？ うーん……今の所わからないけど、日本の会社とかを調べられればわかるかな？ アレスの天秤だったり、オリオンの刻印の内容は正直あまり把握してないから自信はないけどな……

とりあえずこの世界がイナズマイレブン無印世界線で原作の開始前だということをお願いして俺の目標を考える。いや……それはすでに決まっていたな。イナズマイレブンに関する夢といえばアレだろう。

【最高のライバルとして円堂君と世界の頂で戦いたい】



これは小学生の当時、イナズマイレブンを通じて見ていた夢だ。原作の流れを崩してしまうかもしれないけど、俺は円堂くんと仲良くなって、ライバルになりたいのだ。そして最後には世界最強の座をかけて、フットボールフロンティアインターナショナルで争いたい。

まさか今になっても思い出せるほどの強い思いがあるとは思わなかった。それほどまでにイナズマイレブンというゲームの体験は少年時代の俺にとつて鮮烈な記憶だったのだろう。

俺はあの熱血で宇宙一のサッカーバカと呼ばれるを彼を尊敬している。優しくて仲間思いな彼を知っている。俺は太陽のように輝く彼に惹きつけられた人々の内の1人なのだ。ならば俺は彼に会わなければならない。

彼に出会えたとして、

彼を影から応援するのもいいだろう。

仲間として彼と共に世界一を目指すのもいいだろう。

しかし俺は彼とは違う道を歩もうと思う。

俺には他の人たちにない知識がある。超次元サッカーに関する知識も……未来の想像図ですらもだ。

俺には円堂くん達の強さがわかる。だからこそ、俺は努力を怠らないだろう。

俺には失敗と後悔がある。前世で成し遂げられなかった全てを今世にぶつけ、夢を叶える。

円堂くんと戦うことでしか得られない何かがあると思うのだ。

鬼道が、アフロデイが、レーゼが、デザームが、ヒロトが、ファイディオが、ロココがそうだったように。大切な何かをもたらしてくれるだろう。

だから俺は彼と、円堂守君と闘うのだ。世界最高の舞台で凄絶に。壮絶に。守君が戦うであろう他の誰よりも、強く。そしてカッコいい男にならなければいけない。彼の最高のライバルとして相応しい存在になれるように。

ならば今すぐトレーニングだ！ 鍛えて鍛えて、円堂くんに負けないように必殺技を覚えるぞ!!

精神年齢は20歳を超えているにも関わらず、俺は未だに子供心を忘れていなかった。いやーやっぱり必殺技は使ってみたいよね

そう脳内で机上の空論を繰り返り広げた俺は、絶対に目標を成し遂げるといふ決意を胸にガッツポーズをした。

ああごめんなさい……

……父さんにドイツを応援しなさいって怒られた……ガッツポーズはそういうつもりじゃないのに……勘違い……

まあでも将来的に円堂さんとFFIで戦うことを目指すならドイツ代表になることは必要不可欠だ。観戦をして、知識を深めるとしよう。

うお——!!! これから忙しくなるゾオ!! この超次元の世界で俺は生き抜かなければならないんだからね!!

## 2話；布石

この世界の真実に気づいてから数日経過した。色々調べ回った成果をまとめていこうと思う。

手段としては、サッカーについて詳しい父さんに話を聞いたり、家に置いてあったインターネット設備を活用したり、執事の人に情報収集を頼んだりなど、色々な手を使って情報を手に入れた。

結果なんだが……

少し前に懸念していた、時系列の不安はおそらく問題ないと言う結論に落ち着いた。イナズマイレブンファンなら誰もが憤ったであろう、フットボールフロンティア決勝での雷門OBの事故が、ちょうど30年前の出来事としてインターネットでまとめられていたのだ。

原作では円堂くんが13〜14の頃に40年前って語られていたはずだから、今は原作の10年前に当たると考えられる。

以上のことから……今俺が4歳つてことも考慮して……俺は多分円堂守くんと同じ年齢……だと思う。コレはすごく運がいいぞ!! 運命が俺の味方をしているかのよう、都合がいい。円堂くんが勝利の女神に愛されているように、俺は運命の女神に愛されているのかもしれない。

あとは世界線の話だけどころかも無印イナズマイレブンの世界で間違いないと思う。うる覚えの知識だけど、アレスの天秤に関係している月光なんたらつていう会社が日本にないかを執事に調べてもらったのだが、見当たらなかつたらしいのだ。原作の10年前に当たる今、会社がないってことは、無印で確定じゃないか？

そんなわけで、俺の懸念は杞憂だったことがわかったわけだ。コレで心置きなく、修行に励むことができるな。

そうそう、修行に関しても父さんに色々相談してみた。世界最強のサッカープレイヤーを目指す上で、トレーニングの環境つてのはすごく重要だと思い、早めに行動を起こしておいたのだ。

「父さん。 お願いしたいことがあるんだけどいいかな?」

「おお! 珍しいねアインが私を頼ってくれるなんて……なんだい? なんでも言っておくれ」

父さんは嬉しそうに目をうるうるさせている。 え? コレだけで……? 俺、とんでもない子供だと思われてないか? 確かに妹には全く笑わないって言われてるけどさ……

前世の暗い記憶が故か、気持ちさが全く表情に出ないのだ。 まあそんなことは置いておいて、父さんに頼み事があるのだ。

「数日前にサッカーの試合を見せてもらったよね。 あれを見て僕もサッカーをやってみたくなったんだ。 教えてくれない?」

父さんは観戦への熱意からもわかるように、熱狂的なサッカーファンなんだ。 俺と妹が生まれていない頃なんて、お気に入りの選手やチーム、ドイツ代表を追いかけてよく国外まで飛んでいたらしい。

それにサッカーファンとしてだけじゃなくて、プレイヤーとしての経験もあるって言うんだから、相談相手として適任だろう。

俺の問いかけは父さんに届いているはずなのに反応がない。無視されているってわけじゃないんだ。ただ、クルリと反転して後ろを向き、顔に手を当て空を見上げている。視界の先にあるのは……我が家で一番大きいシャンデリア……そりやそうだ。ここは大広間だからな。神童さんの家もかなりの豪邸だったけど、うちは間違いなくそれ以上の広さだ。でも多分……みているのは天井なんかじゃない。

「まさかアインがそんなことを言ってくれるとはなあ……」

父さんは啜り泣きながら嬉しそうに言葉を紡いだ。え？ 泣くような要素あったかなあ？

「どうしたの父さん？」

サッカー以外ではいつも冷静な父さんが珍しく動揺したようで、目元を拭いこちらを向いた。目元は赤く染まっている……やっぱり泣いてたんだ……俺の質問の何が父さんの琴線に触れたのだろうか。

「ああ、ごめん。アインがサッカーをやってくれていることが嬉しすぎてね。少し感動してしまっただ」

……それだけで涙が出るってって凄まじいサッカー愛だな。なんか過去にあったの

かと思つたよ……。子供が自分の後を追つてくれるつてそれぐらい嬉しいのかな？

「私にできることならなんでもしよう。遠慮しないで言つてくれ」

父さんは力強く胸を叩きながら、そう断言する。ならばここは子供の特権を活用して、父さんのお言葉に甘えるのでしょうか。

「だつたら父さんにサッカーを教わるだけじゃなくて、個人的にサッカーを練習できる場所が欲しいんだ。どこかに連れて行つてもらえない？」

庭でサッカーの練習と行きたいところなんだけど、うちの庭は広大な範囲が丁寧にガーデニングされていて、サッカーをできそうな場所がなかったのだ。ゆくゆくは必殺技を使えるようになりたいので、ある程度の自由がきかない場所で練習していると厳しくなつてしまふだろう。

幸い俺の両親の懐事情はアツツアツなようで、金銭的負担はそこまで気にする必要はないだろう。さつきも言つた通り俺の実家はとてつもない豪邸だ。メイドや執事までいるような家庭なんだし、近くのグラウンドへの送迎ぐらいはお願ひしてもいいだろう。

「連れて行く……？ そんなことをしなくてもウチには余っている土地があるじゃないか。そこにサッカーグラウンドを作つてしまおう」



——あ？

その父さんの衝撃的な一言に俺は硬直した。

——数日後——

でつかああああああい!!!

そう思わずはいられないほど、広大なサッカーグラウンドが目の前に広がっていた。しかも完全に室内で、夜でも昼間と全く変わらず練習することのできる照明設備付きだ。

コレ……俺のためだけに急ピッチで作ったのマジか。父さんエグすぎだろ……てか、こんな建物数日でできるわけなくね？ 建築技術も超次元なのか……？

……確かにイナズマイレブン世界ってよく建物壊されてるしなあ……。だからそう言うことなんだよね。きつとそうだ。そうに違いない。

臭いものに蓋をするように、脳内で不合理を合理に矯正しながら俺はグラウンドの中心に立っていた。うわ、ちゃんとした芝じゃん。いくらかかってんだコレ……

そんな俺の内心のドン引きを気にすることはなく、父さんは嬉しそうに、母さんは微

笑ましそうに、笑っていた。妹は何がすごいのかわかっていないように首を傾げていたけど、コレとんでもないことなんだぞ……?」

この家系、価値観がぶつ壊れてるなあ!!

ゴホン……俺は生まれてから父さんを見習ってクールキャラでやっているのだ。それにイナズマイレブンの世界で強キャラを目指すためにはキャラ崩壊なんてしては行かないからな。ライバルがお調子者キャラってのはちよつと解釈違いだ。

表情は変わらないとはいえ、動揺は言動に現れてしまう。日頃から内心は隠しておかないと。

そうして頬を叩いて気を取り直す。この設備を無駄にするわけにはいかないなあ。父さんの熱意や想いに報いるためにも、頑張らなきゃ。

ここ数日は、家の中にあるパーソナルジムでトレーニングを積んでいたんだけど、やつとボールを思う存分触れるようになったわけだ。

まずはどうするべきか……前世では俺はサッカーは愚か運動なんてしたことのない、病弱人間だったんだ。……これはいきなり独学なんてことはやらないで、サッカー経験者の父さんに基礎から教えてもらうのが得策だろう。

「早速練習するかい?」

運動着にすでに着替えてある父さんがそうやって語りかけてきた。話が早くてさす

が父さんだ。執事数名も練習を手伝ってくれるようでストレッチをしている。

みんなに期待が寄せられているのが肌で感じられる。また、愛されている感覚が俺の努力を後押しする。

ワクワクと同時に、期待に応えなければいけないという思いが、緊張感が肌を焼いた。

### 3話：必殺技

サッカーの修行を開始して数ヶ月。俺は予想外の速度での成長を遂げていた。

シユート、パスの精度はゲームの様に繊細で、針の穴を通すようにコントロールできる。ドリブルで速度は落ちず、スピードだけならば超次元の域に足を踏み込んでいると思う。他には父さんや執事の様な大人からもボールを奪うブロック能力も手に入れることができたな。

ジムで鍛えまくったことにより、身体能力だつて必殺技を使うのに十分なぐらい高まったと思う。10メートル以上ジャンプしたり、自分で蹴ったボールを自分で受けてワンツーすることが可能なぐらいの敏捷性を手に入れた。シユートのパワーはただのノーマルシユートでもゴールを揺らす程度に鍛え上げた。

超次元とはいえ、5歳でここまで力がつくものなのだろうか？ ……まあ超次元だし、こんなもんか。

父さんたちにはすごく褒められているけど、サッカーを初めて数時間で、必殺技を使

える様なやつがいる世界だもんな。綱海とか綱海とか綱海とか……俺はまだまだらう。才能があるなんてとても思ってはいられないよ。

そんなわけで、俺は驕ったりはしない。時間というアドバンテージを生かして、極限まで自分を高めていくとしよう。

で、本題なんだけど。そろそろ必殺技の習得に着手していききたいと思っているのだ。閃きによって、どんな技を覚えることができるのか構想も立ったし、今こそ挑戦するべき時だ。

俺はF Wを目指しているわけだし、やっぱり最初に覚えるならシュート技だよなあ！  
なんなら、自分ならではのオリジナル技を覚えたいと思っている。最初に覚えるのが秘伝書つてのもちよっと悲しいしね。

具体的にどうやって必殺技を使うのかは全くわかってないけど、どうやら父さんもF Wの経験者だった様で、シュート技を2つ披露してくれた。この経験が活かせると思う。

『クロスドライブ』

2度の蹴りによって足から放たれた光波が十字架を横してゴールに突き進んでいく。

『アサルトシュート』

突如父さんの背後に現れたポッドからボールが射出され、ゴールに着弾すると同時に爆発する。

テレビの映像ではなく、肉眼で見た必殺技の衝撃はすごく大きかった。空気が揺れ、爆音が響く。超次元の凄まじさをこの身で感じたのを覚えている。その日の夜は興奮で眠れなかった。

父さんにどうやって必殺技を覚えたのか聞いてみたところ、強いイメージを持てば発動できるそう。なんでも、得点を決めないと大会で敗退してしまうという土壇場で初めて使うことができたそうで……だから、イナズマイレブン本編では、感情の爆発が起こった時に新技を覚えられるんだらうな……あとは……ひたすら努力するべしだつてさ。意外と父さん熱血タイプなんだよね。

難しいことを要求されている様だけど、俺はかなりの数、必殺技の完成系を知っているし、不思議と必殺技を再現できる自信があった。構想もあるわけだし、後は試してみ

るだけだろう。

——数日後——

まだまだ新しいサッカーグラウンドに1人の少年が佇んでいる。まだまだ小さく、幼い年齢だと言うのに、大人のように落ち着いている。

パネルテイエリアの前に立ち、瞳を閉じて何かを考え込む様に腕を組んでいる。足元にはポツンとボールが落ちていた。

何分間佇んでいたのだろうか。誰もいないグラウンドには、どこか神妙な気配が漂い始めた。緊迫感に息が詰まりそうさ。何か近づいてきている。そう感じてならない。すると、少年が硬く結んでいた口を開いた。

『アインソフオウル』

A i n S o p h A u r ——無限光の意味を持つ言葉が紡がれる。0 0

0 ……ビッグバンが今、此処に顕現する。

少年の背後に3つの光輪が現れた。それぞれが重なりあい、無限の色彩を生み出して  
いる。緋が、蒼が、翠が、黄金が、黒が、白が・・・収縮と膨張を繰り返し、1  
秒ごとに光は苛烈さを増していく。

少年が足元に転がったボールを蹴り出した瞬間、世界に始まりと終わりの名を冠する  
光が満ちた。

グラウンドが抉れ、ゴールポストが吹き飛ぶ。ゴールネットは引きちぎれ、ボールは  
壁を吹き飛ばし、破裂する。

凄絶な破壊の跡が、グラウンドに残された。

静寂が今一度訪れる。

やったぞ！ 初めて必殺技が成功した!!!

でも初めての技にしては威力エグくね？ 最初の技なんて『グレネードショット』と

か『スピニングシュート』みたいな簡素な技なのかと思つてたけど……めっちゃ派手だし

……



まあいいか！ 強そうだし。

グラウンド内は吹き荒れた暴風や、シユートの余波によって大きく乱れている。修繕のために幾らかかるのか……ハイテンションを気取っている俺はそんな現実から目を逸らしていたのだった。

『アイン＝ソフ＝オウル』

神の啓示の様に思いついたその技は、想像以上の結果を残してくれた。習得するのに時間をかけてしまったけれど、その甲斐はあると思う。コレでようやく超次元サツカ一の住人を名乗ることができののかな？

でもまだまだコレぐらいじゃ円堂君に勝つことなんてできないだろう。全てを一人で行なせる窮極の一でない、不可能を可能にする彼に勝つことなんて無理がある。

まだまだ気は抜けないな……

若干の気だるさを感じながら、スタジアムの端に積み重ねておいた紙束に視線を向ける。膨大な数の本や冊子が積み重ねられて山が形成されている。

実はコレ……全部秘伝書なんだよなあ……父さんが張り切った世界各国から取り寄せたらしいけど……流石な頑張りすぎだよお……

まあこの秘伝書を消化しながら、次は化身を習得したいと考えている。円堂君の世代

に化身を持ち込むなんて無粋だっという考えも少しわかるので、積極的には使わないつもりだけど、一つ化身が使えるようになったらやりたいなと考えている練習法があるんだ。

グラウンドの惨事から目を逸らす様に思考を巡らせていると、こちらに近づいてくる気配を感じ取った。トレーニングを積むにつれて、第六感までも成長してきたみたいだ。

「兄さん……コレどうしたんですか？」

破壊の跡を指差しながら、こちらに語りかけてきているのは妹のシエルだ。俺とかなり似ているけど、鋭利な印象を抱かせる俺の容姿と違って、どこか優しいイメージを与える。

それに俺と同じ4歳とは思えないほど利発で、できた子だ。俺は前世っていうアドバンテージがあるから当然だけど、この子は本当の天才というやつなのかもしれない。

ちよつとサッカーの練習をしていたら張り切りすぎちゃってね。父さんに謝らない

となあ。

「……必殺技ってやつを覚えたんですか？」

流石我が妹……察しが良すぎる。

「実は……な……。内緒にしといてくれないか？」

「いいけど、多分気づかれますよ？」

ウツ!! 言われたくないことを的確についてくるなあシエルは……多分怒られるだろうけどそれを気にするのは後でいいんだ。

でもわざわざグラウンドに来るなんて何か用事でもあるのだろうか？ 此処は少し家から離れているんだけどな。

「どうしたんだ？ 何か用事でもあるのか？」

「兄さんに聞きたいことがあって……なんでそんなにサッカーを頑張ってるんですか？ 突拍子のない行動に思えました」

「なんでつてそりや。夢があるから……？ それに最近には練習や修行するのが楽しくなってきたるし……一緒に遊びたいのかな？ ここ最近妹と遊ぶ時間が減っているかもしれない。あとで遊んであげよう」

「夢……ですか？」

「そう。夢。俺は将来的に絶対達成したいと思ってる目標、到達点があるんだ」  
「そうですか……私にも見わかりますかね？」

シエルはどこか寂しそうに笑った。俺は彼女の夢に関する答えなんて持たないけど、後悔をしたものとして、言っておかなければいけないことがある。

見つかるとか無責任なことは言えないけど、自分の気持ちに蓋をして我慢するってことは絶対やめたほうがいい。後悔するなら理想を目指して努力するんだ。それがそのうち夢になっているかもしれないよ？

「——!! ありがとうございませぬ兄さん!! なんだかよくわからないけどしつくりきました! 私! 我慢しません!!」

答えになってない様な気がしたけどコレで良かったのかな？

この時の俺は妹に送った言葉が、まさかあの様な形で自分に降りかかってくるとは思  
いもしていなかった。

## 4話：早すぎた覚醒

最早少年専用となりつつあるグラウンドは、完璧に整備されている。以前の破壊の後には全く残っていない。業者の手によって完璧に修繕された様だ。

グラウンドは室内照明によって照らされているもの、窓から見える空はすでに黒く染まっていた。

「うおおおおおおお!!」

いつもの如く、少年は夜遅くまでサッカーの練習を続けている様だ。広々とした室内空間に、少年の叫びが轟いている。しかし尋常ならざる状況に置かれている様だ。

命を燃やしているかのように、鬼気迫る声だった。

誰かが聞いたなら救急車を呼ぶに違いない。それほど追い込まれた声が少年から発せられていた。玉の様な汗が吹き出し、苦しそうに喘いでいるため、決して間違った判断ではないだろう。

……少年の影が蠢いた。何かが這い出でようとしているかの様に……ナニカが産まれたがっているかの様に。本来動くはずのないものが、確かに脈動したのだ。

少年の存在感が増幅し、強調される。空気が少年の気配一色に塗りつぶされる。世界の目にはもう少年しか映らない。

パキ……パキ……

殻が割れる様な音が聞こえる。ナニカがこの世に生まれ落ちようとしているのだ。

少年の影からナニカが羽化していく。枷を引きちぎり、影が少しづつ意味を持ち、形が明瞭になってきた。

ナニカの主である少年が手を虚空に向け、振り払った。

……星が瞬いた。一つの銀河が誕生する。6対計12枚の白磁の翼が羽ばたいた。空間が歪み、時間が歪む。

『星海の覇神 ルシフェル』

少年の化身が世界に初めて降臨した。天使の様な肢体を持つているにも関わらず、怪

しげな仮面で表情を隠す。

この世のものではない様な奇妙な気配を放っている。異星の生物。いや……異界の生物であるかの様に。

---

時間は流れもうすぐ6歳になるという時節まで時は進んでいる。小学校に入学する前に化身を発動することができて良かったなあ……

今ならなんでもできそうだ。地球を蹴ったら地球が動くんじゃないか……？ それぐらい今の俺は強いぞ!!

——何言ってるんだ？ なんだか自分の様子がおかしくなっていることに気づいた。

『疾風ダツシユ』

『風神の舞』

『タキオン・アクセラレイト』



早速、化身を召喚しながらグラウンドの中を駆け回っている。俺は今までに習得したドリブル技を続け様に発動させようと試みるが……

……技が上手く発動しない。やっぱり化身にリソースを割かれている状態で、イメージが安定しないのだ。ゲームもこういう仕様で常々不便だと思っていたのだけれど……慣れで改善できるのかな？

もうゴール前か……化身を呼び出したことで、身体能力は暴力的に向上しているから凄まじい敏捷性と脚力だ。コレなら化身使い達が必殺技に頼らないのもわかる。

じゃあ試してみますか。化身シユートって奴を。

『パラダイスロスト』

結果など言うまでもないだろう。スタジアムには過去最大の大穴が空いた。それだけだ。

化身を解いた俺は、あまりの疲労感にグラウンドに向かって倒れ込んだ。毎日、修行の最後にはこうなっているから慣れっただけ……流星に今日のは効いたな……

想像以上に化身を召喚している時の体力の消費が激しい。長時間全速力で走ったか

の様に肺が痛むし、疲労で身体中の筋肉が攣りそうだと。

精神的にも結構キツイ……化身みたいな特殊能力で追い詰められた時に発現するものだから、前世のトラウマを強引にできる限りフラッシュバックさせて自分の精神を痛めつけたのだ。死んだ瞬間の孤独感を思い出すだけで凍えそうになる……

結果が出たから良かったものの……成功しなかったらただの自傷行為になるとこだった。

それに言動もおかしくなっていた様な……地球を蹴るってなんだよ。ザナーク様でもそんなこと言わなかったぞ……

化身ってこんなにやばいのかあ。発動中の全能感というか脳内麻薬？ みたいなものもとんでもないし、反動もエグい。コレもまた要訓練だな……

まあ化身は相手に使われた時にしか使うつもりはないんだけどな。将来的には仕方がないかもしれないけど、今の目的は円堂君と戦うことなのだから。

そうして体を休め、目を瞑って思考に耽っていると、突然聞き慣れた声に話しかけられた。

「アインス様！ 大丈夫ですか!？」

赤い髪の女性が視界に映る。彼女はアトリ。俺の専属メイドってやつだ。俺より1

0歳年上で、今はメイドの見習い中だという。俺が生まれた時からの付き合いだからほとんど、姉みたくないものだけだな。

でも話しかけられるまで気づかなかったなあ。普段なら近づかれてる時に気づくのに。想像以上に消耗しているのだろう。

大丈夫だよ。ちよつと疲れただけだ。どうしてここに？

「お飲み物をお持ちしよう」とこちらに向かっていたら、すごい音が聞こえたので走ってきたんです!!」

……聞こえちゃったかあ。流石にトンデモ威力過ぎだ……化身技……

「じゃあ、飲み物もらってもいいかい？」

「はい! …こちらです!」

そう言って起き上がった俺にアトリは水筒を手渡してくれる。……はあく!! 生き返るううう!!!

「…………コレは！　また壊したんですか!?　アインス様!!」

アトリは瓦礫の山を見ながら、俺を責め立てる。

えへへ…………そんなつもりはなかったんだけど……

「もう！　お父様が怒らないからって!!　ダメですよこんなことしちゃ!!　私はサッカーは分かりませんが、こんなことには普通ならいいですよね!!」

「…………ごめんなさい。でもサッカーって修行していると、こんなことも起こるんです。学校とかも平然と破壊するスポーツなんです…………」

「それにこんなに汗をかいて…………無理しちゃダメですよ？　まだまだ子供なんですから」

アトリは甲斐甲斐しく、俺の汗をタオルで拭き取ってくれる。ありがたい心配ではあるけど無理は承知だ。後悔をしたくないからな。

!!!　此処で一つ俺の灰色の脳細胞が活動を始めた。

…………目的のためにアトリを仲間を引き込んでおくべきでは？　サッカーの知識もな  
いみたいだし、適任な気がする。結構とんでもない訓練をするつもりだから、誤魔化せ

る相手じゃないといけないしな。

「アトリ、なんで俺がこんなに頑張ってると思う？」

「え……？ 強くなりたいたいからじゃないんですか？」

「間違ってるけど、一番の理由は強くなってる父さんを喜ばせるためなんだ。だから俺がコレからどんな修行をしても内緒にしてくれないかい？」

「アインス様もそんなことを考えてたんですね？ クールなフリをして何も考えてないのかと思ってました。……でも確かにその思いに水を差すのは不粋ですよ。……わかりました。内緒にします」

なんだかアトリには色々見透かされてる気がするんだよなあ……

でもコレで大丈夫だな。アトリの口封じは済んだ。とても真面目な女性だから嘘をついたり、約束を違えたりなんて心配はないだろう。……正直いうと、生まれた時から、俺の専属として世話してくれていたから頭が上がらないのだ。話を聞いてくれて助かった。

ゴホン……とにかく協力者は手に入れた。此処に出入りするのはアトリだけにしておこう。そうすれば、俺の異常性はバレないはずだ。

「はい、じゃあ今日の練習は終わりにして帰りますよアインス様。ほらおんぶしてあげますから……いいんですよ。まだ子供なんですから」

拒否しまくる俺の言葉に耳を貸さないアトリ……15歳の女性におんぶされる精神年齢成人済みの心境やいかに……

——帰宅後——

ブクブクブクブク。

まるでプールであるかの様に大きい風呂に浸かりながら次のやるべきことを整理しようと思う。

今日やつとしばらくの間目標としていた化身の獲得に成功した。それだけでも嬉しいのだが、それ以上に新たな可能性が見えてきたことの方が嬉しい。

それは新たなトレーニングのあり方。

【デュプリ式訓練法】だ。

デュプリ……それは化身を人型に変化させ、選手として扱う技法のこと。ゲームでもアニメでも描写が少なかつたけど印象に残っている人は多いと思う。俺もその一員だった。

みんなが1番覚えているのはテンマーズなのかな？ 意外とファンが多いチームだからな。主に女性キャラに……

あの時、フェイと天馬以外チームメンバーがいないからどうなるのだろうかという疑問に思っていたら、急にフェイが残りの9人を呼び出したから驚いた。コレ化身より強いだろ……！ そう思った人もいると思う。デュプリはそれぞれ必殺技も使えるし、とんでもない能力だ。

後は……映画版のダンボール戦機コラボの敵、アスタもデュプリを使っていたはずだ。デストラクチャーズ全員がアスタの力を元に生み出されているのに、天馬たちと互角の戦いを繰り広げたのは驚嘆に値する。しかもそのアスタも本当は……ってんだから恐ろしい。

総じてデュプリはとんでもない力だということがわかっていただけだろうか。こんな力を使えたら、修行も更に効率的になると思わない？ 俺は思う。

そんなデュプリを具体的にどうやって修行に活用するのか、俺は2種類方法を考えておいた。

一つ目の方法は、どこぞのチート忍法のように、分身の経験や訓練の成果が本体にフィードバックされるのではないかとという仮定の元、デュプリも併用して訓練を行うという手法だ。デュプリを呼び出して1人で修行を行えば、その効果も10倍だ。

二つ目の方法は、デユプリを用いて更なる負荷をかける方法である。俺は数ある必殺技の内に、重力を操る技があることを覚えていた。その名も『グラビティション』。強力な重力場を発生させることで、敵からボールを奪う必殺技だ。

コレをデユプリにかけてもらって、俺にかかる負荷を高めながら修行するというわけだ。脳筋だけど効果的だと思う。とある野菜星人もこの方法で飛躍的に戦闘力を高めていたし……

でも根本的な問題として、どうやってデユプリを出すのかがわからないんだよなあ……セカンドステージチルドレンであることが条件とかだったらキツツイなあ……

お風呂の中で浮きながら考え事をすると、脳が沸騰しそうになる。あつつうー。

「アインス様ーそんなに長くお風呂に入っているとのぼせちゃいますよー」

浴室の中でアトリの声が反響する。

——いや違うのだ。俺と一緒に風呂に入ってくれって言うてるわけじゃない。専属メイドだからって理由でアトリが俺と一緒に風呂に入ろうとするのだ。断ると悲しそうにするから断れない……



ホントだよ？

## 5話：デュプリは友達に数えられますか？

《どうしたらデュプリを生み出せるのか》

そんな難題は、案外簡単に解決できた。化身を出すまでに1年半ぐらいかかったのに、デュプリはもの一瞬で発現したので、拍子抜けだな。

化身の力——KPというやつだろうか。それを10分割する。そんな単純な方法で、デュプリを扱うことができたのだ。化身アームドの様に、自分を核にして化身を纏うのではなく、化身の力を分割し体外に放出する。感覚的な問題すぎて、表現しにくいけど、とりあえずそういうことだ。

とは言っても、デュプリを生み出し、維持するためには集中力が必要になるから、簡単な技術ではないと思う。コレを指パッチン一つで発動するセカンドステージチルドレンってやつぱりすごいんだな。エルドラドが恐れるのも当然だ。

早速俺は体から化身を切り離していく。2度目ともなると案外再現は容易い。

背後の影が蠢き、化身が召喚されようとしている。しかし、そうはならなかった。化身の元となる力が分割され、光子となってアインの周りに散ったのだ。そしてその光の粒から10人の男女が生み出された。

よし……無事にデュプリを呼び出すことができた。

年齢も体格も性別もバラバラでなかなか個性的な分身達だ。皆銀髪で青い瞳をしていることは一致しているが、雰囲気や容姿は全く異なっている。自分に似てるからちよつと不気味なんだよなあ……ドツベルゲンガーって不吉だろ？ そんな感じ。

デュプリ達はみな、無言で本体である俺をじつと見つめている。

「俺の考えって共有されてるのかな？ 俺が何して欲しいかわかってる？」

その問いを聞いて俺の化身、デュプリ達は揃って頷く。どうやら俺の思考は俺の半身達にも共有されている様だ。いちいち呼び出すために指示をしないといけないのは不便だから助かったな。

「じゃあ早速修行を始めよう。ポジションは分かれてるんだよ……？」

デュプリ達はまたもや頷いた。

「そう？ 都合がいいな。えつと……ムキムキな君がG K？ ——違う？ 君はM Fか」

他のデュプリと比べて一際小柄な女の子が手を挙げています。

「ああ、君？ ちょっと意外だったよ。 ——ごめんごめん、他意はないんだ。名前は————エルフ？ みんな名前があるんだね。 ——えつ？ 覚えないと練習しないって？ デュプリが本体に逆らうとは生意気な」

デュプリ達が俺の方に近づいてきて、メンチを切ってくる。みんな俺よりもガタイがいいからちよつと怖いって……自分に似てるのも嫌だし……

「……わかったよ後で覚えます。 だから修行するぞ！」

そう聞いたデュプリ達は一齐にスタジアムから逃げ出そうとする。どうやら俺の指しを拒否しようとしているみたいだ。

デュプリたちの服を掴み引き止める。結構な勢いで引きずられてしまった……本体に逆らいすぎだろ、この分身……

「逃げるなって、何を嫌がつてるんだ？——修行がハードすぎる？俺は毎日欠かさずにやってるんだ。気にすんなって」

「じゃあ、まずは軽めにマラソン50キロ、それからパス練習で休憩、その後はドリブルで10キロ、シユート1000本といこう。あとは……タイヤ引きをして……必殺技練習かな？」

『ぶんしんフェイント』

『ざんぞう』

『とうめいフェイント』

10人のデュプリが揃って逃走していく。今度は必殺技までふんだんに使用して、ずいぶん必死な様だ。俺が時間をかけて覚えた技を逃げるために使うのか……

少しイラつとした俺は、グラウンドから走って逃げ出していくデュプリたちに向かって、足元に転がっているボールを全力で蹴り飛ばす。あんまり俺の修行を邪魔する様なら、実力行使も厭わないぞ？

「逃げ出したなら、ファイアートルネード治療法するからな？ 余計なことは考えるな

よ？ —— ヨシ！ —— じゃあその共通練習が終わったら、ポジションごとに分かれて練習だ」

「MFとDFが攻めと守りの連携練習、GKとFWは俺と一緒にシュートとキヤッチの練習だ」

ようやく人に向かってシュートを打てるなあ!! 自分の必殺技の威力を把握できるのは嬉しいことだ。父さんたちにも見せてないし、受けてもらってもいなかったからやっとならストレーションが解放される。

やっぱり必殺技と必殺技のせめぎ合いが見たいんだよ!!!

「———？ 　なんでエルフ泣いているんだ……？ 　怖い……何が？ 　修行は楽しいだろ？」

こうして前途多難でこそあるものの、無事にデュプリ式訓練を始めることができた。予想通り、デュプリの修行結果は本体の俺にフィードバックされ、成長を感じられた。デュプリを消した時は気絶するかと思うほど、体力・精神力ともに磨耗してしまったが……まあ慣れるだろ！

事前に覚えておいた『グラビティシヨン』も役に立ちそうだ。初日ということで2倍の重力をかけてみたけど、想像以上に辛かった。でもそれが気持ちいいんだ。

更に俺は強くなれる。そう実感した。

だったら……次にするべきことは実績作りかな？ ドイツ代表に選ばれる様な能力を世界に示さなければいけない。今の俺の実力で、国を代表する立場になることができるのかは不明だがいつかはやらなければいけないことだ。

だから、チームに入ろう。俺1人だけでなく、仲間と共にサッカーする。そんな時期が俺にも来たのだ。連携力には自信がある。イメージトレーニングは欠かしていないからな。

後日、父さんにサッカーチームに入りたいと言うと……とても喜ばれた。なんでも俺が同年代と仲良くなるうとするのが珍しいようで……

確かに友達はいないよ？ 話し相手も家族かメイド、執事達って言う悲しい人間かもしれないけどさ……だからって実の息子をコミュ障扱いしないでくれよ……そもそも敷地内から出ないから友達ができる機会なんてないじゃないか……

「え？ シエルは友達がいるって？ お茶会が定期的に開かれてる？ そんなバカな!?! 俺は誘われたことすらないぞ?!?!」

「全く冗談が上手だなあ。嘘をつかないでくれ、アトリ。——嘘じゃない!?!」  
心が折れそうだ。

どれだけ体を鍛えたとしても、未だに俺の心は貧弱なままだった。

アトリ……俺、分身できるんだけど……それって友達に教えていいのかな？



「初めまして、アインス・リヒターと言います。よろしくお願ひします」

俺のこゝを見つめる大勢の子供達を相手に挨拶を行う。こういう経験が浅いから、とても緊張して動悸がする。この時ばかりは表情筋がカチカチで良かったなあとしみじみ思った。動揺を悟られるわけにはいかない。クールにいかないと。

こうして父さんの友人が監督をやっているという、サッカークラブ「ヒンメルクラウン」に入るこゝとなつたわけだ。

小学1年生から6年生まで幅広い年代の子どもたちが揃っている。人数も結構いるから、先ずはスタメンを取らないといけないな。頑張るとしよう。

ついでに友達もね……………？

## 6 話：運命との邂逅

「Das Flugzeug wird bald in Japan eintreffen. Bitte bleiben Sie sitzen und warten Sie, bis das Flugzeug zum Stillstand gekommen ist」

——当機は間もなく日本に到着します。機体が完全に停止するまで、着席したままお待ちください。

窓から、懐かしの故郷が見える。帰ってきたなあ……

父さんに頼み込み、1週間程度の時間をもらい日本への旅行を行うことにした。もうじき小学校に入学して自由がなくなるわけだし、この程度の我儘は許されるだろう。

家族には「旅行費用は気にしないで楽しめ」と送り出されたので、気分はルンルンで

ある。いいものを食べたり、遊びまくるとしよう。

シエルも一緒に着いてきたがっていたが、父さんと母さんにまだ早いと断られていた。本当なら家族旅行でも行きたいところだけど、父さんも母さんも仕事で忙しいからなあ……

そんなこんなで父さんが所有していたプライベートジェットに乗ること10時間以上。

俺はドイツから懐かしき、日本に降り立った。

目的はいわゆる聖地巡礼。稲妻町を訪れるつもりだ。

イナズマイレブン 生誕の地。イナズマイレブン シリーズの原点の場所。そんな場所を訪れることができるなんて、ファン冥利に尽きると思わないか？

空港から出た俺は、凝り固まった体をほぐしながら周りを見る。東京の夜景は、俺が生きていた時代より近代化されていないものの、懐かしい光を放っていた。

ああ久しぶりに感じるこの密集感、このビル群……。日本って感じるよなあ……

そうして思い出に浸っていると、視界の端に赤い髪の女性がチラチラと映った。前屈

みになりながら、身長の低い俺に目を合わせ、笑顔でこちらを見つめている。

アトリだ。6歳児が1人で旅行をできるはずもなく、伴としてついてきてもらったのだ。

「アインス様どうしてわざわざ日本に来たんですか？」

当然の疑問だろう。いきなりの話だったからな。

「日本文化に関する本を読んで興味を持ったんだ。それになんでも昔、面白いサッカーチームがあつたらしいんだ。だから興味があつてね」

「へえー情報収集つてことですか。……でも態々そんなことをしなくても、アインス様の方が強いと思えますけど。私のアインス様は最強なんです!!」

「いや、まだ僕は6歳だよ？ 本気を出した大人には敵わないよ。あと、そんな盲信の様な信頼を向けられても緊張するから言わないでくれ」

アトリは困った様に首を傾げる。別に変なことは言っていないだろうに。

「何処か行きたい所とかある……？　——ありそうだね。教えてよ」

彼女は右手で観光雑誌を握っていた。……いつ買ったのだろうか？　気が付かなかった。アトリもそんなに楽しむつもり満々だったのか。それはそれで嬉しいけどさ。

「キョウト、オオサカに行きたいです！」

「それは最後ね……此処東京だから……」

まあ日本には一週間ぐらい滞在する予定だから、ゆっくりと観光するでしょう。懐かしいの故郷だしな。

三日間程、東京をぶらりと観光して楽しんだ俺は、お高い宿泊施設のスイートルームに泊まっていた。

日頃の健康的な生活習慣によって朝早くから起きてしまった俺は、簡単にランニングを済ませ、シャワーを浴びて外出の準備をした。俺だけなら、すぐにでも、ホテルを

チェックアウトできる状況になったわけだ。……俺だけなら。

いつものメイド服とは違い、普段着を着込んでいる同行者はベッドに寝転び、魘されていたのだ。

「アインス様……お腹が痛いですう……」

昨日色々と食べすぎたんだよ。寿司から始まって天ぷら、蕎麦、うどん……締めのレストランまで……細い体によくそこまで入るものだと感心した。でもお腹壊すんじゃないなあ。

「俺、見て回りたいところがあるから、おいてくよ？」

「そんなあアインス様ったら非情なあ……こんな美女が苦しんでいるのを放っておくなんて……」

アトリは恨めしそうに、体をわなわなと震わせながらこつちを見つめてくる。そんな目で見られてもこちとら未就学児だぞ？なんの期待をしてるんだ。

「胃腸薬は買ってきてあげたでしょ？ 理由が自業自得だし、別に放っておいても大丈夫そんな症状なんでもん……まあ本当にヤバかったらフロントに電話してね」

それに今日は旅行の目的である稲妻町に、向かうつもりだ。修行時間を割いて態々日本を訪れたのも、聖地巡礼のためなのだから。

俺はホテルの人に宿泊の延長を無理を言ってお願ひし、稲妻町へ向かった。アトリも明日までには治ってればいいけど。

電車を乗り継いで、数時間。なんとか稲妻町にたどり着くことができた。電車に乗ったのは久しぶりだし、スマートフォンみたいな便利なものはないから、電車に乗るのも苦戦してしまった。俺って文明の力に頼り切っていたんだなあ……

駅から数分歩き、稲妻町商店街へと辿り着いた。歴史の入ったレトロな街並みが逆に目新しかった。ドイツの街並みも味があって魅力的なのだが、やっぱり俺の魂の故郷は

日本のようで、こつちの方が落ち着くなあ……

ぐうぐう

おっと、お腹が鳴ってしまった……携帯電話の時計を見てみると、もう12時になっている。まずは腹ごしらえとしよう。

お！ 暖簾がかかっているぞ！ 10年後しか知らないから不安だったけど、どうやら営業中みたいだ。入ってみよう。

ガラガラと音を立てながら、引き戸を開き、店内に入る。そこにいたのは丸いサングラスをつけた厳つい店主ただ1人だった。

……お昼という書き入れ時にも関わらず、閑古鳥が鳴いてるなあ。メインの客層が学生達だからいいのだろうか？

「ごらっしやん」

あの渋い声が聞こえる。聞いているだけで、なんだか安心する。

この人が伝説のイナズマイレブンの1人、【響木 正剛】か……なんか感動するなあ。



初めてのイナズマイレブンに登場する人物との邂逅だ。

「こんな店に子供が来るのは珍しいな……ボウズ、1人か？」

「はいそうです。ダメでしたか？」

「まあ構わんが……お前はそこらのガキとは違いそうだ」

まだ小学生にもなっていない様な子供が、1人で飲食店に入るって中々ない光景だけど、なんとか受け入れてもらえた様だ。

俺は店内よちよつと高いカウンター椅子に跳躍して座る。まだ身長が低いから、大体の椅子は足がつかないのが不便だ。

「注文は？」

手元にあつたメニュー表を手に取り、注文を吟味する。此処は何を頼もうか。うーん……決めた！

「大盛チャーシューメンとチャーハンと餃子お願いします」

「……そんなに食えるのか？」

「問題ありません。そのぐらいの量なら残さず食べますよ」

響木さんに疑問に思われるのも当然だとは思いますが、心配はない。沢山運動しているせいで食事を多く取らないと、落ち着かないようになってしまったのだ。これでも腹八分目を目安に割と控えてる方だし。

注文を聞いた響木さんは体を翻し、調理台へと向かう。楽しみだなあくお腹減ったんだよ。

「なんでこの町にきたんだいお客さん。ここらの人じゃないだろう」

響木さんの調理風景や店内を見ながら時間を潰していると、徐に話しかけられた。どう答えようか……ここは一つ、ジャブを打ってみよう。いずれ、響木さんとは関わることになるはずだから顔を覚えておいてもらいたい。

「観光に来たんです。なんでも昔、稲妻町にはイナズマイレブンって人たちが居たそうなので……ご存知ですか？」

「……どこでそれを聞いた？」

「イナズマイレブンの情報ですか？ ……ネットに転がってました。過去の記録をまとめた記事を偶然見て興味を持ったので……」

「……そんな奴らはもう居ない。探すだけ無駄だ」

「そうなんですか……？ 会ってお話ししたいと考えていたんですけど……」

今、イナズマイレブン本人と話していることを考えると意地悪な言葉だよな。まあ俺も嫌な記憶を掘り返してしまっているし、お互い様ということにしてもらいたい。

「はい、お待ち」

ゴトリ、とテーブルの上に提供されたラーメンは、白い湯気を放っている。美味しそうな醤油の香りと、琥珀色のスープが実に食欲をそそる。

たまらず俺は、割り箸を使ってラーメンを口に運んだ。

熱々のチャーシューメンは、どこか昔懐かしい味がした。とんでもなく美味しいというわけではない。しかし、涙が溢れそうになるのだ。チャーハンはパラパラで本格的だ

し、餃子も口に入れた瞬間、肉汁がジワリと染み出す。なんでこんなにお店がガラガラなんだろうと疑問に思ってしまう様な美味しさだった。

「うまいか？」

「はい。美味しいです」

「そうか……お前はサツカーをやってるんだよな？」

「そうですね。一応。それがどうかしましたか？」

「楽しいか？」

「ええ。間違いなく」

「名前は……？」

「アインスです」

立て続けに行われる質問たちに、回答していく。俺が子供だから暇だろうということ、話を繋いでくれているのかもしれない。いや、名前を覚えてくれていたのかな？

しかし、それから響木さんは、俺がラーメンを食べ終えるまで一言も喋らなかつた。食事の邪魔をしちゃ悪いと気を遣ってくれたのかもしれない。

「美味しかったです。ご馳走様でした」

「おう。また来い」

「はい！」

また来い、か。なんだか気難しそうな人だから、気に入られたようで嬉しく思う。俺つてば少しチョロいかもしれないな。

さてと、そんなことを考えてないで、そろそろ店を出ようか。

椅子を飛び降り、雷雷軒の戸を開く。次は商店街でも歩こ……………

「お前は何を目指してそんなに強くなろうとしているんだ？」

背後から投げかけられた言葉に、店を出ようとしていた足が止まる。思いがけない質問だった。あまり考えたことはなかったな努力する理由なんて……………だってそんなのサツカーを始めた時から変わっていないし。

「雷鳴を撃ち落とす、宿願を果たすことですよ」

食事を摂り終えた俺は、商店街から雷門中へと歩きながら、軽く街並みを見学している。いつか帰ってくるから、そこまでじっくりとみる必要はないかな。

足を動かしているうちに、俺は河川敷に着いていた。川に掛かった橋の下に、サッカーグラウンドが見える。

此処が円堂くん世代の雷門中がメインで使っていた河川敷グラウンドか……10年前にはもう存在していたのか。

確か、中学校のグラウンドは他の部活に占有されていたからここをよく使っていたはずだ。そう考えると、なんだか感慨深いなあ。

昼過ぎの河川敷に小さな人影が見える……ん？ 誰かがサッカーを練習しているみたいだなあ。いいねえ、そう来なくっちゃ。

目を凝らして、数百メートル先を見やると、視界にはオレンジ色のバンダナをつけた

少年が映った。

——!? そうか……もう、円堂君はサッカーに出会っていたのか!

思わず俺は彼の元に駆け出した。話してみたい。その一心で。

雲で覆われた薄暗い空の下。誰もいない河川敷で、一人の少年の荒い息遣いが微かに聞こえる。

——どうやらバンドナを巻いた少年がサッカーボールを使ってシユートの練習をしている様だ。ゴール前に立ち、一つのボールを繰り返して蹴り込んでいく。何度、繰り返していただろうか。少年の集中力も体力もだんだんとすり減っていった。

「あつ! ボールが!!」

少年はどうかやらボールを蹴り損じてしまった様だ。サッカーボールが、ゴールとは全く異なる方向に飛んでいってしまった。

転がる先は、水量の多い川。このままでは、ボールは川に流され、少年の手に収まる

ことは二度となくなってしまうだろう。無論、少年が川に入ることなど危険すぎて許されない。

しかしそんな未来は実現しなかった。させなかった。

銀髪の少年が、ボールを足でトラップしたのだ。そのボールを数回リフティングしたのち、持ち主のバンダナの少年の方へ蹴り返した。

「おお！　ありがとう!!　あわわあ!?!」

蹴り返されたボールを両手でキャッチしようとした少年は、GKとしての資質が未だ目覚めていないのか、ボールを取りこぼした。

「ありがとう!」

ボールを拾い直したバンダナの少年は、銀髪の少年に感謝を告げる。銀髪の少年もこちらに近づいてきているようだ。

「構わない。サッカーが好きなのか?」



「うん！ サツカー大好きだよ!! じいちゃんのノートを見てビビッと来たんだ！ イナズマが落ちたみたいだね!!」

「ハハハツ!! そうか！ やっぱりそうなんだね!!」

銀髪の少年は、その言葉を聞いて、その涼しげな相貌を崩した。普段の凝り固まった表情からは考えられないほど嬉しそうに、息を漏らす。

「どうしたの？ 変なこと言ったかなあ？」

銀髪の少年の豹変に対し、バンダナの少年は手を頭の後ろに回しながら、不安げに問いを立てた。髪の毛はツンツンと逆立っている。

「いや。なんだか嬉しくなっただけだ。君、名前は？」

「円堂守！ そっちの名前は？」

「アインス・リヒター。アインと呼んでくれ」

「じゃあ僕も、守って呼んでよ!!」

天空を覆い隠していた、雲たちが、少しずつ、少しずつ消え去っていく。薄暗かった世界が、雲の間に生じた間隙から差し込む光によって照らされつつあった。

「アインのボールを受け止めた時、なんだかビビッと来たんだ！ サッカー好きなんだろう？」

守はサッカーボールを蹴る様なジェスチャーをしながら、目の前に立つアインに向かって興奮しながら話しかける。

「まあな。俺はそれなりにサッカーをやってるし」

「やっぱりそうだ!!!」

雲海が稲妻町を避けるかのように、完全に消え去った。燦々と輝く太陽によって、大地が煌めいて見えた。

「だったら……!!!」

大気が震え、肌がヒリつく。何かが起こる。そう思えてならない。

守は手に抱えたサッカーボールをアインの方に突き出しながら、そう前置きした。そして、語りかけたのだ。

「サッカーやろうぜ！」

遙遠き天空で雷鳴が荒々しく、鳴り響き、その余波は大地をも揺るがした。忽ち雲が消え去り、快晴となった空でこの様な現象が起こるのは些か稀なことだろう。しかし、そんなことが起こるのも当然だ。

ここで、今、斯して運命が出逢い、交差し……

伝説の序曲が奏でられたのだから。

## 7 話：約束

初めて見た守君は、かつての彼より幼かった。しかし、本質は変わらない。サッカーを愛する彼は、俺の眼にさながら太陽のように映ったのだ。

俺は守君の思い出のボールが、川に流れそうになるところを受け止め、彼と話すキツカケを作った。無理なく話しかけられただろうか。変なやつみたいに思われてないかな??

それからは守君に誘われて、サッカーで1、2時間ぐらい遊んだ。とても充実した空間で、あつという間に時間は過ぎ去ってしまった。

そうしてサッカーを終えた俺は、現在彼の背中を追いながらある場所へ歩いていた。

「ただいまー!!」

「おかえりなさい。守……あら? お友達?」

この人は円堂君のお母さん……確か温子さんだったかな？　優しそうな顔をした女性が、円堂君の言葉を聞いて部屋から玄関へと出てきて俺たちを迎えてくれた。

「そうだよ！　アインっていうんだ！　河川敷で友達になった!!」

「こんにちは。アインと言います」

「あら！　随分とカッコいい子を連れてきたのね。この辺りに住んでいるの？」

「いえ、ドイツから観光に来たんです」

温子さんにはイナズマイレブンのことは言わない方がいいだろうし、適当に濁しておこう。

「ええっ！　本当!?　ドイツから?!?!?　——親御さんとか心配してない？」

「どうやら両親と来ていると思われるってしまったみたいだ。それも当然か。……チビだし。本当のことなんて言えるわけないから……」

「大丈夫です。携帯電話を持っているので」

懐に手を入れ、しまっておいた携帯電話を取り出した。本当は一人だけど、心配させてしまうから嘘をついてしまった。

「うーん……なら大丈夫かしらね……あつ！　こんなところで話しているのもなんだし、上がってちょうだい」

「ありがとうございます。お邪魔します」

俺は靴を脱ぎ、守君の後をついて階段を登っていく。年季の入った階段が、ギシギシ音を立てる。日本家屋のこの感じ……こんなことですら思い出深いな。

「ここが守君の部屋かあ……すごいサッカー好きなんだろうなって感じがするよ」  
「でしょ？　落ち着くんだよなーこれが」

壁中にサッカー選手たちのポスターが貼り付けられている。選手たちの名前はわからないけれど、おそらく日本の有名選手なのだろう。守君はまだ、海外サッカーに関心

がないだろうしな。

守君は、部屋に入ってすぐ、先ほどまでサッカーに使っていたボールを棚に並べた。ボールの周りには、大介さんの写真と共にグローブやノートが共に並べられている。

「これは……」

俺は思わず、あるものを見て声を漏らしてしまった。

「おおっ！ アインはお目が高いなあ!! それ、俺のじいちゃんが使ってたグローブなんだ。ついこの前、物置の中に押し込まれてたのを見つけたんだよね」

コレが円堂大介さんの……グローブ。見かけだけで言ったら、ただの古ぼけたグローブでしかないが、コレには凄まじい思いが詰まっていることを知っている。守君のサッカー愛の根源とも言える品だ。

「後、これも見てくれよじいちゃんの凄技特訓ノート!!」

守君は年季の入ったノートをペラペラと捲る。

……きつたねえ字だな!! 書き殴られたという表現ですら甘い線が、ノートの中でぐちゃぐちゃになっていた。

数年ぶりに日本語を書く俺でも、絶対にコレより綺麗な文字を書ける。確かにこれは、守君以外は読めないのも納得だ。

「独特な文字? だね」

「そうなんだよなあ……じいちゃんの字が汚すぎて読めないんだよ。何度も読み返してるんだけどさー」

まだ守君も読めなかったか。それほど難解な文字だ。まるで、古代文字みたい……いやだから文字には見えないって。

守君は困った顔をして、ノートを上下左右に回しながら解読を試みている。数分、唸りながら向き合った後、こう言った。

「うーん……やっぱりわかんないや!」

そう言って、彼は解読を諦め、ノートを棚に戻した。



窓から夕日が差し込んでいる。そろそろ帰らないと……かな？　アトリも心配だし。

「そろそろ、お暇しようかな」

「そっかー。もうそんな時間かあ」

守君は悲しそうに、淡々の髪の毛をしなしなにさせる。俺も多分しなしになっっているに違いない。

「そうだアイン!!　観光に来たんだろ?　だったら見て欲しい場所があるんだ!!　帰る前に一箇所だけついてきてくれないか!？」

行きたいところ……あそこかな？

幸い俺には心当たりがあった。

「もちろん。それぐらいなら構わないよ」

円堂君に手を引かれ家を飛び出して行った。太陽が落ちてきている。もうすぐで日

が暮れるだろう。

梯子をひたすら登り続ける。ここまで来ると地面は遠く、かなりの高所だ。俺は必殺技を使って高所に慣れているから問題ないけど、高所恐怖症の壁山なんかは手を滑らせてしまいそうだ。

「見てくれよアイン！ 綺麗な夕日だろ？」

「ああそうだね。すごく綺麗だ……」

円堂君に誘われて訪れたのは稲妻町の平和のシンボルである鉄塔だった。作中で何度も利用された、まさに稲妻町を代表するスポットと言えるだろう。

夕日が稲妻町を照らし、幻想的な姿を見せる。綺麗だ。涙が出そうになる。

様々な人々の心を動かし名所の魅力は、確かなものだった。いつまでも見ていたい、いつか終わりが来てしまうのが勿体無い。そう思えるほどに。

「アイン。今日は本当にありがとな！ 俺……スツゲエ楽しかったんだぜ!! こんなにサッカーを楽ししいと思っただのは初めてだ!!」

「奇遇だね。僕もだよ！」

円堂君の顔が夕陽によって照らされている。屈託のない笑顔が俺の心に沁みていくのを感じた。俺もこんな風に笑うことはできるんだろうか。

「なあアイン。いつかまたサッカーやろうな!!」

「当然だよ。僕たちはまた出会うだろう。そしていつか……最高の舞台で戦わないかい?」

「おお! 確かにサッカーで戦うのも楽しいよな! じゃあ指切りで約束しよう!!」

守君と小指を繋ぐ。指切りげんまんなんて言葉、久々に聞いたな。

「絶対にまた会って一緒にサッカーをするんだ!!」

「そしていつか、世界の頂上で最高の試合をしよう」

「ゆーびきりげんまんうそついたらはりせんぼんのーます。ゆびきった!!」

今まで経験した指切りの約束は全て忘れてしまった。きっと約束は守れていないし、守られてもいないだろう。

だけど……この約束は絶対に忘れないに決まっている。

「また逢おう。 円堂守」

「うん！　じゃあなあああ——！！」

鉄塔から無事に降りた俺たちは、日が暮れる前に別れることにした。名残惜しい思いもあるが、縋る必要はない。必ず再会するのだから。

守君は大きく手を振っている。俺も珍しく、全力で手を振り返した。

——とある場所——

「ここがお日さま園か……。」

「全くうー！ 調べるの大変だったんですよ？ アインス様あ……でもなぜ孤児院に来たんです……？」

「少し用事があつてね……調べてくれてありがとう」

「……畏まりました。詮索はしません。でも何かあつたらすぐに言つて下さいね？」

「……ありがとう。早速入ろうか」

——大阪——

「うわあ!! 高い!! すごいですねえ!!」

最終日、俺達は大阪のナニワランドを訪れていた。今はアトリが観覧車に乗りたいというので、付き合っている。アトリは若い頃からあまり自由がなかったから、こういう経験は珍しいのだろう。とても楽しそうにしていた。喜んでくれるなら何よりだ。

ナニワランドに来た理由は勿論、ナニワ地下修練場の搜索。当然まだ無かったけどな。

仕方ない。アトリが満足するまで、観光に付き合っつてナニワギャルズの溜まり場でメシでも食うか。

「アインス様！ 早く、タコヤキ！ オコノミヤキ！ クシカツ!!」

……彼女は花より団子だったみたいだ。この前お腹を壊したにも関わらず、アトリは相変わらず、食い意地が張っている。

そうして俺は、リカのお母さんが経営していたお好み焼き屋を訪れた。

味は良かった。だけど、食事に集中できなかつたんだ。

食事中すごく視線を感じた。

嫌な予感がする。

——俺は選択をミスったのかもしれない。

——飛行機の中——

「どうだった日本は？」

「気に入りました!! 景色は綺麗だし、人は優しいし、何より食べ物は美味しいし!!!」

「そのうち日本に引っ越すつもりだから付いて来るなら心の準備をしておいてね」  
「へっ!？」

## 閑話：監督たちの畏れ

——ドイツ——

私は小学生のサッカークラブチーム、「ヒンメルクラウン」を監督しているジニウスというものだ。小・中・高・大とサッカーをプレイし続け、成り行きで今は今は監督という大任を任されている。本業はスポーツショップの経営だ。

我ながら、サッカー漬けの人生だなと笑ってしまう。ここまでサッカーを愛するとは、過去の私には想像もつかなかつただろうな。

紆余曲折あつて、先代の監督から「ヒンメルクラウン」を引き継いで、早5年。様々な苦悩がありつつも、チームをうまく運営し、成長させているという自負があつた。子供達をより良い方向に、サッカーという世界を楽しめる様に、導くことができていると誇りすら持っていた。

実際に子供たちの努力によって、年々大会実績も良くなっていったから、裏付けは為



されていると信じたい。

しかし、そんな私の監督としての自負や自信は、ただの自惚れだった。彼をどう導くべきか、私には全くわからない。

……彼は入団した年齢6歳にして、あまりに選手として完成していたのだ。心・技・体。スポーツに必要な要素全てが、子供とは思えないほど磨き上げられていた。

まさに天に愛された存在。ギフトッドというやつなのだろう。彼のような才能を、私は未だかつて見たことがない。監督として、大人として私はどうあるべきなのだろうか……

そう私を悩ませる人物は、子供の頃から共にサッカーをプレイしてきた親友の子供だ。というのだから、尚更救われたい。

もし彼が在野の原石だとしたら、私より優れている指導者に快く送り出せるのだが、私は親友に子供を預けられた信頼を裏切るわけにはいかないのだ。チンケなプライドだと人は言うだろう。それでも私は期待を裏切れない。

だからこそ、私も指導者として成長しなければいけない。彼を導くに値する人間へと。

そう決意を胸に秘め、熱い想いを燃やしていると、練習時間になり子供達が集まってきた。彼を紹介しよう。

「今日からこのチームに入ることになったアインス君です。6歳だけど、サッカーの実力は目を見張るものがあるから、みんな仲良くしてあげてくれ」

はーい!!!

子供達から返事が返ってきた。優しい子供達だ。じゃあアインス君からも一言もらおうか。そう考えた私は、彼の肩を優しく叩く。

「アインス・リヒターだ。馴れ合うつもりはない。早くスタメンをよこせ」

無表情に、彼は豪語する。子供達は目を点にして硬直した。

……一方の私はあまりの事態に額に手を当て、天を仰いだ。どうやら教えることがあつたらしい。そういうえば、親友のアイツも子供の頃はこんな感じだったような……

——数日後——

衝撃の自己紹介から数日後。アインス君にも無事、友人ができたようだ。——いや友人というより取り巻きに近いのか？ まあ仲良くなっている子もいるから大丈夫だろう。

アインス君の初めての挨拶から、結構な問題児なのかと思っていたけれど、アインス君は案外協調性もあるようで、指示に従ってチームプレイをこなしてくれていた。

とはいっても他とは孤絶した才能は陰ることはなく、小学校高学年も顔負けの実力を誇っている。やはり私の目に狂いはなかったな。高学年の子供達からも認められるカリスマも持っているようだし、チーム内で軋轢が生まれなければ、次回の大会に出場させてもいいかもしれない。

フフフフフフツツ!!

思わず悪い笑みがこぼれる。

こんな才能のある子が、後6年も在籍するということを考えると、未来が明るく照らされているようだ。念願のドイツ制覇も叶うかもしれない。

6歳の子供を恐れて、指導者としての姿を見失っていた自分がアホらしい。アインス君のことを少しでも恐れてしまった自分が情けない。

彼の才能は凄いが、まだ子供なのだ。私でも導くことはできるに違いない。

——数ヶ月後——

私にとつても、子供たちにとつても待ちに待った大会だった。

ドイツの小学生サッカークラブチーム最強を決める時。

ヒンメルクラウンが1年間の成果を示す場所。

その大舞台の準決勝まで、私たちは順調に駒を進めていた。

次の相手は前回優勝チーム。

まさしく優勝への天王山だ。

勝つしかない。

そうチームで団結し、試合へと臨んだのだ。

しかし、相手は強かった。

自慢のシュートは受け止められ、磨いたディフェンスは悉く打ち砕かれる。

前半が終了する頃までには、1ー4と3点差をつけられてしまった。

逆転はかなり難しい。ならばこそ次回に繋げよう。

私はそう思って、彼を、「アインス・リヒター」をグラウンドに送りだしたんだ。

………以前、私は彼を導けると言った。

あれは、嘘だつた。

光が迸り、宇宙そらが落ちる。闇が唸り、大地が軋む。彼は本物の怪物だ。

導くとはなんと**いう傲慢か**。

彼を御せるのは、**彼だけだ**。

もはや私には**彼が人に見えなかつた**。

顔の無い天使。所謂、怪物。

彼を人に戻すためには、**彼を打倒するしかない**。

誰が……？

どうやって……？

## ——稲妻町——

いらつしやい。

ガラガラと戸が開く音で、俺は振り返った。

珍しい客が来たな。豪奢で質の高そうな服を着込んだ異国の少年がウチに来たことなんて一度もねえ。

なぜウチを選んだのかはわからんが……まあ金を払ってもらえるなら客だ。拒む必要はない。

こんな店に子供が来るのは珍しいな……ボウズ、1人か？  
「そう。ダメか？」

随分と態度のでかい子供だなと思った。しかし、あまりにも、容姿や雰囲気合った言動だったので、不思議と不快感はない。

まあ構わんが……お前はそこらのガキとは違いそうだ。

それに、近所の悪ガキ達と違って、その少年は酷く落ち着いている。ともすれば、実は大人であると言われても疑問は覚えないほどに。

注文は？

俺はルーティーンのように、言葉を紡いだ。人が入店したら、注文を聞くのは飲食店として当然だ。少々無愛想かもしれないが、コレがウチのスタイルだ。

「大盛チャーシューメンとチャーハンと餃子」

チラリとメニュー表を一瞥した少年は淡々と注文を熟す。しかし、小学生になるかならないか程度の子供にしか見えない。とても食べ切れるとは思えないが……

……そんなに食えるのか？

「問題ない。そのぐらいなら余裕だ」

少年はそう断言する。その言葉には恐らく大丈夫だろうと思わせる説得力があった。なら構わんか……？

厨房に向き合い、麵を大鍋に入れる。後は慣れ親しんだ手順に沿って、料理を作るだけだ。チャーハンと餃子のために中華鍋に火をつけた。

作業を始めて2、3分と言ったところだろうか。注文したお客である少年は、何か珍しいものを見るように、調理中の俺や店の中を見つめている。やはり日本人ではなさそうだ。

なんでこの町にきたんだいお客さん。ここらの人じゃないだろう

普段なら無言で仕事をするばかりだが、今回は興が乗った。珍しい客に疑問を投げかける。

「観光だ。なんでもこの町にはイナズマイレブン　つて奴らがいたつてのを聞きつけてな」



「イナズマイレブン」

あまりに予想外の理由に、気が動揺した。なぜ、あんな昔のことを、少年が知っているのだ？ あの事件は奴が闇に葬ったはずだ……

……どこでそれを聞いた？

「イナズマイレブンの情報の出どころか？ インターネットに転がってたぞ。そこで好奇心を抱いただけだ。深い理由なんてない」

少年はイナズマイレブンの実在を自信を持って断言する。本当にそんな目的で此処にきたのだとしたら、なんとも複雑で、運命的だ。それにしても、本当にインターネットに情報が転がっていたのだろうか？ 詳しくないが、とてもそうは思えなかった。

……そんな奴らはもう居ない。探すだけ無駄だ

この話は深掘りしたくない。俺は早々に話を断ち切ろうとする。

「なぜアンタが断言する？ 何か情報でも持つてるのか？」

俺はその質問に対する解答を持たなかった。誤魔化すように、逃げるように少年に出来上がったアツアツのラーメンを提供する。

はい、お待ち

少年からそれ以上の詮索はなかった。……なんとも情けないことだ。昔のことをウジウジ引きずって、こんな子供に気を使わせるとは。

少年は慣れた手つきで、箸を扱いラーメンを啜る。外国人のように見えるのに、作法は日本人じみでいてなんともチグハグな印象を受けた。

うまいか？

……俺は思わず、少年にもう一度話しかける。気分が良くない。嫌なことを思い出したことに加え、考えたことを自由に話せない自分の狭量さがもどかしかった。

「ああ。悪くない」

ならばよかった。麺を啜る少年は、あまりに無表情だったから不安だったのだ。少しばかり、気をよくした俺は、立て続けに少年に語りかけた。

そうか……お前はサッカーをやってるんだよな？

少年にサッカーの話題を出した瞬間、空気が、世界が塗り変わった。少年から放たれる雰囲気、刺々しくも落ち着いたものから、威圧感のあるものに変化する。

冷や汗が垂れるのを感じる。なぜ俺は気づかなかったんだ？ クソっ!! ここまで毫碌していたか。冷や汗が、滲み出る。

コイツはとんでもない化け物だ。

「一応。それがどうかしたか？」

レベルが違う。イナズマイレブンと呼ばれていた当時の力ですら、コイツに届くことはいないだろう。どうやって此処までの力を手に入れたのか、興味が泉のように湧き出てきた。

楽しいか？

これほどの力を持つ人間はサッカーを楽しんでいると思うのだろうか？ 敵などそうそういないだろう。最早勝負すら成立しない。しかし、そんな俺の想像とは裏腹に、少年の回答は酷く前向きなものだった。

「考えるまでもない。俺はわざわざやりたくないことはやらない」

そうか。サッカーの喜びに力の多寡は関係ないか。……おれは何処か少年に諭されているように感じた。尚更、彼に興味が湧いた。我が事ながら珍しい。

名前は……？

「アインス」

アインス……か。

時代が動く音が聞こえる。世界が変わる兆しが見える。……あれ以来、サッカーというスポーツを遠ざけてきた人生だったが、今一度。関心を持つてもいいのではないかと考えた。

アインスのプレイを未来を見てみたい。そう純粹に願いを持てた。

俺の料理を残さず平らげた少年は、テーブルに代金を置き、立ち上がる。

「悪くない味だ。世話になった」

おう。また来い

なぜだか、不思議と少年と再会する予感がした。

少年は後ろ手を振り、店から出て行こうとする。

俺はアインスに最後の質問を投げかけた。

お前は何を目指してそんなに強くなろうとしているんだ？

「伝説を地に叩き落とす。そして、世界を獲る」

俺は彼のことを忘れないだろう。彼の姿に、彼の力に、彼の気高さに魅入ってしまったのだから。

---

あの子は？ 此処らで見ないような子供だが。

わからん。世界にはとんでもないやつがいる様だ。

おっ？ サッカーに興味でも戻ったか？

違う。サッカーじゃない。彼自体だ。

ほほう……珍しいな。笑っているぞ。

アンタもよく見ればわかるさ。歳をとると若い奴の才能に嬉しくなるもんだからな。ほほう。もう少し早くきておけばよかったなあ。

## 8話：サッカー仲間

楽しかった日本旅行から帰国し、俺はドイツの小学校に入学した。母さんに少し離れた私立の小学校を勧められたけど、通学に時間が取られるのは嫌だったから、地元にある近くのところだけだな。父さんが賛成してくれたから助かったよ。

入学当初は中学校以来、病院に籠りきりだったという前世もあって、少し緊張するなあ……とか思っていたけど、クラスメイトには話しかけられないし、学校も大したことないしで、気にしすぎだった。

そんなこんなで時間はあつという間に過ぎ、俺は既に3年生。後少して、小学生生活も折り返しというところまで来ていた。

3年の経験を経て、小学校生活に慣れた俺は……授業が眠すぎて、窓から空を眺めているのだった。曇天が気分を重くする。

暇だなあ……やることないからずっと景色を見てるだけなんだよなあ……早くサツ

カーしてえ……小卒認定とかねえのかな？

前世も割と勉強は頑張っていたし、今世に至っては、サッカーの修業に集中するため、すでに高卒程度まで勉強は済ませておいた。どうにもこの体は勉強ができる様で、殆ど見ただけの知識でも記憶することができている。

学校で無駄な時間を過ごすなら、家でサッカーの練習をしたい……俺も十分にサッカーバカになっているなあ。練習しているだけでも楽しくて仕方ない。努力した成果が如実に現れるから、やり甲斐も無限大なのだ。

小学校低学年の子どもたちと話が合うわけなんてないし、コミュニケーションも取りづらいんだよなあ。

俺の最愛の妹であるシエルも、別のお嬢様学校に通っているし……

でも友達がいなくてわけじゃないぞ。ちゃんとこんな俺とも話してくれる優しい人間はいるのだ。

授業の終わりを告げる。チャイムが校内で鳴り響く。

「おい、アイン。放課後になったわけだし、サッカーしようぜ」



「わかったよアレク」

ほら、話しかけてくれた男の子がいる。緑髪を首元まで伸ばしているイケメンな彼はアレクサンダー・ハウゼン。クラスメイトであると共に、「ヒンメルクラウン」のチームメイトだ。彼の陽気さには日頃から助けられている。話しかけてくれるだけで最高の友人だ。

……なんだか、俺クラスメイトから避けられてるんだよね。友達と言えるのは大体サッカー関連で、学校の友達なんて1人しかいない。不細工だったり、臭いなんてことは万が一にもありえないから……性格だろうな……

小学一年生に避けられる性格って一体……？

……まずい、このままだと、自己肯定感が低下してしまう。早くサッカーをキメよう。と思ったのだが……

「そーいやアイツも来んのか？ わからないんだったらお前が誘ってこいよ？ アイツ俺が誘っても無視しやがるからな」

アイツ？ 彼女のことかな？ この学校で知り合ったという意味では、俺唯一の友達

ち。サッカークラブには所属していないものの、サッカーが好きな様で、俺だけに話しかけてくれるのだ。

「任せて！ 先に学校のグラウンドで待っていてよ！」

そう応えるとアレク君やサッカー仲間らはボールを小脇に抱え、和気藹々と教室から出ていった。

俺の探し人は……と……

教室の中に彼女は見当たらない。もう出て行ってしまったのか……？ 放課後だけど、多分帰っていない筈……だとしたら、あそこにいる筈だ。

俺は教室を出て、心当たりのある場所に歩いていった。

案の定、校舎の裏側にある廃材置き場に彼女は居た。廃材の上に座りながら、ぼーつと空を眺めている。

「探したよ。何してるんだ？」

「別に……どうだっていいでしょ？ 学校なんかぶつ壊れちゃえて思ってただけ」

その子は拗ねたようにこちらを睨みながら、足元にあつた小石を蹴飛ばす。不機嫌そうな彼女は【遊馬 鷗玄】。去年ドイツに引越してきた日本人の少女だ。俺の友達である。俺の友達である。大事なことだから2か………

いつもクールな性格だけど、今日はどこか悲しそうな表情をしている。何かあつたのだろうか？

「物騒だな……確かに学校は退屈だし、つまらないかもしれないけど、学べることはあるんじゃないか？」

「そんな優等生ぶつちや……いやアンタは天才だったか……ほつといてよ、アンタに私の気持ちなんかわからないんだから」

俺は思ってもいない綺麗事を並べたわけだが——随分と擦れてるなあ。まだ小学生3年生のはずなんだけど……でも俺は彼女の言っていることがわかる。なんてつたつ

て前世は真つ暗闇の中を生きてきた人生だからな。

「クラスメイトと何かあったのか？」

「……………悪口言われてたの。男の子とばかり仲良くしてる変なやつって。アインに擦り寄つてるとも言われてた」

「……………そうかあ。だったらそんな子たちとは関わらなくていいと思うよ？ 無理して嫌な人たちの話を聞く必要なんかない。好きな人と付き合えるのは子供の特権だからさ。それに俺はムクロと話したり、遊んだりするの楽しいから意味のない指摘だね」

そんな慰めも大した意味はないようで、ムクロは顔を曇らせたままだった。彼女の悲しげな顔は見たくないなあ。

「……………いいよね。みんなは一緒に。私はいつつも一人。無愛想で怖いアンタだつて避けられてるけど、友達はある。だけど……………私はあんなバカ達にも仲間はずれにされる」

ムクロは立ち上がり、拳を握り込んだ。そして声を震わせながら俺の肩を掴んだ。爪が俺の肌に食い込んでいる。かなりの力が込められていた。

「ムクロが1人だって？ 俺とムクロは友達だから1人ってことはないだろ？ それに俺以外にもムクロのことが気になってる奴も多いしな。アレクやヨナスだってお前とサッカーしたがってる。そんなに自分を卑下するもんじやない」

ムクロは俯きながら、ポタポタと涙を溢した。俺がもつと凄いやつなら、この子を泣かせてしまうことはなかっただろう。不甲斐なくて俺も泣きそうになった。

「……………アンタは苦しめないの？ みんなから避けられてるのに期待されてるっていう矛盾。私なら怖すぎて逃げ出すよ？」

「——怖いよ？ ……でもそれ以上に…………後悔することの方が恐ろしい。ムクロだって後悔はしたくないだろ？ 本当はみんなと仲良くしたいんだよな？」

「それは…………」

「後悔は苦しいよ？ 死んでも…………死んで生き返ってからもずっと忘れられない。俺はムクロに後悔してほしくないんだ。だから俺と一緒に来なよ」

どれぐらい俺の言葉が、彼女のためになっっているかはわからない。だけど、本心からムクロには俺の二の舞にはなっただけほしくない。後悔をさせたくない。人と話せるのに。人と遊べるのに。人と愛し合うことができるのに。その機会を喪うなんてことあって

はいけないんだ。

「——狡い……そうやって私を引きずり上げようとするの」

言葉を紡ぐと共にムクロに抱きつかれた。俺は動揺を隠しながらも、彼女を両手で抱いた。少しでも……彼女の救いになれるように。

「狡くて結構。コレでもよく怪物扱いされるんだ」

「……わかったよ。私も……みんなと仲良くできるように頑張る。だからアンタも私のことをよく見ててね？」

「ああ見てるよ。ずっとね。なんてったってムクロは俺の友達だからさ。」

ムクロは顔を持ち上げ、赤く染まった目元を拭う。そしてクスツと笑った。

「しょうもない話を聞いてくれてありがと。じゃあ行くか……アンタどうせサッカーのメンツ集めに来たんでしょ？」

「……バレた？」

彼女の笑顔は俺を幸せにしてくれる。青空も祝福するかのように晴れやかに澄み渡った。

笑顔の方が絶対ムクロには似合っているよ。

---

放課後の校庭で、数人の子ども達が駆け回っていた。ボールを追いながら、楽しそうに騒いでいる。俺はその一員として、校庭を駆け回っていた。

「アレク！ パス！ 決めろ！」

「ナイス!! 行くぞ、オラツ!!」

緑髪の少年が、サッカーボールを力強く蹴り込んだ。その大人顔負けのパワーによって蹴り出されたボールは、鋭くゴールの隅に向かっていった。

GKは反応こそするものの、コースの良さに対応できず、ボールに指先を掠らせる程度のことしかできなかつた。

サッカーボールがゴールを揺らす。

「ナイスシュートだ」

「当然だろ？」

自慢げに胸を張るアレクに特徴的な眼帯を付けた少年が話しかける。

彼は「ヨナス・ポラック」。アレクと同じく、チームの仲間でありつつ同級生だ。陽気なアレクと違ってマジメだから、とても頼りになる。

「これなら俺たちもそろそろスタメンを取れるかもしれないな」

「どうなんだ？ ウチのエースさんよお!!」

「そうだね……基礎的な技術は足りていると思う。あとは……体力と必殺技かな……？」

彼らは俺と同じく小学生1年生の時にヒンメルクラウンに入団したのだが、それ以来精力的に練習をこなしていた。努力を重ねた結果、2人の実力は今のスタメンである上級生と比較しても遜色ない。もう少し力を付ければうちは実力主義だし、3年生にして



スタメンということもあり得るだろう。

「必殺技ってそんなに簡単に覚えられるモンなの？」

先程俺が呼んできたムクロが会話に入ってくる。いつもならサッカー中も黙ってそっぽを向いているのだけれど珍しい。さつき頑張ってみんなと仲良くなると言ったのは嘘じゃないみたいだ。

「珍しいな。ムクロが話に加わってくるなんて」

「……………そういう日もあるってこと。ほらアイン教えてよ」

ムクロはヨナスの疑問に答えた。恥ずかしいようで、顔を俺たちから背けていた。頑張っているけどまだまだだなあ……………気持ちわかるぞお。

ええっと、必殺技を覚えるためには、どういう技をどういった形で扱いたいのか想像しておくことと、それに見合った技術、能力が必要なんだ。まあみんな実力はあるしイメージさえ掴めればいけると思うよ？

「じゃあ教えてよ。マジメにサッカーがしたくなった」

「おお！ ムクロがやる気になった!!」

「いつも適当にやっていた筈なのに変なこともあるもんだ」

2人に止めを刺されたムクロは顔を赤くし、反論する。ムキになってかわいいねえ。子供らしくていいもんだ。

「うっさい!! 私が強くなるのはアンタたちにとってもいいことなんだから手伝いなさいよー!」

いいこと? ……練習相手として助けてくれるということかな? 俺もサッカーを教えるのは結構好きだし、何より人とサッカーができるのがうれしい。喜んで力になるう。

「アイン。俺たちも忘れるなよ」

「そおだぞー!!」

忘れてないって……

——数日後——

今日はチームの練習日だ。いつものように家での自主練を切り上げ、チームの練習場所である共同グラウンドまで走って行く。

そういえば今になって思い出したけど、前回の練習で、監督がニヤニヤ笑いながら「お前もやるなあ」なんて肩を叩いてきたけど、なんだったのだろうか？

なんだかうざかったので、やさしいシュートを流れ弾に見せかけてを尻に蹴り込んだのだが、監督は頑なに吐かなかったので未だに意味はわかっていない。

おっと、時間ギリギリだったみたいだ。グラウンドには子ども達が大勢集まっていた。

いつものように挨拶をして、その輪に加わる。監督が歩いてきた。早速練習が始まるようだ。

「よし………今日も全員参加だな！ 集まりが良くて俺は嬉しいぞう！！ 早速練習と行きたいところなんだが、今日は発表がある」

きてくれ——！！

監督は振り返って、大声で誰かを呼んだ。

「ウチのチームに新たなメンバーが増えたぞー！ 仲良くしてやってくれな！」

監督の言葉によって、監督の後ろから人影が近づいてくる。

誰だろうという疑問を挟む間もなく、顔が見えた。

ムクロじやねえか。

アレクは驚いたように、大口を開き、ヨナスは隠していない右目を見開いていた。俺は多分………なんにも反応していない。

キヨロキヨロと俺たちを見まわしたムクロは俺を見つけた瞬間、ウィンクをしてきた。イタズラが成功したかのように、くすくす笑っている。

なるほど……そういうことだったのか……

## 9 話：人の力

——リヒター家地下——

「父さん……これとんだけ金かかったの？」

「そうだなあ……めちやくちや凄いビルが建つぐらいかなあ」

「……あんまり言いたくないけどバカだね父さん」

思わず父親を罵倒してしまうほどに、俺の眼前には意味のわからない物が並んでいた。急勾配ランニングマシンに始まり、サッカーボールガトリング、低圧低酸素ルームにサッカーシミュレーションシステムなど……人類の叡智を無駄に使ったサッカートレーニングマシンが広い空間にコレでもかと詰め込まれている。

小学生5年生、11歳の誕生日記念としてプレゼントしてもらった施設はあまりに大規模だった。父さんは俺が入り浸っているサッカーグラウンドの直下に地下施設を作

り上げ、俺にサプライズプレゼントとして渡してきたのだ。いつの間にか？

なんでもリヒター家地下特訓場とのこと。自慢げに胸を張っていた。

……有り難くはない。そんな表現をする程度にしか感謝できなかつた。もう少し、金の使い方あると思うんだよなあ。

「そうかあ？ 父さんが昔から夢見てたマシンを詰め込んだんだけどなあ」

「確かにロマンを感じるけど実用性がなあ……」

「父さんはともかく、アインなら使いこなせると思うんだがなあ」

「まあ試してみるよ。ありがとう」

俺は若干の好奇心と大いなる不安に苛まれながら密室へと足を踏み出した。

——数時間後——

結論から言うと設備は結構悪くなかつた。ランニングマシンや低圧低酸素ルームなんかは特に。普段の練習やトレーニングを簡単に増やすことができるっていうのは

中々便利だ。

ここ最近ではデュプリ式重力訓練も10倍まで耐えられるようになってきたことで、かなり肉体も強化されてきた。地下特訓場は結果的に、負荷に慣れてきたマンネリを打破できるからなんだかんだ効果的だな。

まあサッカーボールガトリングはどうかと思うけど。だってGK以外は避けるぐらいのことでしかできないんだから。俺はデュプリもいるし、自分1人でGKの練習もできる。尚更微妙だ。

そんな風にトレーニング機器を批評しながら、トレーニングによりパンプアップしている体にプロテインを流し込む。あんま美味しくないけど、なんか慣れちったなあ。

もう修行を始めて7年ぐらいになるのか。色々あつたなあ……父さんにサッカーの基礎を教わり、必殺技を覚え、化身を身につける……それからは本当に激動の人生だった。

守君との再会はあと2、3年。中学2年生になった時だ。できること今のうちにしておかないと。将来のドイツ代表のメンバー集め……はどうでもいいか。

「そういえば、アトリ。君も日本についてくるのかい？」



トレーニングもひと段落ついたので、柔軟をしながら俺に付き合っつて特訓場に居るアトリに話しかける。トレーニングをしている姿を見ながらぼーっとあくびをしている。

「ええ、もちろん。私はアインス様の専属なので」

「まあ日本で暮らすのも一年ぐらいだからね。気楽にでいいよ」

「ええっ!! 私アインス様と日本に骨を埋めるつもりでいたのに!!!」

「……たまに思うんだけどアトリってなんか重いよね」

日頃から俺と一緒にいる姉同然の女性の言葉に、思わず驚いてしまった。弟のように大事にされている実感こそあったものの、そこまで愛されているとは……

「デブって言いました?!?!? アインス様とはいえ許しませんよ?!?!?」

そんな俺の動揺もアトリは気にしていないようで、呑気に天然ボケを發揮した。もう成人しているというのに相変わらずだ。

俺はイラつとしたのでアトリのお腹を摘む。セクハラと思われるかもしれないけど、姉みたいなものだから問題はない。

……結構ぶにっとしていたので、今度修行に付き合わせよう。

「ちよつと〜アインス様のえつちい〜!」

アトリが演技をしながら、俺の手から逃れようと身を振る。その瞬間、地下特訓場の扉が開き、薄暗い部屋に光が差し込んだ。

「何やってるんです兄さん。母様に言い付けますよ」

魔が悪く部屋に入ってきたのはシエルだった。こちらを蔑むような目で見つめてくる。思春期の男の醜態を母親にチクるなんて誰に教わったんだ。とんでもなく重い一撃だぞ。

昔はあれだけお兄ちゃん、お兄ちゃんと俺の後ろをついてきていたのに、ここ最近反抗期真っ只中だ。それはそれで可愛らしいが、ここ最近はもっぱら昔のシエルが懐かしい。

ゴホン

俺は咳払いをして気を取り直す。話を逸らしてしまおう。

「どうしてここにきたんだ？ 何か用事があるなら電話をかけてくれればよかったのに」

数秒の沈黙が地下特訓場に流れた後、シエルは神妙な面持ちで口を開いた。

「……………兄さん。日本に行くって本当ですか？」

……………しまった聞かれていたのか。言い出し辛かったから家族には未だに伝えることができていなかったんだ。こうなったら嘘なんてつくことはできない。

本当だよ。2、3年後に1年間日本に行こうと思ってる。

「……………そうですか」

それだけ言い残して、シエルは部屋から去っていった。てつきり引き止められるのかと思っていたが……………嫌われてしまったのだろうか？

「シエル様にお話ししてなかったんですか!？」

「まあ……ちよつと言いつら出しづらかったよね」

「はあーこれだからアインス様は……私が着いてなきやダメなんですから」

アトリは困ったように肩をすくめ、俺の背中に覆い被さってくる。シエルも反抗期ということで、こうやって親しみを持つて接してくるのはアトリだけだ。友達もどこか俺に一線を引いているし、アトリを蔑ろにすることはできない。

「アインス様。ちゃんとご両親にお話ししなきゃダメですよ？ 1年間とはいえど、子供と離れ離れになるのって凄く悲しいことですからね？」

「……わかったよ」

こうやってたまにマジメなことを言うからアトリには逆らえないんだ。だけど頬をつつくのはやめてくれないかな？ もうそろそろ6年生になるんだ。

ハアハア……フウ。

1人の少女が、汗を垂らしながら暗闇の中に立っている。膝に手をつけながら、息を整えていた。

「シエル。もっかい付けて」

「もう少し休んだほうがいいんじゃない……」

「嫌。休んでる暇なんてない。私はアイツに置いてかれるつもりなんてない」

紫髪の少女は、顔を上げ操作盤の前にいる友人に声をかけた。足は震え、視界は定まっていない。もはや満身創痍といった様相だ。

「だけど、それ以上やったら倒れてしまいます……」

そんな少女の有り様を受け、銀色の髪をした友人は、決断を戸惑っている。タッチパネル式のコンソールに指を置きながら、首を振った。

「付けてやれ。そうなたらそいつはテコでも動かない」

暗闇から1人の少年が現れた。大人びた雰囲気を持っているにも関わらず、厨二病と揶揄されそうな眼帯をつけていた。最も、当人は未だ小学5年生であるため、ノーダメージではあるのだが。

「ヨナスさん……わかりました。じゃあ低圧低酸素ルームを起動します。ムクロさん、

危ないと思つたらすぐに言つてくださいね」

「ありがと、シエル」

シエルはタッチパネルを操作し、ガラスで隔てられた先にいるムクロに負荷を与える。轟轟と機械の駆動音を立てながら、低圧低酸素ルームはその役割を全うした。

「……やっぱキッツイわ。誰が考えたのよコレ」

空気は薄く、気圧は低い。そんな環境が実現された部屋は、まるで標高数千メートルの高地で運動を行っているかのような負荷を与える。

「アインズとシエルさんの親父さんだろう。お前も会つたことがあるよな?」

「ちよつとだけね。昔、息子のことをよろしく頼むつて言われたわ」

ムクロは顎を触りながら昔のことを思い出す。あの日のことは忘れられない。

「随分と気に入られたようじゃないか。意味はわかかってるんだろう?」

「まあね。婚約を認める……とかだつたらもつと嬉しかったのに」

「……それは、ご愁傷様としかいえないが……」

ヨナスは困ったように頬を掻きながらムクロの言葉に反応する。

「わかってます。息子の成長の糧になれってことでしょ？ アインスのお父さんの目は完全に息子に心酔してる目だし。でも私だつてアイツの澄ました顔をぶっ飛ばしてやりたいと思ってる。だから頑張らなきゃいけないワケ」

ムクロは疲労困憊な体に鞭を打ち、ボールを蹴り上げる。そして驚異的な跳躍力でもって、上空に蹴り上げたボールに追いついたムクロは、ボールの前で祈るように手を組み合わせた。

態々苦境に自分を追い込み、魂を削つたのはこの時のためだ。今なら絶対に『あの技』を扱える。ムクロはそう確信していた。

祈る。ただ信じる。今までの努力と、自分の才覚を思い出し、想って。

見事悪神は、ムクロの願いを聞き遂げた。

突如夜空など見えない筈の地中世界に夜が訪れる。

ダークマターが辺りを暗く染めあげ、数百年、数万年前の星々の光が幻想的に瞬いた。

余りに魅力的な光景に、シエルとヨナスの2人は息を呑む。

星が……落ちてくる。真っ赤で忌々しい病んだ月が。不幸を呼ぶ赤い月が。こちらに向かって堕ちてくる。

ムクロは赤い月を全力で蹴り込んだ。

『忌み月』

「……完成したか。お前だけの技が」

「……コレが……サツカー……」

ムクロはあるはずのない夜空を幻視し、見つめていた。  
——追いつけるはずのない流星に手を伸ばすために。

---



どうしたんだ？ シエルちゃん。兄貴なら走りに行っちまったぞ？

え？ お話を聞いてもいいですかだって？ 別に構わないけど俺に聞きたいことなんてあるか？

……兄さんをどう思ってるか聞きたい？ うーんあんまり考えたことがなかったけど……そうだな……

最初の印象は、顔がいい癖に性格の悪そうな奴だなって感じだったな。目つきは鋭いし、無愛想。氣にいる要素なんて特になかったよ。

でもな。アイツのプレーを始めて見た時に気づいたんだよ。コイツについていけば最強になれるんだなって。いや、コイツについていければ、の方が正しいか。

アイツ言葉は強いけど、なんだかんだ面倒見もいいし、付き合いもいい。ちいせえ頃に何度も付き纏ったらサッカーを教えてくださいよ。それからは世界が変わったなあ。

あんだけ強いと思ってた先輩たちも大したことないように思えたし、俺だって憧れ

だったスタメンに入れた。

今となつては、アイツもすんげえ大事な友達だよ。……もちろんシエルちゃんもな？

だけど心のどこかで思つちまうんだよ。

——アイツはこつちを見ていない。何か……ひたすら……遠くのものを見て  
いるような気がするってさ。

それにアイツはとんでもなく強いのに……アイツの実力はこんなものじゃないん  
じゃないか？ そういつつも思つちまうんだ。俺たちに何か隠し事をしてるってさ。

でもどうしてもシエルがそんなことを聞いて回ってるんだ？ お前の兄だろ？

——え……？ サッカーを教えてくれ……？

!! おおマジかシエルちゃんはてつきりサッカーが嫌いなのかと思つてたよ!! 任せろ  
!! 俺だけじゃなく、チームメンバー全員力になるぞ!!! ムクロとヨナスのやつなんか

特にな!!

それにさ、俺はなんとなくわかるんだ。アイツに近づけるのはお前とムクロしかいな  
いって。いつかあいつに見せてやれよ！ 人の力って奴をよ!!

## 10話：ドイツ最強（小学生）

青く澄み渡る空の下、グレイブランドスタジアムに押し寄せた観客が大歓声を上げている。最大収容人数60000人を誇るその観客席は、人々によって埋め尽くされ、大勢の人々が人の波のように見えた。

そんな観客たちの目的はもちろんサッカー。この世界1番の人口をもつスポーツであり、この世界1番の人気を誇るスポーツの観戦である。

今日行われる大会は、ドイツの小学生最強クラブチームを決めるためのもの。小学生たちの努力の結晶を示す発表の場だ。

本来ならばサッカーの技術が本格化し始める中学校サッカーと異なり、小学校サッカーにはここまでの人気はないのだが、何らかの要因が観客たちをドイツ各地から呼び寄せていた。

「みなさんこんにちは！ 待ちに待った日がやってまいりました!! ドイツ小学生サッ

カークラブチーム選手権大会決勝がここ、グレイブランドスタジアムにて間も無く行なわれようとしています!!」

ドイツ国内ではお馴染みの解説が、高らかにアナウンスを始めた。彼は軽快なノリと、的確な実況によつて人気を博しており、小学生から大人まで、重要な試合の解説を任されることが多かった。

「本日は終日、晴れの予報となっております。これなら何の懸念もすることなく、大会に没頭することができそうですね！ 本日は実況の——と解説の——さんで送りします。よろしくお願いいたします」

「よろしくお願いします」

解説は現役時代、ヨーロッパの強豪クラブに所属し、ドイツ代表にも選出されたことのある有名選手だ。本来ならば小学生大会の解説を務めることはないほどの大物であるが、その人が解説を務めている。それだけで、この大会の世間からの注目度が計り知れるだろう。

「——さん本日のマッチアップはドイツ南部から決勝まで進出した【ヒンメルクラウン】と、北部から進出した【アルプトラオム】の試合となります。——さんズバリ、この試合の注目箇所はどこになるとお思いでしょうか？」

実況は隣の解説に話題を振り、司会開始までの間を繋いでいく。

「そうですね——やはり、圧倒的王者ヒンメルクラウンにアルプトラオムがどこまで食いつけるか……といった展開になると予想されます」

解説は、手元に用意した書類を確認しながら語り始めた。

「ヒンメルクラウンは、

FWに【赤月の刃】ムクロ・アスマ。

MFに【ガンスリンガー】ヨナス・ポラック。

DFに【忠誠の闘士】アレクサンダー・ハウゼン。

GKに【フィールドの天帝】アインス・リヒター

をはじめとして、全ポジション隙のないチーム力を誇っています。優勝予想には誰も

がヒンメルクラウンを上げるといっても過言ではありません。アルプトラオムの選手も粒揃いではありませんが、今一歩及ばないのではないか。そう考えられます」

「成程！ ありがとうございます。確かにヒンメルクラウンは重要な記録もかかっていますし、負けられませんよね。おつと選手たちが各々のポジションへ歩いていきます。そろそろ試合が始まるようです」

2つのチームはフィールドの両陣営にそれぞれ分かれてポジションにつく。張り詰めた空気がグラウンドの中に満ちていく。

「会場のボルテージも上がってきましたね!! 私も試合が楽しみです。将来の国代表となる可能性を秘めた逸材たちが揃っていますから、目を離せませんよ!!!」

緊張感の高まりと同時に、観客の歓声も徐々に増していく。あまりの音圧に、衝撃すら感じてしまうほどだった。

ピ————  
ツツツ!!!

解説の言葉と共に、会場に笛の音が鳴り響く。タイマーが動き出し、試合の時間を刻みはじめた。

そうして、ヒンメルクラウン対アルプトラオムの決勝戦はスタジアムを人で埋め尽くしながら、大歓声の元、開戦したのだった。

——そして……何も起こらずに終わったのだ……

『ガンシヨット』

『忌み月』

『ペンギンパンツァー壱式』

一方のゴールは何度も揺れ、一方のゴールにはボールが近づく事すらなかった。この試合はただただ、幾度も必殺シュートが打ち込まれるだけの作業でしかなかったのだ。



ピッ！ ピッ！ ピ——  
!!!

無慈悲にも試合終了を告げるホイッスルがフィールド上に響き渡る。いや、違う。アルプトラオムの選手たちにとっては、悪夢を終わらせてくれる救いなのかもしれない。

「ドイツ最強小学生の決定だあ!!! 優勝はチーム【ヒンメルクラウン】!!! 前人未到の6連覇を達成!!」

実況が勝利を告げる。しかし、その声も観客の喧騒によつてかき消されてしまい、微かにしか聞こえない。

その試合はあまりに圧倒的だった。思わず……私も応援の声を漏らしてしまうほどに。観客が、ヒンメルクラウンの力を称え、敗北者たちの幼い心を追い立てる。あまりの熱狂が、人々の思慮を浅くしていた。

「得点はなんと10対0!」

アルプトラオムにとってはまさに悪夢だろう。なんせ、攻撃は完封され、相手の攻めを一度も止めることができなかったのだから。

心が折れたのだろうか……アルプトラオムに所属している少年少女が膝を突き、悲嘆に暮れている。

しかし、そんな光景も観客の目には全く入っていないようだ。私は自分が熱狂に酔い、リスペクトを失う人間でなかったことに心底安心した。

「試合をどうみまますか解説の——さん」

「……そうですね。圧倒的だと言っていていいでしょう。序盤、中盤、終盤隙のない試合運びでした。ボールの支配率、試合の流れ、共にヒンメルクラウンのものでした。シュート、ドリブル、ディフェンス、連携……いくらでもヒンメルクラウンの選手を褒めることができますよ」

解説は、「でも」と前置きし、自らの経験から得た心理を語る。

「私はアルプトラオムの選手達が心配です。今回のことは忘れて今後もサッカーを頑張つて欲しいです。私も小学生サッカーラブチームがここまでとは……思っていますんでしたから。……今回の事は事故とも思わすべきでしょう」

観客たちの熱狂に釘を刺すように、解説が訥々と苦言を呈す。

確かにヒンメルクラウンの勝利に酔った観客たちの熱狂は、敗北を喫したアルプトラオムの選手たちにとって毒であろう。少年少女が涙を溢す光景に、私も感情移入し、胸が苦しくなった。

しかし、そんな言葉すら聞こえていないかのように、観客は無慈悲に歓喜の声を上げ続ける。それも仕方ないだろう。ヒンメルクラウンの人気はそれほど圧倒的だったのだ。

「そうですねえ……アルプトラオムの子供達にとってはかなり苦い思い出になってしまったでしょう。コレを糧に更なる躍進を遂げて欲しいものです」

実況は解説に同感の意を示す。しかし、立場上そのような暗い雰囲気は放っていることなど許されないので、気を取り直して実況を始めた。

「……………いえ、違いますね。今はヒンメルクラウンの勝利を祝いましょう。ヒンメルクラウンは過去類を見ない、本大会6連覇を果たしました!! ドイツのサッカー界に新たな歴史を残したと言えるでしょう!!!」

「本当にすごい事です。よ。メンバーは移り変わり、成長も著しいはずの小学生サッカーにおいて、これほどの結果を継続的に残し続ける事はとても難しい。確かに、これほどのファンがついている理由があるというものです」

人はスポーツ観戦をする際、様々な要因によつて応援するチームを決める。いわゆるファンと呼ばれるチームの後援者になる理由が必ず存在しているのだ。

1人は地元のチームであるから。

1人は自分の好きな選手がいるから。

1人は魅力的なチーム方針であるから。

1人は応援する事で得があるから……

本当に理由は人それぞれだろう。

しかし根本的な要因はそこではないのだ。

人がスポーツチームを応援する理由……それはそのチームを応援することによつて、**【勝利という名の一体感を手にすることができるかどうか】**  
そこに尽きるのではないだろうか。

その点、ヒンメルクラウンは過去5年間にわたつて観客たちの期待に応え続けた。常

勝無敗、完全無欠、史上最強……彼らのことを示す言葉は数多く存在しているが、そのどれもが彼らの力を褒め称えている。

それに感性に由来する個人的意見を言ってしまうえば、彼らの容姿は非常に優れて見えるし、カリスマ性も兼ね備えているように思える。要するに、応援したい!! 思わせるような子供たちが揃っているのだ。

そうして観客を取り込み続けたヒンメルクラウンの人氣は、もはやドイツ国内のプロチームとも遜色なかった。これほどまでに、将来を期待されている子供たちは世界的に見ても極小数だろう。

ドイツ国内に数百万、数千万というファンが存在する、サッカーという競技の未来を担うのが、ヒンメルクラウンのメンバーだ。この子供達ならば、世界を獲れる。私もそう信じてならない。

ここから先はこの試合の話ではないが、見ていただきたいと思う。

〔ヒンメルクラウン〕

5年前まで、有名でもなかった中堅チームが突如ドイツ最強チームとなったことは記憶に新しい。あの時は、この大会の準決勝まで進出しただけで、素晴らしい成果だと言われていた筈だ。良くも悪くも、向けられていたのはその程度の期待だった。

それが現在、ここまで唯一抜きん出たチームになるとは……誰も予想しなかつただろう。

私、以外は。

——当時の数少ない観客しか知らないであろう事実がある。

先ほど述べた、5年前の準決勝には怪物が現れたのだ。

1人でフィールドを駆け回り、1人で守り、1人で点を決める。その化け物の姿は小柄な6歳の少年だったのだ。あまりの光景に、現実味がなかった。数々のサッカープレイヤーを見てきた私でさえ、例に漏れない。

皆、嘘だと思うだろう。だが私は知っている。彼のポジションは、本来あそこではないことを。私はわかっている。彼の真価は未だに誰も見たことがないと。

しかもこれが5年前の話だというのが恐ろしい。

5年の月日を経て、あの怪物はどこまで上り詰めているのか、そんな怖いもの見たさ

な好奇心が、私を突き動かしている。

これからも、ヒンメルクラウンのメンバーの取材や記事は、私が担当させてもらえるように直談判するでしょう。

余談だが、ヒンメルクラウンというチームに対する過度な期待に、胃を痛める監督がいたという噂も聞こえてきた……確か、若手の監督だった覚えがある。あまりの人気と才能を背負う立場であるため、その重圧も計り知れないだろう。私はこつそりと監督も応援している。皆さんも応援してみたらどうだろうか？

———こんなところでこの大会のコラムはいいかな？ デスクに提出しよう。  
(とある記者)

ふう……とりあえず6年間ドイツ最強をキープすることができたか。円堂のライバルを目指すんだっつたらこのぐらいのことはこなして見せないとな。

……でも……毎度のことだけど、対戦相手が泣いているのを見ると、心が苦しくなる。うちのチーム手加減を知らないんだよなあ……俺以外。

俺、ボールの飛んでこないゴールに突っ立っているだけだし、フィールドプレイヤーの暴走はどうしようもない。

まだ10歳ぐらいの子供たちが相手なんだから、もう少し手心を加えてやる事はできないのだろうか………無理だな。帝国も、世宇子も容赦なく相手を叩き潰していたし、子供とは残酷なものなのだろう。

それにしても監督う、早くGK育成してくれえ。流石に何もできないのは飽きてきたよお……

——まあもうこのチームも卒業だから関係ないけどさ。

俺はともかく、仲間は全力を出しているし……このぐらいは差がついてしまうよな。客観的にみて、俺のチームは圧倒的に強いからさ。みんな頑張ってるし。

まあ10番貫ってるのにGKやってるのは結構謎だね。監督からGKをやるように頼み込まれたからやっているのだけど……俺は本来FW……。別にGKも嫌いじゃな



いけどさあ。

6年間負け無しということで、代表に選出されるだけの結果を残すことができたと思う。——だが足りないな。成長——いや進化し続ける円堂君たち、イナズマジャパンに勝つにはこんなものじゃ足りない。

ホイッスルの音と共に、チームメイトが駆け寄ってくる。ベンチから監督もきたようだ。

俺の方じゃなくて監督の方に集まるべきでは……？

「お前たち!! よくやったぞお——!!!」

1番舞い上がって、ゴール前に駆け込んできたのは監督。嬉しそうに、声を震わせていた。

毎年勝っているのに、こうやって毎度喜んでくれる監督は出来た人だ。子供達の自主性を重んじた采配をとってくれるので、とてもやりやすいしね。

「よう、アイン。俺たちのプレーどうだった？」

「こいつに聞くだけ無駄よ。どうせ『まだまだ』としか言わないわ」

「ふっ……流石にここまで付き合いらなると、よくアインのことをわかつているじゃないかムクロ」

監督の投げかけは、右から左へと聞き流される。哀れ監督。こういう癖の強い子供たちばかりだから、いつも胃薬を飲んでいるんだな。

ムクロは仲間たちに暖かく笑われたことで赤面する。そして、ヨナスの尻を蹴飛ばした。

俺の友人たちも、4年生からの3年間、しつかりスタメンに収まり続けた。ここはその努力を労うべきだろう。

「いや、君たちは凄く頑張ったよ。正直ここまで技術や体力を練り上げるとは思わなかった」

………ん？　なんで誰も反応してくれないんだ？　変なことでも言ったかな？

周りを見渡すと、皆目を点にしてこちらを見つめている。監督ですら、アングリと口を開いていた。まるで顎が外れてしまったかのように。

「アインが俺たちのことを褒めた……？」

「マジ？」

「驚いたな……」

「そんなことで驚く……？ 俺、結構みんなのこと褒めてたつもりなんだけど。でもまだまだお前たちなら成長できると思ってる。まだまだサッカー人生は長いよ？ なんてったって俺たちはようやくと中学生になるんだから」

俺は誤魔化すように、喋りを続けた。実際やつと中学生になるところなのだ。サッカー人生という物語でいえば、まだまだ序章が終わったばかりだろう。

「……………つたく、ハードルたけえよなあ……まあ見てろよ。中学に上がったらもっと強くなるからな」

「アンタは勉強しなきゃでしょ。バカなんだから……同じ中学に上がれるのかしら」  
「義務教育だから上がれるっての……地元のところならさ」

アレクは勉強嫌いで常に赤点ギリギリを取り続けていた。最低限のラインを超えな

いあたり、実は合理的というか、地頭の良さが見え隠れしているが、やっぱり他と比べてバカだ。

「あらアイン、ヨナス。このバカは放っておいて、もっと頭のいいところに進学しましょ」

「……それもアリだな」

「オーーーーー!!!」

ムクロとヨナスは冗談めかしながら、アレクを煽る。ムクロも成長したなあ……昔はあれだけ人嫌いだったのに……おじさん嬉しいよ……

まあみんな近くの中学校に進学するって決めているからこそその冗談だけだな。

「アインス……ちよつと話いいか？」

「はい？ なんでしようか」

チームメイトたちがあれやこれやと騒いでいる中、先程無視されていた監督がコソコソと話しかけてきた。

ふむふむ……なるほど、ナルホド。

監督の相談は、ヒンメルクラウンを卒業してからも、後輩の練習に付き合っただけとどだった。

きつと6連覇しちゃったから負けられないんだろなあ……デュプリをたまに送って、手伝わせますので頑張ってください監督う……

その後は祝勝会兼送別会ということでパーティーを行った。監督の財布は擦り切れ、空っぽになってしまったらしいが、調子に乗って全部奢りだあ!! とか言ってしまったのが悪いと思う。

自業自得だ。

でも今まで、お世話になりました。

## 閑話：愛と狂気と殺意と

私の息子は俗に言う天才というやつなのだろう。いや、私も昔はそう呼ばれたこともあるし、天才という言葉で表すのも烏滸がましいか。

初めて、息子にサッカーを教えた時に気づいた。彼の才能を。

初めて、息子にボールを奪われた時に嫉妬した。コレが神に愛されているということか……と。

初めて、息子にドリブルで突破された時に知った。彼の運命を。

そして息子の渾身のシュートを見た時に私は使命を得たのだ。

いつのことだったのだろうか。私はサッカーに打ち込む息子の様子を見ようと、グラウンドに向かっていた。

忙しい仕事の合間を縫って息子の練習を手伝っていたのも、大金をかけてサッカーグラウンドを整備したのも、息子がサッカーに夢中になっているという事実が、あまりに

私の心を舞い上がらせていたからだ。

ドカン、バコン!!

グラウンドに近づくにつれ、何かが破裂し、壊れたかのような異音が聞こえてきた。息子に何かあったのではないかと焦った私は、全力でグラウンドまで走った。

そこで私は、息子の力を盗み見たのだ。

光が爆発し、今までの比ではない轟音が鳴り響いた。

壮絶な光景に、何が起こったのか、理解できなかつた。

グラウンドが破壊されて、爆風と煙が巡る。

飛び散った砂礫を避けるために、手で顔を保護しながら惨状を仰ぎ見る。

そこに在ったのは、天使のような光輪を頭上に宿した子供ただ一人。自らの力を確かめるかのように、右手を見つめ、拳を握っていた。破壊の跡と相待って、私には神秘的な光景に映った。

それからと言うもの、私の目には息子が人ではなく天より遣わされた使徒のように映るのだ。

後日、私はグラウンドに隠しカメラを設置し、息子の様子を見守るようになった。決して、バレないように。私如きが、あの才能を邪魔しないように。

いつだっただろう。アインに人払いを頼まれたこともあったな。だが、言われるまでもなかった。以前からあそこに近づくことを認めたのはアインとアインの侍女、工業者ぐらいなものだから。

……どうしてアインの侍女は平然とアインの行いを傍観することができのだろう。私だって赦されるならば、息子の一番近くで、彼の修行を見届けたかった。だが、彼がいらぬことは本能的に悟ってしまった。

息子の最大の理解者で、重要な楔は、私と妻やシエルといった血縁者ではなく、全くの他人であるあの侍女なのだ。

シエルも度々、アインの様子を見に行きたがったが、止めた。無論危ないということもある。だが本質はそこではない。あまりの光に目を焼かれてしまうのだ。私は既に焼き切れている。カメラを通してでも、凄まじく眩しいのだ。



なんなのだあのアインの背後から蠢く影は。

なんなのだあのアインの分け身は。

なんなのだあのアインの必殺技は。

衝撃的な光景全てが、私の心を揺るがし続けた。

私の中にあつたサッカーの常識を覆し続けた。

そうして、アインを見守り続けるうちに、私の心の中にある仮定が生まれたのだ。

神童が、絶え間なく努力を積み重ねたら一体どうなってしまうのだろうか。

命を燃やしながらか極限状態でサッカーに打ち込んだらどうなるのだろうか。

人はどこまで高みに上り詰めることができるのだろうか……と。

そんな好奇心が抑えきれなかった。

本来ならば、親としては息子の無理は止めないといけないう。鬼気迫る姿で命をすり減らしながらサッカーをする姿は、当然看過すべきことではない。

……だが、訴えかけてくるのだ。サッカープレイヤーとしての本能が。サッカー

を愛する者としての想いが。彼を止めるべきじゃないと。

そして見てみたいのだ。あの不可思議な力を身に宿す少年の行く末を。

どうぞ、この事実を知り得た人々は、私のことを最低な親だと罵ってください。

——私はそれでも、この決意を決して曲げることはないでしょうが。

金など無限に用意するし、人だって幾らでも集めよう。なんなら、後ろ暗いことになんて手を出してもいい。

私は息子のためなら全てを投げうつだろう。それが私なりの愛なのだから。

——邪魔者は全て消す。

私はアトリ・クルエンス

私は先祖代々リヒター家の家政を取り仕切る家系、クルエンス家に生まれた人間で

す。ということもあつて産まれる前から、リヒター家に使えることが決まっていたんです。

まあ……昔は少し、嫌でしたけど今はそんなことはありません。最早生き甲斐かもしれないですね。

私が12歳の頃、旦那様のご子息であるアインス様が誕生されました。当時は、家から出てもつと華やかな仕事に就きたいと思つていましたから、モチベーションなんて一つもありません。嫌々、アインス様に引き合わされました。

初めて、お会いした時はなんて無愛想で無表情な子供なのでしょうと思つてしまいました。私にも後々、妹が産まれましたから今考えても、やっぱり変な子です。

そんな微妙な感情しかなかった私ですが、お父様——この家の家令は、「アインス様の専属になるのはアトリ、お前だ」とか言うのです。

ただただ嫌でした。アインス様の存在が、私をこの家に縛り付けるようです。まあそんなことを言つても、最初は見習いということ、補佐といった立場だったから拒否することはできたんですけどね。でも、その決断はしませんでした。お父様が怖かつたら。

それからはどうやって逃げようか何度も考えました。だけど結局家から出ていくことはできなかつたんです。……なぜでしょうね？ 今でもわかりません。

月日はあつという間に流れ、私は15歳になり中学校を卒業しました。義務教育が終わったということで、アインス様の専属を本格的に任されました。アインス様が3歳の頃です。

アインス様はこの頃もやっぱり不気味でした。無表情は変わっていないし、妙に態度が悪い。本当に子供らしくない子供でした。ご家族からは愛されていたみたいだけど……使用人たちの間では、不気味なんて言われてた始末です。

そんな私の認識が変わったのは、星が綺麗な夜のことでした。今でもすぐに思い出せます。

お休みの時間ということで、部屋に向かった私は、暗い部屋で星空を眺めているアインス様と出逢いました。

部屋に入った私も何も言わずにぼうっと星空を見つめていたのですが、唐突に普段は何も言わないアインズ様が話しかけてきたのです。

「オイお前。夢ってあるか？」

意味のわからない質問でした。急すぎてびっくりもしましたしね。なんて返事をしたのかハッキリは覚えていませんけど、確か昔は夢を見てたと曖昧に返したはずですよ。

「そうか。叶えられたのか？」

そんなわけありません。なんてったって、アインズ様の存在が、私をこの家に縛り付けていたのですから。……私もどうしてでしょうか。その時、感情が昂って理不尽に怒ってしまったのです。

あなたがいたから、夢は叶いませんでした。

今考えるととんでもない言い草ですよ。夢を追うことだってできたはずなのに、そ

の選択肢を選ばなかった責任を3歳の子供に押し付ける。

どうしようもなく愚かでした。死ぬまで後悔し続けるでしょう。でも、私の運命を変えた転機でもありません。

「だったら、俺が死ねば夢は叶うか？」

アインス様はこちらを振り返り、そう言ったんです。

その提案はあまりに衝撃的で、愕然としました。

何を言ってるの？ 死ぬって……？

「俺は夢がわからない。無意味に生にしがみついているだけ。だったら、夢を見ている奴が夢を見て生きるべきだろう」

今聞いても、本当に意味がわかりません。でも可愛いですよね。

アインス様は、徐に開いた窓から身を乗り出して、飛び降りようと思いました。ここは四階です。3歳のアインス様が飛び降りたらひとたまりもないでしょう。

チラリと見えたアインス様の横顔は酷く孤独でした。俯いた影に、誰も理解できない

であろう影があつたんです。とてつもない後悔が、一度死んだ苦悩を知っているかのような闇が、私の網膜に焼き付きました。

そのとき私の体は勝手に動きまわりました。飛び降りようとするアインス様の背中に抱きつき、静止したのです。3歳だから流石に簡単でした。今だったら絶対に無理でしょうけどね。

抱きついた時、身長差もあつて私の視界はアインス様の表情を捉えたのです。

私の心臓は跳ねました。心がキュウつと軋みます。アインス様の陰鬱たる後悔を見て、心拍数が際限なく爆発し、顔はきつと真っ赤になつていたはずです。

そして、私はアインス様を直視することを本能的に避けていたんだと察しました。だつて……絶対に壊れてしまうから。愛を知つてしまうから。

案の定、私は壊れてしまいました。

3歳児に恋をすること？ 違います。私はアインス様の闇に触れて、染められて。愛してしまつたのです。

歪な愛かもしれませんが。  
病気と言われるかもしれませんが。

でも確かにそれが初恋でした。そして最後の愛でしょう。

………ここ暫くアインス様はサッカーに夢中で、心の影を見せてくれることが少なくなりました。でも、間違いなく、根底には潜んでいるはずです。私はそれをいつも、いつまでも待っています。——恥ずかしい話ですけど、サッカーの修行で苦しむアインス様はすぐ可愛らしいですからね。気絶したアインス様をお部屋に運ぶ際にどれだけの疼きを感じたことか……

ゴホン。失礼しました。

だから私はアインス様にいらなと言われるまでついていくんです。

アインス様。——死ぬまで一緒です。



ずっと昔、薄暗い裏路地から私はアイツのことを見ていた。

私よりも幼い子供が、サッカーボールを蹴っている様子を。

路地裏でしか生きられない私とは違い、常にアイツは人々の中心にいた。

光というべきなのだろうか。いや、そうは思えない。アイツの周りには盲信者しかいなかったからだ。

だつたら闇というべきなのだろうか。いや、そうとも思えない。アイツのプレーには、夢が見えたからだ。

……アイツは何者なんだろう。そう考えて、私もいつしかアイツから目が離せなくなっていた。

そして私はサッカーボールすらまともに手に入れることができない不条理を呪った。アイツとの人生の格差を知り、嫉妬した。

まともに練習をすることができるとある環境があるならば、俺は死んでもあいつを打ち倒すために努力を重ねただろう。だが、もう俺にはアイツを超えるポテンシャルも、時間もなかった。

無駄に時間をかけすぎてしまったのだ。

だから、私は諦めた。自分自らアイツを打倒する事を。

私は既に成人して、ドイツから日本に引越している。ある野望を胸に秘めてな。

私はアイツのプレーを観察しながら気づいたのだ。

そうだ。私がアイツのことを超えられないならば、

私はアイツを超えるサッカープレイヤーを生み出そう。

私は超えられなくとも、次の世代がアイツを打倒できるように。

徹底的な管理によって、至高のサッカープレイヤーを造り上げよう。

今は叶わなくとも、いつか絶対に、

—— アイツを殺す。

## 11話：ベータ襲来

——未来意志決定評議会エルドラド本拠——

相変わらずここは辛気臭い場所ですねえ……招集命令があったから態々来ましたけど………本当なら来たくないんです。ま、仕方ないですけど。

お邪魔します

私は入室許可を受け議会にテレポートしました。セキュリティ面でも、利便性でもテレポート技術って優れてますよねえ。

議長？ お呼びでしたけど、何か御用でもあるんですかあ？

レポートした先では円卓にお偉方が複数座っています。本当に若い人がいないですよねえ。実力も能力も大したことなきそうなのに、エラソーでムカつきます。

私は早くお勤めを終わらせたいので、私は社交辞令を省いて話を切り出しました。お偉方って放っておくと延々話をするのが嫌いです。

「ベータ。お前にはタイムインタラプトへの介入を行ってもらおう」

タイムインタラプト——歴史の転換点となる重要な出来事。エルドラドはそのターニングポイントに介入することで、現実を書き換えている。

でもお……タイムインタラプトへの介入は危険性を孕んでいるから綿密な計画をもとに行われる……っていう話でしたよね？ それに、私は暫く待機の予定では？

思わず疑問が口から飛び出てしまいました。私たちエルドラドの計画における私の担当は先の話だったはず……今はアルファが任務に当たるという予定でした。私が動かないなんて勿体無いけど、それはそれで秘密兵器みたいなのでアリだなあ〜なんて思っていたんですけど……

「……そうだ。計画を把握しているようで何より。だが、そうも言っていられる余裕は無くなった。手が空いているのがお前しかないのだ」

……？

随分と切迫している状況みたいですけど……一体どういうことでしょうか？ この私を困らせるなんて、議長ったら困った人ですねえ。要領を得ない説明にちよっぴりイライラしますが、私はカワイイので、声を荒げたりなんてしません。

勿体ぶらないで教えてくださいよ。議長。

「そうだな……時間の流れに特異点が発生した。とでもいうのがわかりやすいだろうか。シンギュラー・ポイント。常識や法則によって規定されない何者か。本来ならば存在し得ない「ナニカ」が突如生まれ、時空を歪めているのだ。放置しておく、未来に位置する我々に何か悪影響が出かねない」

議長の周りの取り巻きが同調するように相槌を打つ。確かに……それは相当困ったことですね。でも、どうして急にそんなものが発見されたんでしょう。

「従って、私たちはそのような未来を望まない。有害な過去を棄却する」

そうして、議長はマジメ腐った表情で机を叩いた。

「だからこそベータには時空に突如生まれた腫瘍を切除する任を与える」

腕を組みながら、語りかけてくる議長の表情はいつもより強張って見えました。怖い顔をしているあの人がこんな顔をするなんて、珍しいですねえ。

【セカンドステージチルドレン】

私たちエルドラドの不倶戴天の敵であり、世界を滅ぼす者。私ですら強敵だと感じる怪物たち……そんな宿敵よりも優先しなければいけない歪みとは、一体何者なんでしょうね？ ま、私の敵では無いと思いますが。

「場所は、約200年前のドイツ。そこで1人の男を潰してこい。——これがア—

ティファクトだ」

具体的な命令が下されるとともに、議長から手渡されたのは、薄汚い千切れかけの紙切れだった。確かに200年の歴史が刻まれているといつて間違いない。……でもこんなもの渡さないでくださいよお……手が汚れちゃうじゃないですかあ。

これは……すつごい昔のチケットです？

「そうだ。特異点が6連覇を果たした大会のチケット……200年以上前のものだ」

へえーそんなに昔の大会のチケットの半券が残ってるなんて珍しいですねえ。大体、今は殆ど電子化されちゃってますし、知らない人も多いでしょう。私は資料室に出入りできるので知っていますけど。

「あまりにアーティファクトの摩耗が激しいため、正確な時間にタイムジャンプするのは難しいかもしれない。だが、小学生の特異点と遭遇することはできるだろう。本格化する前に目を摘んでしまえ」

ふーん……小学生……簡単そうな任務です。でも他にアーティファクトはなかったんですかねえ？ 位相がズレて変なところに飛ばされないといいですけど。

「過去で特異点を潰し、以後サッカーに関わらぬようにしろ。方法や手段は問わぬ。ただ、サッカーと特異点との関係を断ち切るのだ」

……随分寛容な条件です。いつもは手段や被害予想とかも制限されることが多いので、自由にやらせてもらえるのは嬉しいんですけど。……何か裏がありそうですね。

それに大体の概要は理解できましたけど、議長は大切なことを言い忘れてます。なんてったって、エルドラドはタイムインタラプトへの介入を行う際は、複数人での作戦行動を推奨しているはずなんです。

私、今のところチームないんですけどおーどうしろってんですかあ？ 1人でも潰せるとは思いますがねー。

私に敵う人なんていませんし、適当に封印しちゃおうかなあ、そんな私の楽しよ



うという思惑は、議長の言葉で遮られたんです。

「単独行動は許さん。チームで特異点とサッカーで試合を行い、撃破するのだ。それが一番効果的であると演算の結果導き出された」

釘を刺されちゃいましたー。全くう！この人たちはサッカーを消したがってるのに、サッカーに執着するんですからあ。でも、私もサッカーなら思う存分敵を甚振れるので嬉しいかな？

「そのために予備のメンバーを選考し、すでにエリア08に召集してある。連れて行け」  
準備が早いこと早いこと。そんなにビビっちゃってるんですね。情けなあくい。そう思いながらも、優しい私は言動には出しませんでした。

はあーい。かしこまりましたあ。早く終わらしてきますわ。

適当に返事をしながら振り返って、テレポーターを起動しました。あと10秒程度

で、召集されたチームメンバーと合流するでしょう。

即席のチーム……差し詰めプロトコルオメガ2。0といったところでしようか。なんだか私らしくないですけど、ワクワクしますねえ。特異点がどんなに悲劇的な結末を迎えるのか、今から楽しみでなりません。

「いいか？　くれぐれも注意しろ。特異点の情報は数少ない」

議長の忠告が、背後から聞こえます。見縊らないで欲しいですわあ。———そうだ！！　議長に聞き忘れてたことがありました。

ああそうでした。その特異点さんのお名前は？

かわいそうですし、手向けの言葉ぐらいはかけてあげましょう。

「———アインス・リヒター。本来ならば存在し得ない、未知の人間だ」

## ——リヒター家グラウンド——

いつもの如く練習を繰り返したアインは、運動後のストレッチをしながらクールダウンしていた。汗を拭きながら、傍のアトリと談笑を楽しんでいたのだ。

夜は更け、月は天辺に至り窓からは月光が差し込んでいた。鈴虫の鳴き声が涼しげに聞こえる。

……しかし、アトリと談笑していたはずのアインは徐に、何も無いはずの空間に振り返る。つられてアトリもその方向を見つめた。

アインたちが座っていたゴールの対面に位置するゴールの前に、怪しげな男女が佇んでいる。タイトで奇抜な模様をした衣服が尚更怪しげに見えた。

数を数えると……十一人。サッカーができる人数の不審者が揃い踏みしていた。どこから侵入したのかわからないが、ここはリヒター家の私有地。犯罪者と言って間違いない。

無いだろう。

「何者だ」

しかし、アインは不審な侵入者たちに淡々と質問を投げかけた。動揺は全く見られない。彼らが何者の正体を把握し、確認をしているような冷静さだ？

「はあい、未来からあなたのことを潰しにきましたベータちゃんですう!!」

不審者の中から一步前に出た少女が、名乗りを上げる。悪びれもしないその態度に、使用人であるアトリは顔を顰めた。

「未来……未来人か」

それでもやはりアインは動揺しない。顎に指を当てながら何かを考える素振りを見せた。

一方でそんな彼が信じられないベータは声を上げるのだった。

「あれえー？ 意外と驚かないんですね。少し恥ずかしいかもー？」

かわいこぶったかのように拳を額に当て、おどけた様子を見せる。「へてっ」といったげなその言動から、飛び散る星を幻視した。

ベータは自らの魅力を最大限に理解しているようだ。しかし、この2人にそんな愛嬌は通用しない。

「アインス様。セキュリテイを呼びます」

「……………いや、要らない。アトリ、お前は家に戻っている。俺がコイツらの相手をする」

「……………わかりました。ご無事で」

やはり彼らには何の意味もなかったようだ。

耳打ちでなされた話し合いの結果、アトリはアインスの言葉を信じ、躊躇うことなくグラウンドから去っていった。素晴らしい信頼感である。

「あれえー？ お姉さんを返してしまつてよかつたんですかあ？ 誰か呼んできて貰えばよかつたのにいゝ」

そんなベータの言葉を鼻で笑いながら、アインは答える。

「お前たちの目的は、俺だろう？　ならば面倒なことはしない」

誰が見ても煽っていることがわかるその言動に、ベータは感情を揺さぶられた。

「……………なんですかあ？　その態度。ちよつぴりむかついちゃいましたあ。じゃあ早速サッカーであなたのことを潰しますねえ…………」

そう言ってベータはサッカーボールをアインに蹴りこもうとする。いつのまにか残りのチームメンバー10名で彼の周囲を囲んでいることから、シュートを蹴り返すことでサッカーという名のリンチを行うのは明白だろう。

「待て」

ボールを蹴ろうと力を込めた瞬間、アインがベータを制止した。

「命乞いですかー？ 無駄ですよお？ こっちは任務で来ているので、失敗したら怒られちゃいます」

しかし、意味はなかった。ベータは磨かれた身体能力を持ってアインを破壊しようとサッカーボールを蹴り込んだ。

——刹那、アインが指を弾く。

ツツツ  
!?!?

思わず漏れたであろう驚きの声が、グラウンドに響く。

アインに打撃を与えようと蹴り出されたボールが何者かによってトラップされ、攻撃は中断されたからだ。

「誰だ!!」

ベータは思わず声を上げた。侵入者は銀髪、蒼目の女性でアインと酷く似通っている。しかし、確実にアインではない。

「——デュプリだよ。俺の」

未来人たちはアインのその回答に動揺し声を上げる。そしてアインが指を弾くと、ボールの篡奪者とアインの他に9名の人影が現れた。

「……デュプリだと？」

ベータは動揺した様子で、口調が乱れる。仲間たちも、予想外のあまり、どよめきだした。

ベータは気持ちを落ち着けるためにも、通信でコチラを確認しているであろう人物を、問いたただいたのであった。

「議長。どういうことですかあ？ この時代の人間がデュプリを扱えるなんて……アレって限られた人間にしか使えないチカラですよねえ？ どうしますう？」

ベータは表面上動揺を取り繕いながらも、上役を問いただす。



「……だからこそ彼女は特異点なのだ。従来の計画通り、サッカーの試合をもって、タイムインタラプトを達成せよ」

ベータは身につけたデバイスの通信機能によって、指示を乞うも想定通りの言葉しか得られない。諦めたベータはアインに決断を告げるのであった。

「……………Yesマスター。——特異点さーん。サッカーでお相手しますから準備してくださいーい！」

「……………望むところだ。塵芥ゴミども」

ベータは自分を軽んじるかのようなアインの言動に、青筋を立てる。

「てめえ……………いい度胸じゃねえか!! ぶち殺してやるよお!!」

斯くして、星空が見つめる中、未来人と特異点の試合が決定したのだ。決して交わることはないであろうマッチアップ。時間と空間を超えたサッカーが今始まるうとしている。

夜はまだ終わらない。

## 12話：天獄

「じゃあ実況の方、よろしくです」

ベータはサッカーボール型の高機能デバイスを操作し、時空の彼方から人間を拉致した。

呼び出されたのは当然、いつも仕事中に呼び出されてしまう不憫な彼であった。正気に戻った暁には意味もわからず、ただただ妻に怒られてしまうだろう。

彼は焼きそばを焼いていたはずなのに、全く違う景色が現れたことに戸惑いを見せるも、即座にマイクによって洗脳され、意気揚々と実況を始めるのだった。

「アインス・リヒターとデュプリの11人〔チームアインス〕に対するは、時空の歪みを矯正するために現れた、〔プロトコルオメガ2.0〕だあく!!」

実況は拳を振り上げ、会場のボルテージをあげようとする。それは熟練の技術でこそあったものの、周りには誰もいないため、意味はない……が。

「かたや自らの選手生命、かたや自らの信ずる未来を賭けたこの一戦。どちらにとつても負けられない戦いだあー!!!」

それでも、マイクに仕込まれた洗脳プログラムは実況をやめようとはしない。ただただ試合を盛り上げようと作用するのみだった。

「あれ？　アインスさんってGKなんですわね。渡されたデータベースにはFWだと思われる……って書いてあったんですけど……間違えちゃったんでしょうか？」

「多分そうじゃない？　情報収集もうまくいってないって話だったし。そのぐらいの間違いなら許してあげましょ」

ベータとオルカは、アインたちの陣形を見ながら、そう話し合う。アインスはFWの位置につかず、ゴールの前まで歩いていったのだ。

「うーん。なんだか引つかかりますけどGKなら遊びやすいですし、まあいいですかね？」

少々違和感はあったようだが、2人は特に気にせず、ポジションにつき、試合の開始を待ち始めた。

ピーーーーー!!!

全員がポジションについたことが確認された数秒後、サッカーボール型デバイスに組み込まれたオートアンパイアプログラムが発動し、笛の音がフィールドに鳴り響いた。そして……試合が始まったのだ。

「ベータ、キックオフ!! ボールを軽快に回していきます! 流石は未来からの使用者とあったところでしょうか!! 技術も間違いなく最新鋭です!!」

速攻を仕掛けるプロトコルオメガ2。0は、アインのデユプリたちのディフェンスを

軽やかに避けながら、短いパス回しで戦線を上げていく。そんな軽やかな動きに翻弄されていくのか、デュプリたちは目立ったディフェンスを見せなかった。

「デュプリを出した時は何事かと思いましたが、大したことないですねアインスさん？ 守る気ないんですかあ？」

「——フツ………得点を決めてからほざいたらどうだ？」

ベータはアインを煽ろうとするものの、意味はなく鼻で笑われるのだった。しかし、ベータの位置は既にゴール前。アインは絶体絶命のピンチであると言って間違いない。

「チームアインス!! ボールを運ばれ、ベータは既に一対一で、シュート体制だあ!! この状況を凌ぎ切れるのかあ?!?!」

「じゃあ早速、一点決めてやるよお!!」

ベータは力を込めて、渾身のシュートを蹴り出した。あくまでも小手調べなのか、ノーマルシュートであるのが救いであろうが、実力のないキーパーなど歯牙にかけず、吹き飛ばす威力を誇っている。

しかし、アインには通用しなかった。

「アインス！ ベータのシユートを見事にキャー！ ツチ！！ DFの助けなしで、プロトコルオメガの攻撃を凌いで見せましたあ！！！」

アインはベータのシユートを右手一本で掴み取り、表情を全く変えることなく、正面を見据えた。

「どうした？ お前の力はそんなものか？」

「……テメエ！！ 舐めてんじゃねえぞ？！！！」

アインは先ほどの意趣返しと言わんばかりにベータを挑発する。そしていきりたつベータを尻目に、アインは前線に向かってボールを投げるのだった。

「ゼクス。突破してヴァイへ繋げ」

アインの命令を聞き。巨大で筋骨隆々の体を持ったデュプリ、ゼクスはボールを器用にトラップしながら駆け出した。

「おーっと！ チームアインス、反撃の狼煙を上げることにはできるのかあー!? 正面にはプロトコルオメガの2人が迫っているぞー!!」

実況の言う通り、ゼクスの目前にオルカとダーナが迫っていた。しかし、ゼクスはパスを回す素振りは見せない。自分単独で突破を試みるようだ。

『ラウンドスパーク』

ゼクスはボールを蹴り上げ、雷の力を宿らせることによって、ボールを擬似的に分裂させる。そんな予想外の動きにより、オルカとダーナは翻弄され、突破を許してしまうのだった。

「ゼクスの必殺技が炸裂う!! そして、ボールはFWのヴァイに渡ったあ!! 大チャンス到来ダア!!!」



針の穴を通すように送られたパスは、ワントップFWであるヴァイをフリーにした。ダルそうにヴァイは肩を落としながらも、役目を果たすべく、優雅にボールの前でくさりと回った。

『フローラルデスペアー』

ヴァイは、突如現れた黒赤の薔薇に包まれる。そして、開花と同時に、その力を宿した種子にバイシクルシュートを叩き込んだのだ。

薔薇の花弁を散らしながら、ボールはゴールへと直進する。だが、プロトコルオメガのキーパーも黙ってやられるわけにはいかない。

『キーパーコマンド07 ジヤイロセービング』

GKルジクは凄まじい回転力を持って、球状の障壁を生み出し、必殺シュートを迎え撃った。

——だがダメだ……その程度の守りではヴァイのシュートは止められない。徐々に障壁は綻びを見せ始め、やがて砕け散ったのだ。ゴールを守るものはもういないと思われる。

静かなグラウンドに実況の声が鳴り響いた。

「ヴァイのシュートが決まつ!? つていなあーい!!なんと、FWのベータがここまで走り込んで、守り切ったあ!!」

ボールはゴールラインまで、後数センチと言うところで止められていた。他ならぬ、プロトコルオメガ2、0のキャプテン、ベータの手によって。

「随分と頑張るじゃないか。見直したよ」

遠くから、アインの声が聞こえる。言葉だけを見ると、褒めているようだが、ベータはそうは思わなかったようだ。

「……………調子に乗りやがって! いいぜえ!!本気でやってやるよ!!!」

ベータはそう啖呵を切り、ゴール前から駆け出していく。GKのルジクは吹き飛ばされたまま、呆然とその様子を見守るのであった。

ベータは鬼気迫る猛攻を見せる。……しかし、両者予想外の實力伯仲により、その後しばらく試合は膠着状態を迎えることになってしまった。片方は攻めきれずに、片方は守り切る。そのような構図が、数度立場を入れ替えながら、行われたのだ。

「前半終了3分前となりましたあ!!!  
しかし、両者無得点、このまま折り返しを迎えるの  
でしようかあ!!」

実況が思いがけない時間の経過を告げる。そして攻めきれない現状に焦りを持ち、フラストレーションを溜めたベータは声を荒げるのだった。

「なわけねえだろ!! このベータ様がそんなこと許すかよ!!」

ベータは強引なドリブルを持って、アインスチームのDFであるノインを吹き飛ばした。本来ならばファウルであろう荒さではあったものの、審判機能はプロトコルオメガに偏っているため、中立ではない。

「ベータの強行突破が決まったあああ!! 残された得点への試練はGKのアインスただ一人、決め切ることができるとでしょうかあ!!」

「はあああー!!!」

実況の声を聞き流しながら、久々に到来したチャンスにベータは声を上げ、集中力と闘志を高める。

「こいつ!! 『虚空の女神アテナ』!!!」

そして、妖艶な女神を呼び出したのだ。ベータの二面性を表したかのような美しくも恐ろしい女神は、2丁拳銃を携えゴールを撃ち抜かんとする。

『シユートコマンドK02』

アテナアサルト』

飛び上がったベータは2丁拳銃から放たれた2つの光弾を伴いながら、ボールを蹴り込んだ。ボールは紫と赤、黒の混じったビームのような軌跡を残しながら、ゴールを穿つ。

対するアインはゴール前の大地に腕を突き立てた。必殺技を発動し、正面から受け止める算段のようだ。

『イクリプス・ヴェルト』

必殺技が成立した瞬間。グラウンドに突如、巨大な門が現れた。ゴールを塞ぐように現れたその門は、漆黒に染まり、豪華な装飾が為されている。その造りは精緻で、壮麗だ。知識さえあれば、無限に鑑賞することができるだろう。

——しかし、その門はどこか……直視したくない。そう思わせるナニカがあった。瘴気のような陰鬱とした、空気が漂っているのだ。門は黒いモヤによって、囲まれており、現世のものではない。

ギギギギギ……

耳障りな音を立てながら少しずつ、謎の門が開いていく。

その先にあつたのは名状し難き巨大なナニカの瞳、コチラを見つめるナニカはベータのシユートに反応して扉から大木のように太く、宇宙のような漆黒に染まった右手を突き出し、シユートを受け止めた。

その存在はベータの化身シユートの威力を歯牙にもかけなかったのだ。ボールをあっさりと掴み取り、門の中に右腕を仕舞い込む。……役目を果たしたナニカは姿を消し、門は閉まり始めた。

一方の選手たちはと言うと皆、あまりの驚きで世界が止まったかのように硬直していた。誰しもが、今見たものを現実であると思えなかったのだ。精神力がガリガリと削られていく音を幻視した。

キーーーーーバタン

不快な音を奏でながら門は閉鎖され、夢幻のように消え去った。

サッカーボールはナニカの召喚主であるアインの手元に収まっている。

誰も身じろぎすらしない。ほんの数秒であるにもかかわらず、数時間の沈黙に感じられた。

.....

沈黙を破ったのは、必殺技を発動したアインだった。

「ベータ。お前のサッカーは悪くない。化身も上手く熟しているし、暴力的で刺激的だ。だが物足りないな」

偉そうに泰然とした態度でアインはベータをそう批評する。

「だから……」

そう前置きしたアインは、ボールを足元に置き、力を昂める。間違いない。シュート体制に入っている。

「そろそろコチラも攻めさせてもらおうとしよう。お前たちもご苦労。退避しておけ」

アインはデュプリたちに労いの言葉をかけ、グラウンドの端に整列させた。まるで、何かの射線から遠ざけるように……

アインは「こい……」と呟き、顔の前に構えた手を振り払った。影が蠢き、形を成していく。間違いない。ベータと同じく化身を発動するつもりだ。

『星海の覇神 ルシフェル』

6対12枚の羽が羽ばたき、旋風が生じた。白い羽が舞い散る。現れたのは天使のような化身。表情を隠す黒い仮面がなんとも不気味に映った。

起こった変化は化身召喚だけではない。アインの頭上に光輪が現れる。フィールドが神気で満たされ、選手たちに思わず跪きたくなるような重圧がのしかかった。

「ツツツ!! バカナ!! デュプリと化身の同時使用だと?!?!」

先ほどまでの悍ましさととの温度感に、沈黙していたはずの誰かが思わず驚きの声を漏らした。



しかし、プロトコロオメガ2.0とて、未来の最精鋭を集めたチーム。ただただ押しつぶされるものなど1人も存在しなかった。凝り固まった体を強引に動かし、予想されるシユートに備えた。

化身を召喚したアインは右足でボールを蹴り、回転数を付与した後、踵でボールを蹴り上げ上空に飛び立った。

腕を組んで不敵に佇んでいた化身——天使は胸の前で手を合わせ、飛び上がったアインに対し首を垂れる。——祈りが捧げられた。

『パラダイスロスト』

天使は背後より幾重もの光条を放ち、一方のアインはボールを刹那の瞬きの間に数十回蹴り込んだ。

力の余波で閃光が迸り、大地が裂ける。

最後の手向けとして、ボールに踵落としを叩き込んだ。太陽のように光り輝く光玉が、稲妻を迸らせながら大地を削り取りプロトコロオメガを襲った。

そうして、サツカーグラウンドの広さ約100メートルに対し、最大射程10キロの超ロングシュートが放たれたのだ。

距離減衰が存在しないシュートは、流星のように敵陣ゴールへ突き進んでいく。

サツカーボールに付き従う、虹色の光条がグラウンドを駆け巡り、プロトコルオメガの選手たちを吹き飛ばす。

「うわあ!!」

「ぎゃああああ!!!」

「なんだこれはあ?!?!」

シュートの進路上にいた選手たちは軒並み吹き飛ばされて、シュートブロックは愚か近づくことすらできない。残すはGKただ1人、数瞬前まで、攻撃を行っていたはずのベータは茫然自失としながらアインのシュートを見送った。

『キーパーコマンド07      ジャイロセー……』

「うわああ!!!」

ルジクは果敢にも必殺技を繰り出し、シュートを止めようと試みるも、刹那の膠着すら存在せず吹き飛ばされる。

ゴールにシュートが突き刺さる。

だがそれでは止まらない。

ゴールを吹き飛ばし、壁を突き破り、木々をへし折り薙ぎ倒した後、行き先を変えたボールは夜空へと消えていった。

空が明るい。光が瞬いたからだ。

空気が冷たい。世界が攪拌され、暴風が吹き荒れたからだ。

視界が濁る。破壊の残滓が空気中に漂っているからだ。

空へ消え去ったボールの軌跡から、十字架を模した赫い光を放つ光柱が創造された。

……まるで原罪を浄化するかのよう。

遠くから笛の音が聞こえる。

「ぜ、前半終了ー!!! アインスチームの先制点が決まり、1対0のまま試合を折り返すことになりましたあ!!!」

先ほどの実況から3分が経過したようだ。先ほどまでの試合運びとは異なりあまりにも濃密な時間だったため、時間感覚が狂ってしまふ。

呆然としていたベータの通信端末が通知を告げる。

「ベータ。撤退だ。今すぐその場から退避しろ」

「————ああ？　撤退だと？　俺のことを舐めてんじゃねえぞ!!!」

撤退の指示を受け、調子を取り戻したようだ。上役に対しても反骨精神を見せる。

「お前はまだ動けるかもしれん。だが周囲を見てみる。視野狭窄に陥っているぞ」

指摘を受けたベータが周りを見渡すと、凄絶な破壊の後に寝そべるプロトコルオメガのメンバーたちの姿があった。誰が見ても、試合の続行は不可能だろう。

「チツ!!　——　Y e s マスター」

舌打ちをしながらも、「撤退だ」と告げたベータはタイムトランスポーターを起動する。そしてアインを睨みつけながら、宣言した。

「お前、アインスとか言ったな。覚えておけ、次はこうはいかない」

悔しげな表情でアインを見つめるベータはそう言い残し、倒れていた選手たちも残さず回収した後、消え去った。残されたのはアインのチームのみ。アイン以外がデュープリであることを考えるとアインは孤独だった。

「……………不戦勝でいいのか？」

アインは1人、チカチカと明滅する灯に照らされながらポツリと寂しげな声を漏らすのだった。

---

……………にしても、過激というか体のラインがモロに出てしまう衣装だよなあ。中学

生みたいな思春期真っ只中の子供達にとつては少々目に毒だ。——いやそんなことはどうでもいいんだよ。

エルドラドにベータか……これ完全に目をつけられたかも知れないなあ。久々に必殺技を試合で使つてたら楽しくなっちゃつて、思わず封印していた化身を解放してしまつた。完全にやりすぎだよなあ。父さんはともかく、アトリには怒られるだろう。

それにエルドラドの目的を知つてると微妙な気持ちになつてしまう。手段は終わつてるかもしれないけど、人類の繁栄のための選択であることは間違い無いからな。全くもつて正義ではないけど、悪でもないだろう。

だからこそ、正当な方法を持つて協力を乞われたならば、力を貸すこともやぶさかではない。変な目的じゃなければ……だけどな。

## 13話：一度の離別

ベータの襲来から早くも1年の時が過ぎ去った。中学校に進学し、果たしてサッカー事情はどうなったのかという……特に問題なくドイツ最強の座を手に入れることができた。まあヒンメルクラウンのメンバーが多く同じ中学校に進学したし、当然だよ  
ね。

俺も更に練習の時間と負荷を増やし、成長を遂げることができた。基礎能力から技術、必殺技の種類、必殺技の練度に至るまで、ある程度満足のいく水準に至ったし、そろそろ計画の決行に移ろうじゃないか。2年生になるまで後数ヶ月というところだし、時期も丁度いい。

時は満ちた。

ドイツから飛び出し、日の出る国へと羽ばたこうじゃないか。

俺がいなくともドイツは更に強くなるだろうし、俺がいれば日本代表はもつと強くなる。心配はいらない。

日本に行つて円堂君の旅路を見守ろう。そして、彼らがもつと強くなれるように手伝うのだ。

後は……ずっと避けていた両親への相談だな……アトリに忠告されてはいたものの、結局先延ばしになつてしまつていた。中身は成人男性とはいえ、体はただの中学生。金銭的にも精神的にも自立していない時分だ。両親の意向を無視することはできないだろう……早く伝えておけばよかつたと、今更のように後悔する。

父さんは俺のことを妙に信頼してくれているし、大丈夫だろうけど……母さんは……まあどうにか説得しよう。

思い立つたが吉日ということで、俺は重い脚を引きずりながら、シアタールームにいる両親の元を訪れた。うちの両親は仕事が忙しく、家を空けていることが多いからこの機会は逃せないからね。

両親は……俺の試合を見てるなあ。ヒンメルクラウンでのデビュー戦の録画か……



いつのまにか撮影していたのだろう。

「父さん。母さんちよつといいかな？」

俺は意を決して、両親に話しかけた。切り出しにくい話題だけど強引に持つていくしかない。

「なんだ？」 「何かしら？」

映像を一時停止して、こちらに振り返った両親は未だに若々しい。もう30代を迎えているはずだけど、20代前半にしか見えない容貌だ。

「父さん、母さん話があるんだ」

「話？ 珍しいな。グラウンドを壊したとかだったら、誰かに言いつけておけば、直ぐでも人を呼ぶが？」

「全く、アインつたら直ぐに物を壊すんだもの。サッカーつてそんなにお金がかかるものなのかしら？」

俺をなんだと思ってるんだこの親……壊そうと思つてこわしてるわけじゃないつてのに……いや、壊してる時点で言われても仕方ないか？ それと母さん、本来はここまでお金かかりません。認識を歪めてしまつてすみません。

「違います。今後の俺の進路についてです」

「なんだ？ なんでも言つてみなさい」

俺は父さんと母さんの近くの椅子に座つたのち、父さんの返事に呼応するように、予め考えておいた言葉を紡いだ。

「俺。日本に1年間留学したいと思つているんだ」

「え？ どう言うことなの？ 日本？」

母さんが戸惑つたように、言葉を漏らす。父さんは黙つて此方を見つめている。

まあ意味わからなくて当然だ。俺がサッカーや守君にかける想いなど誰にもわからないだろうから。だからこそ俺は、本当のことは言えずとも、できるだけ誠実にこの2

人に向き合わなければいけない。

「俺、昔日本に行ったことあったよね。その時に出逢った友達とサッカーしようって約束したんだ。だからその約束を果たすために1年間もらいたいんだ」

「今までもすごく我儘な息子だったと思う。迷惑もかけてきたと思う。でも俺がサッカーを頑張ってきた理由が日本にあるんだ。だから応援してほしい」

今の俺に許されるであろう限界まで、理由を告げた。

父さんは考え込むように、腕を組んで目を閉じる。直ぐに断られないだけ有情といったところだろうか。あまりに唐突な相談だ。それに中学生の時期の1年なんて凄く重要だろうし。

数十秒沈黙した父さんを俺と母さんは見つめる。

そして結論が出たのか、父さんは口を開いた。

「……………良いだろう。行ってきなさい」

「ちよつとアナタ!! アインにとつて今は重要な時期なのよ!! アインはそろそろ私たち家業を継いでもらう準備に取り掛からなければいけない時期なの……………」

「どうやら父さんと、母さんの意見はすれ違ってしまったようだ。父さんはやはり味方をしてくれているようだけど、母の考え方は、別の意味で俺のことを大切にくれている。方向性と方法の違いというやつだな。」

「1年間ならば問題ないだろう。アインは幸いにして、とても優秀だ。あまり時間をかけずとも、私たちの仕事は覚えてくれるはずだ」  
「でも……………」

父さんと母さんの話し合いに熱が入り始めた。立ち尽くす俺をよそに、デイベートを始めたのだ。メリットとデメリットを擦り合わせ、どちらの選択が俺のためになるのかを考えている。——流石高学歴……そんなところまで賢いのか……

「まあいいじゃないか。アインは私たちの期待に応え続けてくれている。なのに私たちが息子の夢に応えられないってのはなんとも道理が通らない。そうは思わないか？」  
「……………」

かなりの時間をかけて父さんは母さんを説得してくれたものの、母さんは頑なに首を縦に振らなかつた。そして最終的に父さんが導き出した説得方法は……

「わかつた。じゃあアイン。私とサッカーで勝負しよう」

「えっ?」 「えっ?」

母さんと俺の声が思わず重なる。父さんと俺がサッカーをするとなんで母さんを説得することに繋がるのだろう。正直意図はわからなかつた。

疑問に思いながらも、俺は父さんに従つた。母さんは……父さんに背中を押されながらグラウンドまで歩いてきた。

「二対一で勝負だ。勝敗はどっちかが諦めるまでということだ。良いだろう。要するに疲れたら終わりだ」

父さんにサッカーを教えてもらったのももう10年前になるのか……だったら、父さんに俺の成長を伝える丁度いい機会かもしれない。それに母さんにも俺のサッカーへの想いを知ってもらおう。

そうして俺と父さんはサッカーボールを追いながら駆け回った。

勝敗など語るまでもないだろう。流石に俺は現役でサッカーをやっているんだ。負けるわけにはいかないよ。

「はあはあはあ……本当に強くなったなあ……」

疲労でグラウンドに倒れ込んだ父さんは、空を眺めながら万感の思いを込めたかのようにな、そう言った。

「……父さんの協力のおかげだね。俺もここまでサッカーに集中できたよ」

俺も父さんの隣に座り込んで話しかける。俺と父さんの対決を眺めていた母さんも近づいてきた。……懐かしいなあ……サッカーを始めたばかりの頃は、母さんもたま

にこうやって練習を眺めていたっけか……

「アイン……凄いのね。ここまでとは思っていなかったわ……」

「……母さんわかったかな？俺たちの息子はもうここまで成長したんだよ」

父さんは母さんと話しながら頭の下で腕を組み、目を閉じた。

「アイン………フットボールフロンティア・インターナショナルって知ってるか？」

——フットボールフロンティア・インターナショナル——通称FFI——イナズマイレブン世界において、世界最強の中学生を決める大会だ。シリーズ第3作目の舞台でもあり、最後の決戦。俺の夢の場所だ。

でも、世界大会が始まるまで、まだ1年以上あるはずだけど、父さんは知っていたんだな。すでに発表はされているのだろう。

「うん。知ってるよ」

「そうか。アインなら知っていてもおかしくない。———だったらそこに留学の条件を

つけようじゃないか」

寝転んでいる父さんは人差し指を空に向かって突き立てた。

「F F Iで世界一になる。それが父さんと母さんとの約束、留学の条件。………それ  
でどうだい母さん。世界一という称号を持つておくことができるのならば。アインの  
将来を心配する必要もないんじゃないかな？ 家業を継いでもらうにしても箔がつく  
しね」

父さんの説得により母さんは考え込んだ。少しずつ風向きが変わってきたことを感  
じる。

「それに母さんはあまりアインのサッカーを見たことがなかっただろう？ さつきの録  
画だつて初めてだ。何か感じたんじゃないかな？」

「それは……」

母さんは昔からサッカーに興味がないようだった。それは今でも変わっていない。



「ただ、俺たちの戦いは心を動かすことができたみたいだ。母さんはゆっくりと口を開いた。」

「……………わかりました。アイン。日本に留学して良いわよ。だけど一年きつかりね」

「やったあ!! ありがとう!!」

「それと世界一になること。これも約束してちょうだい」

「わかりました。俺は必ず最強の称号を持って帰ります」

勝たなければならない理由がまた一つ増えたなあ。両親へ恩返しのためにも、俺は世界を手に入れる必要がある。ドイツ代表として、勝利の栄光をこの地に齎す。

「ははっ! 男なら世界一という称号に憧れるものだ。父さんは無理だったけど、息子が達成してくれるのなら、最高だなあ!!」

「ふふっ! 懐かしいわね。貴方が夢を追っていた頃が」

大らかに笑った父さんは、かつての夢を噛み締めるかのように、目を瞑っている。母

さんはそんな父さんを見ながら、微笑んだ。

穏やかな時間が流れていく。そんな中で、父さんは表情を引き締め俺に忠告をくれた。

「シエルとアトリにも話しておくように。あと……誰を連れて行くのかも考えておきなさい。父さんと母さんはここから離れられないからね。留学する以上、自立しなければならぬよ?」

「はい父さん」

「まあアインはしっかりしているから心配していないけどね」

アトリには話は済ませてあるし……話さなければならぬのはシエルと友達……か。シエルは今家にいないから帰ってきたら部屋でも話をしよう。

---

## ——その日の夜——

俺はシエルに留学を告げようと、彼女の部屋を訪れていた。小さい頃は一緒にいることも多かったが、俺たちはもう中学生。殆ど話すことも、顔を合わせることも少なくなっていた。正直ちよつと気まずい。

部屋の前に辿り着くと、控えていたシエルの専属メイドに頭を下げられる。たしかアトリの姉妹だっただろうか？ 彼女より真面目で性格は正反対だけど容姿はよく似ている。

「アインス様。いかがしましたか？」

「少しシエルに用があつてね。入っていいかな？」

畏まって話しかけてきたメイドに目的を告げる。最近アトリは敬語すら怪しくなってきたから、似た彼女に敬語を使われるとなんともむず痒い。

「……かしこまりました。お待ちください」

なぜか驚いたかのような表情をした彼女は部屋の扉をノックし、シエルに俺の来訪を告げた。

「——シエル様。アインズ様がお越しです」

「……………どうぞ。入ってください」

久々にシエルの部屋に入ったかもしれない。いつのまにか女性らしく、可愛らしい部屋になっていた。

「シエル。ちょっといいかな？」

「急にどうしたんですか兄さん」

シエルは椅子に座りながら、勉強をしていたようだ。かなりの進学校に通っているようだから、地元の中学校になし崩しに進学した俺とは課題の量も違うのだろう。サッカークラブのみんなはアレクに合わせて進学したからなあ……

「……………勉強は順調か？」

意を決して話にきたものの、ここ最近話してなかったから本題を切り出すのが難しい。シエルに近づき、適当な話題を口にした。

「……兄さんには負けませんが、これでも主席なんです。勉強に困ったことはありません」

「そうか。頑張っているな」

「……皮肉ですか？ いつも私に興味なんてない癖に……」

そんなつもりはないけど……俺はシエルを妹として大切に思っているし、そう扱ってきた筈だ。

「兄さん以上に努力している人なんていないと思います。これでいいですよ。——  
—それでなんの御用ですか？ そんな世間話をするためにきたわけじゃないですよ  
？」

あたりが強くて辛い。涙が出そうだ。なにが理由で嫌われてしまったのか、全く俺は

わからない。コミュニケーションは治ってきたと思っていたのだが……

「1年間、日本に留学することを決めたんだ。父さんと母さんにも話を通してある。その報告にきた」

「……………そうですか。前に私は聞きましたし、反対する理由もありません。別に良いんじゃないですか」

とてもそうは見えない。不機嫌そうに綺麗な顔を歪めている。興味がないと、無表情に返されると予想していたのだが、少し想像とは違った。

「そ、そうか。じゃあ来月から1年間いなくなるからさ。よろしく頼むよ」

そう言い残し、居心地の悪い俺は部屋から出て行こうと身を翻した。なにをよろしくしたのか自分のことながらわからない。動揺の余り、適当な言葉が出てしまった。

着ていた服の袖口を掴まれ、制止される。驚きが思わず漏れそうになるも、どうにか持ち堪えた。

「兄さんっていつつもそうですよね！ 常に自分の道を貫き通して……周りの人のことは気にしない。……私がどれだけ兄さんのことを追いかけているのかも全然気づかない」

シエルは訥々と疑問を口にする。冷たい口調には裏腹に、どこか苛立ちを感じさせる声音だった。

「多くの人が兄さんを追いかけていても振り返らないし、周りの人からどう思われていたって歪まない。……どうしてそう生きられるんですか？」

シエルは何か思い悩んでいるのだろうか？ だとしたら俺は家族として、双子の兄として力になりたい。例え情けない兄だとしても、間違いなく血は繋がっているのだから。

「そんなの決まっているさ」

「後悔しない人生を歩むためだ。俺が日本に行くのだから夢を追うためだしね……不

器用な生き方だとは自覚してるけど、結局他人からの評価なんて、人生からしたら瑣末なものだよ。」

「……面白いですね。本当に兄さんは変わりました……これもサッカーの影響なんですかね……」

薄っぺらい言葉かもしれないけど、どうにかこの想いを伝えようと、俺は必死に言葉を紡いだ。口下手な性格をこれほど悩ましいと思ったことはなかった。

「変わったかなあ？　ただただシエルは頭がいいから、たまにはバカになって我儘に生きてみなよって伝えたかっただけなんだけど……」

「変わりましたよ。——今までは全く兄さんのことが理解できませんでしたが、何となくわかったような気がします。それに——忘れてしまっていましたけど……昔、兄さんから我慢するなって言われたことを思い出しました。本当に小さな頃の話ですけどね」

俺……理解されてなかったの？　あんなだけ仲良かった双子の妹に……？　でも、何だかシエルの表情が和らいだような気がする。昔の話……は覚えてないけれど、少しは力



になれたのかな？

「それでは留学頑張ってきてください。あと……帰ってきた時を楽しみにしておいてください」

「えっ？ どういうこと？」

「ナイショです。ほらそろそろ私は寝るので、帰ってください……それとも昔みたいに一緒に寝ますか？」

シエルは憑き物が落ちたかのように清々しい笑顔で俺の背を押した。シエルも大人になったんだなあ……俺なんかよりよっぽど大人になったよ。だって……俺はシエルになぜ避けていたのかすらわからないんだから。

「それはまずいなあ。そんな年齢じゃないよ」

シエルが元気になって良かった。そう思いながら俺は部屋を出ていく。

一抹の不安を抱えながらも。久しく冷え込んでいた兄妹仲が少し熱を帯びたように感じた。俺は暫くドイツを留守にするわけだが、シエルにも電話をかけようと誓った。

もう中学1年も終わりかよ。時間が流れんのはええよなあ——。サッカーばつかやつてると、あつちゅーまに時間が過ぎるんだわ。

にしても中学生プレーヤーも齒ごたえなかつたよなあ。スタメンも奪つて、中学生大会も優勝した。こりやもうドイツはもう征服したつて言つていいよなあ？

ん？ 話がある？ 早く言えよ。前置きなんて別にいらねーだろ。

——ハア!? 日本に行くだと!?!?

何言つてんだ!! ——しかも来週から1年間!?!? もう家も用意してあるつて？

おいおい!! うちのチームは来月イタリアと親善試合やるんだぞ!! 噂じゃああつちは国の代表選手を含んだベストメンバーで来るつて話だ。勿論、噂のヒデ・ナカタだつてな。

だとしたらこつちのエースも不在つてのはおかしいだろお——!?

キーパーだからエースじゃないって？ いや精神的な話をして……いやいや重要なのはそこじゃねえよ!! いきなりすぎるだろ!! キャプテンのお前が1年も抜けるってなったら後任どうすんだ! 先輩たち不甲斐ねえしなあ……

エツ!!?! 後任のキャプテンはヨナスに頼んであるって……? それに監督にも話を通してある……?

………なんだよお前!! そこまで話を進めてたのかよ!!! 水くせえなあ……  
で理由は? ——夢を追うため? 日本で約束がある?

———そりゃ卑怯だろ……俺が否定することなんて出来ねえじゃんか。それに他の奴らにはもう話を通してあるんだもん……

———わかったよ。ここはこの俺様! アレクサンダー・ハウゼンに任せろ。

お前が帰ってくる場所はバッチリ守っておいてやるよ。任せとけ!! それにもっと強くなつといて、お前のことを驚かしてやるかな!!

元気に過ごせよ——!! 達者でなあ!!!

## 二章 日本一への旅路

### 14話：衝撃！異国からの転入生!?

「は～いみなさん。今日はそれだけじゃなくて大事な連絡があります。ウチのクラスにドイツから転入生が入ることになりました。入ってー」

ドイツを発つて数週間後、俺は稲妻町にある私立中学校、雷門中で廊下に立たされていた。

担任の先生の言葉を聞き、教室の中に入る。ガラガラという引き戸の音がなんとも懐かしく思えた。

「アインス・リヒター君です!! 仲良くしてあげてね」

先生の紹介と共に俺は堂々と黒板の前に仁王立ちし、クラスメイトの皆に目を遣る。

教室中がざわめいている。どうやらクラスメイトの女子たちにキヤーキヤーと言われているようだ。——やっぱり俺ってイケメンだよなあ!? ドイツにいた時はクラスメイトからこういう対応がなかったから自信を失いかけていたのだ。

「あぁっ!!! お前は!!」

ガタリと音を立てながら立ち上がった人に注目すると、オレンジ色のバンダナをつけた彼だった。何とも運がいいことだ。

それから周りを見渡してみると……木野さんと大谷さんも同じクラスみたいだけど……豪炎寺君はまだ居ないみたいだなあ。

「久しぶりだね守君。会えて嬉しいよ」

「アイン?!?! ひっさしぶり!! 早速だけど!! サッカー部に入ってくれえ!!」

「唐突な話をだねえ。でも構わないよ」

「本当かあ!?!」

「でも籍を置くだけにしてほしい。今怪我の治療中でね」

本当にいきなりな守君の勧誘を受けたわけだが、暫くのうちは、怪我を負っているということにして、日本での環境作りに勤しみたい。それに、やっておきたいこともあるからな。

「うそだろ?!」

「本当だよ」

守君はあんぐりと口を開きながら、嘆きを露わにする。  
いや、嘘だけどき。ごめんね。力は貸すから許して欲しい。

「ゴホン!!」

教室に先生の咳払いが響き渡る。立ち上がっていた守君は恥ずかしげに、椅子に座るのだった。急すぎだ。木野さんは呆れたかのように顔に手を当てている。

「久しぶりだなあアイン!!」

「久しぶりだねえ。俺のことなんて忘れてしまったかと思っていたよ。もう10年近く前の話だからね」

「アインのことを忘れるわけなんてねえだろ!!」

クラスメイトの囲いからどうにか逃げ出した俺と守君はサッカー部の部室の中にいた。年季の入ったその部室はどこか汗臭く、古ぼけていた。

でも何だか嫌いじゃない。先人たちの血と汗が染み込んだ場所であることを知っているからだ。

「……アイン君と守君って昔の友達なんだよね?」

この場にいるのは俺と守君だけじゃない。クラスメイトの木野さんも教室からここまでついてきてくれた。

「そうぞぞ! 昔一緒にサッカーしてから友達なんだ。小学校に入る前だから……正確にいうと8年前の話なのかな? そこで一緒にサッカーしようぜって約束したんだよ」

「しかも1日だけの関係だからね。本当に覚えていてくれて嬉しいよ」

しつこいようだが、守君が俺や俺との約束を覚えてくれていて良かった。

俺は守君の未来を知っていたからわかかって当然だけど、守君は俺をよく判別できなかった。体もかなり大きくなったし、何より目つきが鋭くなってしまったし、俺はかなり変わってしまったはずだ。

「へえ、そうなんだ。アインス君はドイツにいたんだよね？」

木野さんは包容力のある少女のようで、守君を見つめる彼女の目はとても優しかった。彼女にも一ノ瀬君と土門君という離れ離れになってしまった幼なじみがいるから、気持ちが変わるのだろう。

「アインでいいよ。——生まれも育ちもドイツっていう生粋のドイツ人だからね。今回日本に来たのは親の仕事についてきたってわけさ。多分日本にいるのは1年ぐらいになるかな」



嘘をつくのは心苦しいが、正直に話すわけにもいかない。それっぽいことを言って誤魔化しておこう。

「1年か……短いなあ」

守君は触覚をへにやりと曲げながら肩を落とす。守君はどこまでいつても人を疑わない。嘘をたくさんついてしまつて申し訳なく感じてきた。

まあ短いけどその分楽しんで過ごすよ。よろしくね守君、木野さん。

「よろしく!!」 「よろしくね!」

そうだ! 2人に今のサッカー部の状況を聞いておくとしよう。サッカー部に入るわけだし、気になって当然だろう。

「守君は今もサッカーやってるんだね」

「当然だろ!! 部長だつて任されてるんだぞ!」

「ほうほう……そう言えば部活に入ってくれて言っていたけれど、どういふことな

のか詳しく教えてほしいな」

「任せろ！ アインもサッカー部の一員だからな！」

まだ入部届も出していないのに、守君は気が早いなあ。守君と木野さんは楽しそうにサッカー部について話し始めたのだった。

部員は俺を除いて7人で帝国学園の練習試合が決定する以前の時系列だということがわかった。後はサッカー部設立のための裏話とか、部員の面白い話も聞けてとても楽しい時間になった。

「おーす」「こんにちわ！ でやんす」

今までの話を2人から聞いていると部室のドアが開き、部員のみんなが入ってきた。まともな部活動はできていないのに、ちゃんと部室に集まるあたり律儀な中学生たちだ。

そうして部室に染岡に半田。一年生の壁山、穴戸、栗松、少林寺が勢揃いし、現在の

雷門中メンバーが揃ったというわけだ。

「誰でやんす?」

栗松が俺の方を見ながら、キャプテンである守君に疑問を投げかける。他の部員たちも当然気になったようで、頷いていた。

「アインっていうんだ。俺の友達で転校生。それに何と言ってもサッカー部の新入部員だ!! ……怪我中だからスタメンには数えられないけど……」

「『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』」

守君の小声での補足が聞こえていないのか、部員の皆から歓声上がる。やる気はなくとも一応喜んでくれるんだな。……と思ったけど、全員が全員喜んでくれたわけではなさそうだ。

染岡君が口を開いた。

「でも今更入部しても仕方ないさ。もうすぐ廃部っていう噂もあるしな」

部室の中が響めいた。サッカー部の面々が各々驚きの声を上げたからだ。でも守君はそんな噂を信じていないようで、声を張り上げたのだった。

「いいか!! 俺がサッカー部を廃部になんてさせない。だからそんな話気にするな!!!」

あまりの声の大きさに、オンボロな部室が揺れたようにすら感じた。守君はこの頃からキャプテンシーがあるし、声も大きいようだ。煽りみたいに聞こえるかもしれないけど、キャプテンとして、司令塔として声の大きさが結構重要なフアクターだからね？

「そう言えばアイン。ポジションはどこなんだ?」

守君は陰鬱とした空気を払拭するべく、話を無理やり捻じ曲げた。一応だけど俺は部員になったわけだし、未来の話に目を向けたというわけだ。

……でも俺のポジションはどこにするべきなんだろう……? GKだと守君と被る

し……FWだとやり過ぎる可能性がある……MFでお茶を濁しておこうかな。

「MFを任されることが多かったね。でも、どのポジションも経験があるから、それなりに期待してもらっていいよ」

「本当か!? だったら怪我が治るのが楽しみだなあ。俺たちにも色々教えてくれよな！」

守君は向上心があつていいねえ。これでも仲間に色々教えてきた身だ。その辺は慣れている。偉そうかもしれないけど、監督の真似でもして指導していこうか。

「おいおい、そいつに俺たちに教えるぐらいの実力があるっていうのかよ。しかも怪我してるんだろ?」

またまた染岡君じゃないの。ちゃんと話を聞いてくれていたみたいだけど……まだまだ当たりが強いというか、ネガティブなことを言うというか……まあ豪炎寺君との繋がりによって成長していくから仕方ないね。

「そんなことを言わなくたって——

俺は守君の擁護を遮り染岡君に話しかけた。態々庇ってもらうほどのことでもないさ。

「別に嫌なら聞かなくていいよ。必要だと思ったら言ってくればいい」  
「チツッ！　そうかよ」

染岡君は舌打ちをしてそっぽをむいた。捻くれてるなあ……容姿もヤクザみたいだし、その言動だと少し怖いかもしれない。

「ま、そんなこと言っても練習場所がないでやんすけどね」

何だこの栗、ネガティブなことをいつてるんじゃないやねえ!!　守君は河川敷のグラウンドで稲妻KFCの面々に混ぜ違って練習してるんだぞ!!　それにお前が後任の部長になるんだ!!　本格的な練習が始まったらたつぷりしごいてやるからな!!

おっと、イラつきが表情に出そうになってしまった。どうにか取り繕って部員たちを

見つめてみると……

「そうなんだよなー」

「アインズさんが入ったとしても部員7人ですからね」

栗松と穴戸はそう言って栗松に同調し、ゲームを取り出して遊び出した。初期はやる気ないからなあサッカー部の面々。

少林は拳法の拳法の形を繰り返し、壁山はどこからか取り出した菓子を貪り食っている。

「ま、よろしくな」

守君に次ぐ、現サッカー部の良心半田君が俺の方をポンと叩く。優しいけど……彼もそんなにやる気はないんだよなあ……

はあ……大丈夫なのは知っているけど……それでも心配になるほど散々なサッカー部の状況だ。俺が所属していたチームではこんなことなかったからどうしたらいいかわからないや。

ガラガラガラ……

「アインだったらここにいたのね。サッカー部だからもしかしてと思ったけれど。ほら帰るわよ。買い物手伝うんでしょ?」

「……!! ああごめんごめん。今行くよ」

部室のドアが開いたと同時に入ってきたのはイメージカラーが紫色の彼女だった。小学校の頃より身長が伸び、もはや俺と身長はあまり変わらない。相変わらず無愛想ではあるが、それでも人気が出るほどに美人に成長していた。

彼女の名前は当然、遊馬 鷗玄。日本生まれ、ドイツ育ちの少女だ。俺の両親と相談して、日本までついてきたのだ。

なんでっ  
!?!?



## 15話：数多の出会い

日本に引越してから数週間が経ち、学校生活にも慣れてきた頃。俺は運良く隣の席になった守君と、ホームルームを聞き流しながら雑談に耽っていた。

「アイン！ 聞いてくれよ!! 昨日すごいやつを見かけたんだよ!! ズバーンって感じのシュートを不良に叩き込んでさー」

守君が彼の話を熱心に語る。おそらく、昨日夕暮れ時の河川敷で将来の親友に出会ったのだろう。

「どんな人？」

俺は心当たりがあるにも関わらずとぼけた返答を返す。

「えつとなあ……白くてツンツンした髪をして……日焼けしてる……俺たちと同年代のやつだったんだけど……」

「あんな感じの人？」

俺は黒板の前に立っている男を指差した。丁度今、先生がホームルームで転校生を紹介していたのだ。

「そうそうあんな……って!! あ——?!?!」

守君の声でつか。守君は転校生を指差しながら大声をあげて立ち上がった。つい最近見たばかりって感じの光景だ。立場は逆だったけど。

でも彼はちゃんとこのクラスに入ってくれたか。俺が転入生として入学したから別のクラスになってしまっかな? なんて懸念していたんだけど大丈夫だったみたいだ。

転校生の名前は【豪炎寺修也】雷門中の不動のエースであり、炎のストライカー。今はトゲトゲしい雰囲気をしているものの、後々守君の親友として彼を支える存在となる

男だ。

彼の必殺シユートによって、イナズマイレブンは再起することになるわけだから、守君に次ぐキーマンであるというわけだな。

ほら、守君は休み時間になったとたん、豪炎寺君に入部の誘いをかけている。まるで運命を感じたみたいに。

「豪炎寺、お前もサッカー部に入らないか？ 木戸川清修ってサッカーの名門校なんだろう？ どうりであのキック！ すごいはずだぜ!!」

意気揚々と守君は豪炎寺君に語りかけている……が。

「サッカーはやめたんだ」

「どうして……」

「俺に構うな」

豪炎寺君は守君の勧誘に対し、頑なに素気無い態度を取っている。まあ当然断られてしまったようだ。

……初期の豪炎寺君は妹の夕香ちゃん交通事故を、自分のせいだと気に病んでいるからな。悪いのはグラサンの所為なのに。

「田堂！ 冬海先生がお前を呼んでる。校長室に来てき。大事な話があるらしい。俺、嫌な予感がするんだ。例えば廃部の話とかさ」

悲しげに顔を伏せていた守君は、いきなり現れた半田君に呼ばれてどこかに去っていった。コレは………夏末さんに呼び出されたな。いよいよ原作が始まるというわけだ……

待ちに待ったこの日が来てしまったか……10年間ぐらいこのために頑張ってきたと考えると感慨深いものがある。

ま、大変なのはここからだけだよ。

「——てなわけですと帝国と練習試合することになったわけだ」

部室に集まった部員たちに守君は、帝国との練習試合の決定を告げた。理事長代理とかいうよくわからない権限を持った夏末さんに焚き付けられたのだろう。顔を真っ赤にして、ムキになっていた。

「ムリ、絶対ムリ」

「ボコボコにされて恥かかされるだけですよ」

しかし、部員はそんなやる気の守君とは打って変わって、既に廃部を認めただかのようには諦めていた。ネガティブな言葉が飛び出し、暗い空気が部室の中に漂い始める。

……それも無理はないよなあ。この世界に来てから帝国について調べ直したけど、本当に黒いウワサしかなかったもの。帝国に負けると学校が破壊されるっていう代表的なウワサに始まり、事故を故意に起こして対戦校を陥れるなどなど真実と嘘が入り混じって混沌とした評価となっていた。学校としてそれでいいのか？

——これもすべて影山つてやつのせいなんだ。

……冗談めかしていったけど、あながち間違つてないんだよなあ。イナイレ世界の宿命の悪役として、多くの作品に出現してるし、あの人。

守君は暗く、俯く部員達を横目に、帝国戦までに部員を11人集めると言つて部室から飛び出していった。俺は追いかけるとしようか。

「守君。新入部員にアテはあるのかな？ 豪炎寺君に断られてしまったとなると、最低限必要な部員数は俺を除いてあと4人だよな？」

「————ない。ひたすら探すだけだ!!」

守君はなんとしても成し遂げると、自信満々にそう言った。時間は短い。頑張つてほしい。

ま、大丈夫なのは知っているけどね。

「そうかあ。じゃあ手分けして探そうか」

俺も一応手を貸すべきだろうか？——いや、違う人を集めてしまいたいそうだし、俺は傍観しておくでしょう。というところで、時間を潰すべく、俺は雷門中の探検を始めたのだった。一応、部員集めしてる風じゃないと酷い奴になっちゃってしまうからな。

——校舎内——

あの小柄な男の子は……レアキャラの香りがするぞ。

たまごろう？ だっけ。漫画では重要なキャラだったけど、ゲーム内では何回も話しかけないと仲間にならなかったはずだ。

……仲間にするというわけじゃないけど、なんだか好奇心が湧いてきた。話しかけてみようか。

「君、ちよつといいかな？」

「!!」

たまごろうに逃げられた……話しかけたただけなのに……悲しい。

—— 体育館 ——

……なんか見覚えあるなあ。あのバスケット部の人……町田だっけか？

よくわからないけど隠しキャラみたいで、俺は仲間にはしなかつたけど、とある配信で愛人枠として使われているのを見たことがあるぞ……

ホーントレインが得意な人だった気がする……無性にドラゴンキャノンを教えたくなってきたぞ……

でもなんだか汗でテッカテカに光り輝いている……それにどう考えてもあのパンプアップした筋肉は中学生には見えないよ……話しかけにくい……



また今度ということ……

——教室——

薄暗くなりつつある雷門中を探索していると、自分の教室である少女に話しかけられた。

「あ、あの……円堂君とどういう関係なの？」

大谷さんだ。まさか話しかけられるとは思わなかったけど、何か用事かな？

「うん？幼い頃の友達……かな？一度しか会ったことはなかったんだけどね。君は？」

「お、大谷つくしです！お友達からよ、よろしくお願いしますう!!」

顔を赤くして駆け出して行ってしまった。なんだったのだろうか？

お前もサッカー部に入らないか？

とは流石に言わなかったよ？

——自宅——

その日の夜。俺は雷門中の近くに用意された一軒家の中で、豪勢な夕食を食べていた。勿論調理したのは一緒の一軒家に暮らしている、アトリとムクロ。2人とも昔からよく料理をしていたようで、その腕前はプロ級だ。

家も綺麗だし、日本での暮らしに不満は全くなかった。地下には当然広大なサッカーグラウンドが用意されているしね。でも、本来はもつとんでもない豪邸になってしま

いそうだったんだ。維持に使用人を雇わなければいけないということで、どうにか断つたけどさ。

「つてわけで今は部員集めに奔走中なのさ」

食卓を囲んでいるのは俺とアトリとムクロの3人。実家で使用人と食事を共にすることはなかったけど、2人は家族のようなものだし、ここには厳しいルールなんてない。気ままに暮らすことができていた。

「——私に入れてってわけ？」

ムクロは俺の部活話に対し、不服そうな態度を取る。そもそも付いてくるとは思っていなかったから、ムクロに何かをしてもらおうとは思っていないなかったんだけど……

「今は大丈夫。そのうち力を貸してもらおうことになると思うけどさ」

どうせなら守君たちの強化のために、一肌脱いでもらおうとしようか。

「アインス様もムクロも仲のいい友人ができて良かったですねえ。2人とも友達が少ないですから」

ステーキを口に運びながら、今後どのようにしていくか考えていると、思わぬところから言葉の刃物が飛来し、俺とムクロを切り裂いた。

「うるせえ！　ムクロよりマシだ!!」

「うるさい！　アインよりマシよ!!」

「図らずも、ムクロと同じ反応をしてしまった。……これが似たもの同士という奴か……アトリは苦笑いしながら、俺たち2人に目を配る。」

「そういうところですよ。でも……守君と夏未さんでしたっけ？　友人ができたのは良かったですね!!」

ムクロは雷門中理事長の娘こと、雷門夏未と同じクラスみたいだったようで、仲良く

なつたらしい。確かに少し似ているところもあるし、昔の孤高の彼女を知っている身としては成長が感じられて嬉しいよ。

ムクロにとって日本は母国であるはずだけど、友達がない学校に通うのは辛いからね。

……なんか過保護すぎないかな俺。ムクロの親なのか？ そうそう、ムクロの両親とは話したことがあるが、なぜムクロが捻くれたのかわからないぐらい良い人たちだったということだけは言っておこう。

「アイタタタタ!!」

ムクロにほっぺたを引っ張られた。俺の邪念に勘付いたのだろう。

「なんか失礼なこと考えてない？ ……ほら早く練習に付き合つてよ」

「いったあ……待つてよ。まだ食べてるでしょ？」

勿論ムクロが付いてきたのはサッカーの練習を俺に見てもらおうためなのだろう。

……そのぐらいしか理由ないしな。だからといって、食事直後に運動させるのはダメでしょうが！

というわけで、俺についてきたのはアトリとムクロの2人だった。アトリがついてくるであろうことは想定していたが、まさかムクロが……ドイツを発つと話をした時に、妙に反応が薄かったのも、俺の両親に直談判することを考えていたからなのだろう。

ムクロは母さんに妙に気に入られているから、多少の無理は効く。それに1人留学が増えるぐらいなんでもないような資産があるからね、ウチ。

まあ家でも寂しくないのはいいね！アトリなんかは知り合いもないし、できにくいだらうからムクロがいて助かった。結構この2人も仲がいいからな。

俺がこうやってのんびりと夕食を堪能している頃、今頃サッカー部みんなは一致団結して努力を始めた頃だろうか。……いいなあ。参加できない俺は水を差してしまうから混ざっていないけど、本当は混ざりたかったなあ……

——何処か——

おっ！ 久しぶりだな!! —— ちゃんと成長してるみたいだな。

日本に反応があつたから、来たつて？ ありがとう！

どうだい？ もう計画は始まつてるんだろ？

……修行漬けねえ。きみたちは石を使わないもんね。そりや大変だよ。

みんなと練習しすぎて、やり過ぎちやわないか心配だつて？ 大丈夫だよ。壁は高い

方がいいからね。こつちも時間はないけど少し動かせてもらうし、心配はいらないさ。

そうだ。情報交換しとこう。手を繋いで。

—— ありがとう。中々楽しそうに過すごしてるじゃないか。良かったねえ。

—— え？ 愛着が生まれてしまつたつて？ それに目的を遂げたら私はどう生

きればいいのか？ —— うーん……自由に暮らしなよ。別に無慈悲になれつて言

うわけじゃない。俺も維持は慣れたし、君もそのまま生きると良い。何かあれば電話か

けてくれ。コレ、番号ね。

じゃあまた会おうリア。



## 16話：帝国と影山

——帝国戦当日——

「みんな、紹介するよ。今日の試合。助っ人に入ってくれる。松野空介だ！」

「僕の話はマックスって呼んでいいよ」

部員は新たに3人集まったようだ。守君が勧誘したサッカー部員をそれぞれ紹介してくれた。

なんでも器用にこなす松野空介に、存在感が異様に薄い影野仁。陸上部から助っ人として入ってくれた風丸君。雷門中は更に個性的なメンバー揃いとなった。

後1人はギリギリでメガネが入るだろうし、コレならば原作通りに帝国学園を迎え撃てるだろう。

そうして練習試合の時間が近づいてきたので、俺たちは特別に貸し出された雷門中のメイニングラウンドに立っていた。

ゴオoooooooooooo!!!

おお……すつごい土煙を立てながら帝国がやってきたみたいだ。本当に真つ黒なあれはバスなのか？ 戦車じゃね？

俺は呆然としながら、校門付近に停められた帝国の装甲バスを眺めていた。帝国学園は敗北した学校を破壊するっていうぶつ飛んだ話があるから怖いよなあ……意味がわからない。

イナズマイレブンの権力関係はぶつ壊れている。何が起こつてもおかしくはないからな。

ま、壊そうつてなつたら俺が逆に壊してやるけどね。

バスの屋上の屋上のハッチが開き、サングラスの男が飛び出してきた。……たしか、豪炎寺君の分析のために影山も来てるんだよな。

どうしようかな……近くで見てもいいけど、豪炎寺君に俺がメガネの代わりにな

と思われるってしまったら大変だし……なにより影山にバレたら面倒だし……離れておこうかなあ……多分影山は俺のことを把握していると思うんだよな……

ということで、俺は違う所から試合を観戦しようと、守君に話しかけるたのだった。

「守君。急にごめん急用を思い出したわ。少し出て来るね！ 応援してるから頑張つて!!」

「お、おう！ 心配するな！ サッカー部は俺たちが守るからさ!!」

サッカー部の面々が、帝国の練習風景を見て動揺している。薄情だとは思いますが、この隙に抜け出してしまおう。

「守君たちならきつと勝てるさ!!」

俺はそう言い残し、その場を離れた。どこで観戦しようかな……つとムクロが近くの木に寄りかかりながらこちらを見ている。昨日話しておいた、帝国戦のことを覚えていたんだな。

「一緒に屋上から見ようぜ！」

俺はムクロに近づいて、共に観戦することを提案する。そうして俺とムクロは雷門中の屋上から試合を眺めるのであった。

俺とムクロはフェンスに寄りかかりながら校庭を見つめる。俺たちならこの程度の高さから落ちててもなんともないから高所は怖くない。てか、怖かったら必殺シユートなんて使えない。

「あら？ アインは参加しないのかしら？」

「……色々あってね」

「まあ、あんなレベルの低い連中とサッカーやるなら、寝ている方がマシなものね。……本当に何が目的でこんなところに来たのかしら……あそこの……日本最強の帝国学園……？ も全然大したことなさそうじゃない」

「……今はそうかもしれないけど！ 将来どうなるかはわからないよ？ 俺だって負けてしまうかもしれないじゃん？」

「ハッ！ 冗談言わないで。万が一にでも、億が一にでもそんなことは起こらないわ。私1人だって、あの程度の1人完封できるもの」

信頼が厚いのも考えものだね。最早プレッシャーだよ。

「……………まあまあ見てなつて。なんとなく俺の言いたいことがわかるはずだ」

うーん……将来の彼らを知らない、そう思つても無理はないのかもしれない。地道に練習を積んできた守君と違って、現在のサッカー部は数日サッカーを練習したばかりの人たちが多いから……マックスとかメガネとか。全く練習してないのに、パスやシュートができるだけでもすごいってレベルだ。

それに相対している帝国だって、ムクロからしたらまだまだまだに見えるのだろう。彼らの力は世宇子にもエイリアにも及ばないくらいだから、世界レベルと言つて間違いないムクロも辛口になる……か？

ムクロと雑談していると、そろそろ試合が始まるみたいだ。逃げていた壁山も無事に

見つかったみたいだな。

それぞれがポジションについたのち、審判がホイッスルを啜えた。

ピ——ーッッ!!

試合が始まった。はてさて、どうなるのかな？ やつぱりボコボコにされてしまうのだろうか？ それともアルファの襲撃があつて、最初からゴッドハンドを使えたり……？

ピ——ーッッ!!!

「ここでホイッスルー!! 雷門中学！ 何もできないまま10対0で前半が終了!!!」

——— 雷門が善戦する？ そんなことは全くない。試合展開は常に一方的で圧倒

的だった。

「……見てらんないわね。あんな汚いサッカー……助けなくていいの？」

「——ここは見逃すしかないな」

俺だつて見ていて気持ちいいものではないと思うが、まだまだその時じゃない。今ばかりは、自然な時の流れに身を任せるべきだ。

「あつそ。なんかムカつくから私がぶつ飛ばしてきてもいい？ あの程度の奴ら私一人でもどうとでもなるわ」

「まあまあ、気持ちはわかるけど雷門はこの程度じゃあ終わらない。落ち着いてくれ」「なんでそんなに期待してるんだか……」

ムクロは悲しげにそっぽを向いて携帯を弄り出した。これはね。拗ねました。後でご機嫌取りをしておかないとまずいです。

「さあ後半戦のスタートです。圧倒的な帝国リードの前に、どう立ち向かうのか雷門イ

レブン!!」

後半が始まってその流れは変わらなかった。圧倒的なボール支配率に加えて、帝国は必殺技の使用を始めたのだ。当然雷門では相手にならない。

『サイクロン』

『百烈シヨット』

眼前では守君が帝国学園の面々に痛めつけられていた。必殺技も使われているし、必殺技に慣れていない雷門の面々にとってはかなりキツイものがあるだろう。

全く、影山の教育のせいとはいえ、痛めつけるのが露骨だよなあ……俺も……たまに怪我させちゃうことはあるからあまり人のことは言いたくないけどさ。

何も起こらずに、一方的な展開のまま暴力的なサッカーが行われ続ける。早く、早くきてくれえ!! 見てらんないぞ!!

放送部の角馬圭太が、悲しげに声を張り上げる。

「帝国はこれで、19点目!! そして雷門のキックオフですが、メガネ以外は立ち上がれないぞおー!」



あ、誰か1人逃げてった。——メガネだな。  
つてことは——やっとか。彼が来るぞ。

「誰だあいつ!!」

「あんなやつうちのサッカー部にいたか?」

雷門中の生徒であろう観客の声が聞こえる。……明らかに空気が変わったな。守君が目を見開いて、彼の方を見つめている。

「彼はもしや! 昨年のフットボールフロンティアで一年生ながらその強烈なシュートで一躍ヒーローとなった! 【豪炎寺修也】!!」

彼が、豪炎寺君が来るわけだ。全く、彼はいつも遅いんだから。

「アイツは?」

ムクロがもう一度試合に興味を持ったようで、携帯から目を離し、グラウンドを見下ろしている。ならば、教えてあげよう。彼がどんな存在なのか。

「雷門中のエースになる男だよ。そして、俺たちのライバルになるであろう男さ」

そうして豪炎寺君が加入し、再び試合が始まったのだ。そこからの展開は劇的なものだった。

「いけ。『デスゾーン』」

試合再開直後に、帝国は雷門からボールを奪った。そして、鬼道君の号令と共に佐久間、寺門、洞面の3人がゴール前まで迫る。

そして、3人はタイミングを合わせ、回転しながら跳躍した。

『デスゾーン』

ボールに暗黒のエネルギーが蓄えられたと同時に3人の蹴りが炸裂する。

ボールは悪意の力に満ち、守君を痛めつけようとゴールへ向かっていく。

にも関わらず、新たに加入した豪炎寺君はシュートを無視して、敵陣を駆け上がった。  
いた。

「なんのつもりかしら？ ああGKにあのシュートは止められないだろうし、フォローに回るべきなのに」

ムクロは疑問符を浮かべながら、豪炎寺君の行いに文句をつける。確かに……普通ならその方がいい。だけど……

「あれでいいんだよ。守君は止めるから」

「え？」

ムクロが声を漏らすと同時に、守君が掌を天に掲げた。

『ゴッドハンド』

その手から黄金のオーラが放たれ、巨大な手が形成され、帝国の必殺シユートを真正面から受け止める。

そして、数秒の均衡後、ボールは守君の手の中に収まった。

「止めたアア!! ついに帝国のシユートを止めたあ!!」

「ね? 言ったでしょ?」

俺は思わずドヤ顔をしてムクロに向き直った。しかし、彼女は冷たく、呆れたかのようには手をひらひらと振るのだった。

「いけっ!! 豪炎寺!!」

守君は間髪入れずに、豪炎寺君に向かって、ボールを力一杯投擲する。……繋がった! 守君の想いを豪炎寺君が引き受けたのだ。

『ファイアトルネード』

豪炎寺君は、捻りを加えながら跳躍する。そして、炎を纏いながら猛烈なシュートをボールに叩き込んだ。

おお!! 生ファイアトルネードだ!! やっぱりなんかあの技は一味違うんだよなあ……洗練されてるっていうか。原初にして至高っていうか。

「ゴール!! ついに、ついにい!! 雷門イレブン、帝国学園から一点をもぎ取りましたあ!!!」

「なるほどね。だからアンタはあのキーパーが気になってるってわけ。ムカつくわね」

俺はムクロに理不尽に頭をチョップされた。何か気に触ることをしてしまっただろう。彼女は荷物を持ちながら、頬を引っ張ってきた。

「面白いものが見れたわ。先帰ってる。コレ、アトリから頼まれた買い物リスト。代わりに行ってきた」

おいおい！ 学校から飛び降りて帰ってしまって……身勝手なやつだなあ。

これで帝国は豪炎寺君の威力偵察という、目的を果たし撤退していくわけだが――

ん？

謎の視線を感じる……場所は………しまった！ 嫌な人に見つかってしまった。結構な年齢のはずなのに、目がいいな。流石監督をやっているだけあって視野が広い。

「計画は変更？ 撤退は無し………ですか？ 徹底的に痛めつけろと？」

鬼道君の不穏な話が、200メートルぐらい先から聞こえてきた。

本来ならばここで帝国は撤退していくわけだが、影山は試合を続行させようとしている。まっずいなあ。俺の存在が原作を少し歪めてしまったかもしれない。

だつてめっちゃニヤニヤしながらこっちを見つめて来るんだもんあのグラサン。絶  
対俺のことを知ってるよ……

……………。

俺はどうしようか悩んだ末、近くにいる人たちからバレないようにこっそりと屋上から飛び降り、鬼道の前に降り立ったのだった。

ストップ。試合を中断してくれ。怪我人を甚振るなんて酷いと思わない？

「……………キサマ誰だ」

鬼道君はその特徴的なゴーグルをこちらに向けながら、険しい顔でこちらを睨む。いきなり現れて試合を妨害するんだからそりゃ怪しいよな。鬼道君には言われたくないけど。

「アイン!! どこ行ってたんだよ!!」

「ごめんごめん少し遅れたよ……野暮用があつてね」

背後からは俺を心配する守君の声。雷門のキャプテンと帝国のキャプテンに俺は挟まれていた。

「邪魔だ、退け。どうなっても知らないぞ？」

この頃の鬼道君物騒だな。影山の命令を遂行しようと、眼前の俺に脅しをかけてくる。まだ、闇の教えの影響が大きいみたいだ。

「待てって、あそこで高みの見物してるグラサンに伝えて欲しいことがあるんだ」

俺は鬼道君を引き留め、どうにか帰ってもらおうと言葉を紡ぐ。守君に不自然に思われないようにしないとなあ。

「……言ってみろ」

「オマエらは余計なことほしないで、とつとと帰れってね」

「なんだと!?!? —— なんででしょう」



鬼道君は俺の言葉に反発するも、その上の影山はちゃんと話を聞いてくれていたようだ。さて、どう出て来るか……だが。原作と少し流れが変わってしまったている。予想がつかないなあ。

「……………はい総帥。わかりました。お前たち撤退だ」

よしよし、上手くいった。どうにか原作通りの展開に持ち込めたぞ。

「じゃあ不戦勝ってことでいいよね？」

「……………構わん」

随分潔いじゃないの。助かる。だけどまだ話は終わりじゃないみたいだ。鬼道君は続け様に言葉を放った。

「監督がお前に興味があると仰せだ」

「そうだなあ。お前がおれに話を通しに来てって言っておいてよ。あんなところで偉そ

うに見てないでさ」

先ほどの暴力サッカーを我慢して見ていたせいとか、俺も少し攻撃的な口調になってしまっている。まあ影山に対してだから許して欲しい。

「——ッ！ キサマ!!」

俺の影山を侮辱するような発言に、鬼道君は気を悪くしたのか、こちらを更に睨みつける。

「冗談冗談。あんなに怪しいやつに来られたら不審者出没って通報されちゃうよ。そのうち帝国に行くから待ってろって伝えといて」

「……………精々後悔しないことだな」

俺のあからさまな挑発に気づいたのか、鬼道君は会話を切り上げ、マントを翻しバスに乗り込んだ。早く仲良く会話したいものだ。

「アイン!! 大丈夫だったか? なんか変なこと言われなかったか?」

「ちよつと話してただけだよ」

こちらを心配そうに見つめていた守君が、鬼道君が去つたことにより近づいてきた。試合の終了を告げよう。

「でもあいつら撤収していくみたいだけど……?」

「ああ帰るつてさ」

「えっ!! てことは俺たちの勝ち?!?!」

「まあそうじゃないかな?」

「——勝ったぞおおおお!!!」

俺の発言を聞いた守君が大声で、雷門中の勝利を告げる学校が歓喜の声で揺れる。

——ふう。なんとか納めることができたか……危ねえ校舎を壊されるとこだったわ……それはちよつと致命的な原作からの乖離だ。侵略者編で破壊されてしまうとはいえさ。

でも、影山にも目をつけられてしまったかあ。やっぱりあの計画を進めるべき……だな。そうなると、暫く時間がなくなりそうだなあ……

時間を見つけて帝国に行かなきゃいけない。

「アイン！ こつちこいよ！！ みんなで勝利を祝おうぜ！！」

「まってください！！」

そんな守君の誘いに乗って、俺も部員の輪に加わり勝利を祝うのだった。

## 17話：青龍の目覚め

「次の対戦校を決めてあげたわ。相手は尾刈斗中。試合は1週間後よ」

唐突に部室に現れた雷門夏末の手によって、尾刈斗中との試合が決定したのだった。それは帝国学園の脅威を退けてから間もなかった。

そういえばこの試合も負けたら廃部だったな。勝ったらフットボールフロンティアに参加できるという交換条件だ。でも理事長代理とはいえど、学校を私物化しすぎでは？ これも彼女なりのサッカー部へのツンデレなのだろうか？

サッカー部の皆は早速必殺技の練習に励んでいるのだった。尾刈斗中との試合まで時間はない。更に音無からの情報提供により、尾刈斗中への警戒心も高まり、練習にも更に熱が入っていた。

一方で熱が入りすぎているメンバーもいるわけだが。

もう直、日が暮れる時間だというのに、彼はずっと必殺シユートの練習を繰り返している。ポタポタと汗を垂れ流しながら、土煙に汚れ地面に倒れ込んでいた。かなり消耗しているようだ。

染岡君の練習はここ最近ずっとあんな感じだった。他者の心配をよそに無意味に自分を追い込み、練習も荒っぽい。精神的にも追い込まれているようだし、アレでは必殺技を習得するなど夢のまた夢だろう。

「染岡君、焦ってもいいことなんてないよ？」

そんな染岡君の練習を見ながら、俺は求められてはいないとわかりつつ、口を出した。

かなり空回りしているのが分かるから、黙って見ているのが辛かったのだ。俺もあんな時期があったなあ……

「うるせえ！ 俺は雷門のストライカーとして必殺技を覚えなきゃなんねえんだ！ 黙ってる!!」

しかし、俺の言葉は染岡君には届かなかった。彼からしたら俺はただベンチに座っている部員だからね。言葉に信憑性はないのも仕方ない。

だけど……染岡君はただただ体を動かすのみで、俺の目からしたら無意味に疲労しているだけにしか見えなかつた。練習の目的と方法、身体能力、精神の調和が取れないと必殺技など覚えられないはずがないからだ。

勿論、放っておいても染岡君は必殺技習得するだろう。だけど……彼にはもつと強くなってもらわなきゃいけないんだ。

「……必殺技を使えるようになる状況だったり条件つてのは、人によって全く違う。だけど、君のその心理状況や体力じゃあまず成功しないよ」

「——てめえ！ ベンチに座ってるだけの癖に偉そうに言ってるんじゃないやねえ!! 俺が必

殺技を覚えねえとサッカー部は廃部になるんだぞ!!」  
「ダメよ染岡君!!」

おつと……染岡君に胸ぐらを掴まれてしまった。それだけ熱くなっているということだ。俺は責めるつもりはないが……集まってきた部員たちは心配そうにこちらを見つめている。

「……君はなんのために必殺技を覚えたいのかな? かつこいいいから? 豪炎寺君に負けたくないから? 自分が一番になりたいから?」

俺は染岡君に疑問を投げかける。持論ではあるものの、必殺技も化身もデュプリも明確な目的と強靱な意志によって発現するものなのだ。染岡君には必殺技が欲しいという意思はあるだろうか……後必要なのは、なんのために力が欲しいのか理由をはっきりさせる。それだけだ。

「————違えよ」



染岡君は胸ぐらを掴む力を緩めながら、訥々と語り始めた。

「俺は……俺はなあ。試合に勝たなきゃならねえんだよ。ぜってえ、練習試合に勝って、サッカー部を残さなきゃならねえ」

「急にどうしたんだい？ あんなにやる気がなかったじゃないか」

「……俺だってよお……虫のいいことだとはわかってる。だけど、知っちゃったんだよ。サッカー部の奴らと一緒に勝つことの気持ちよさを。だから俺は負けらんねえんだ」

染岡君は俺の瞳を見つめながら、確固たる意志を持って断言する。

偉そうな口を叩いてしまったが流石だ。期待に応えてくれた。彼はこうでなくっちゃ。

「だつてさ、みんな！」

俺は声を張り上げながら後ろを振り返った。

「染岡く!!」

「染岡さん!!」

「染岡先輩!!」

すると、近くの茂みから部員たちがボロボロと溢れ出した。俺は彼らの存在を気配で察していたからこそ、染岡君から本音を引き出そうとしたんだ。染岡君は抱え込んでしまいうたチだしね。少々強引ではあつたけど、染岡君のこの想いを知れば豪炎寺君、豪炎寺君とうるさく言うことはなくなるだろう。

「それがわかれば、すぐに必殺技を使えるさ」

目的を達成した俺は、染岡君にそう告げた後、カッコつけるために後ろ手を振りながら一度も振り返らずに帰宅したのだった。後は守君達が染岡君を導くだろう。

夕日をバックに去っていく姿ってカッコよくない? ……ダメ?

——河川敷グラウンド——

「うおおおおお!!」

染岡君の気迫のこもった声が、晴天の空に響き渡る。

——青龍が飛翔する。そして、ゴールを喰らい尽くした。

——そう。染岡君は翌日の練習で見事に必殺技を成功させたのだ。

「すごいです!! あれが必殺シユートなんです!!」

「ゴツドハンドに次ぐ雷門中の新たな必殺技の完成だね。いいスピードだ」

俺の隣でベンチに座って練習を眺めていた音無が、飛び上がりながら喜んだ。

「染岡君!! やったのね!!」

木野さんはパチパチと手を叩きながら、染岡君の進化を褒め称える。

俺はと言うと、ベンチに座りながらマネージャー達と雑談していた。木野さんも音無も、流石は雷門中の精鋭マネージャーだ。目つきの悪い俺にも、臆さず話しかけてくれ

る。

孤立しがちな俺には珍しく、意外とサッカー部の面々とは馴染んでいた。仲裁をしてくれた守君には感謝してもしきれない。

あ、そうそう。ここで音無が新聞部からサッカー部に転部し、正式にマネージャーになったのを忘れていた。帝国との試合以来、かなりの頻度でサッカー部の活動に顔を出していたものだから、勝手にもうマネージャーなのだと思いきや、こんでしまったよ。

彼女は「やかまし」と揶揄されるぐらいにはよく喋る、明るい女の子だった。男所帯のサッカー部にとっては清涼剤のようなもので、明るい雰囲気をもたらしてくれる唯一無二の存在だ。木野さんはサッカー部の母みたいな存在だからね。

それにしても……鬼道君に似てないよなあ……でも実の兄弟なんでもんね？俺とシエルは双子ということもあつて相当似てるからさ。……今頃何してるのだろうか。電話してみようかな。

そんなことを考えながらも、俺は会話を続けるのだった。

「これからはもつとすごい必殺技が増えていくだろうから、驚いてはもらえないよ？

」

「アイン君……そうよね！ 雷門はもっともっと強くなるわ!!」

「そうですよ！ 目指すは日本最強です！」

「ノリがいい女の子達だ。俺が話しかけてもいいリアクションを返してくれる。冷たいムクロとは大違……やめておこう。」

俺とマネージャーの2人が染岡君の成長で盛り上がっていると、突如誰かに話しかけられた。声の主に視界を向けると……

「おい」

染岡……君？ ……なんだろう。彼から話しかけられることなんてなかったはずなのに。彼は俺のことを認めていかなかったはずだから、話しかけられたことなんてなかった。

「どうだ？ 俺の必殺シールドは」

——ふふっ……なるほど。彼も中学生らしいところがあるじゃないか。

「凄く君らしい必殺技だ。まさに染岡竜吾だけの力」

「へっ！ そうかよ！ ……たく、少しは褒めろよな！」

「君ならできると知っていただけさ。大したことじゃない」

俺の評価を聞いた染岡君は人相の悪い顔を歪めながら、ニコツと笑った。カッコいいじゃないの。

「染岡さーん!! 必殺技の名前考えましようよ！ ドラゴン染岡とかどうですか!?!?」

「おい！ 勝手に決めるんじゃない!!」

染岡君は、少林に話しかけられ振り向きグラウンドの中心まで歩いていった。俺たちもついていくとしようか。

そうして、サッカー部全員でグラウンドの中心に集まり、必殺シユートの技名を考えていると……雷門中の制服を着た男子生徒が現れた。

来たな。豪炎寺君だ。守君はいつのまにか豪炎寺君が何故サッカー拒むのかを知り、彼の凍てついた心を溶かしたのだろう。要するに病室に行つて夕香ちゃんについて教えてもらったということだ。

「田堂。俺、やるよ」

豪炎寺君は端的にそう語り、サッカー部への入部の決意を露わにした。

そこから試合までの数日間といえば、俺はサッカーのアドバイスをしながら、マネージャー達を手伝っていた。

後は……シエルに電話をかけたたり、ムクロの練習に付き合ったり、アトリと買い物に行ったりかな？ 本当にあつという間だったよ。

——試合当日——

「ストライカーは俺一人で十分だ」  
「結構つまらないことにこだわるんだな」

染岡君が豪炎寺君の言葉にムカついたのか襟元を掴んで、睨みつける。やっぱり染岡君は豪炎寺君が気に入らないようで、突っかかっていたのだ。染岡君ったら暴力的なんだから。

前話したことを忘れたのか？

「染岡君。君が強くなりた理由はなんだっけ？ 豪炎寺君と喧嘩するためだっけ？」

「——ツチ！ わあつたよ」

染岡君は俺の言葉を聞いて、素直に引き下がった。もう少し怒るかなと思っただけど………なんとかなつたな。豪炎寺君も………気にしていないようだし、大丈夫だろう。

だったらそろそろ時間だし、グラウンドに行こうじゃないか。俺は気まずい空気を敢えて無視しながら、そう促した。



グラウンドの周りにはギャラリーが押しかけていた。まだ応援団ではないけど、サツカー部に興味を持ってくれる人は増えつつある。——あ、鬼道君と佐久間も見に来てるじゃん。

そして、試合開始時間を迎え雷門中メンバーと尾刈斗中のメンバーが整列しているわけだが……不気味な奴が多いぜ……キャラが立ちすぎだろ……

それになんだか尾刈斗中の監督と喧嘩しているように見えるけど大丈夫かな？

……大丈夫か。全く、血の気が多いんだから。

そうして、試合は始まるのだった。

ゴーストロックチートだなあ。一応初出の必殺タクティクスということになるのだろうか？ 雷門中用の必殺タクティクスとかも考えておきたいよなあ。それに催眠術だっけ……？ 俺に効くかな？ だったら対策法を知っとくだけじゃなくて、耐性もつけておきたいんだけど……

俺は尾刈斗中の戦術に興味を惹かれながら、試合を観戦していたわけだが……

まあ結果は大して変わらなかった。

『ドラゴンクラッシュ』

染岡君の生み出した青龍が空高く羽ばたき、

『ファイアートルネード』

豪炎寺君の強烈な蹴りにより、灼熱を纏いながらゴールに襲いかかる。

『ドラゴントルネード』

豪炎寺君と染岡君が和解し、共に連携必殺技を成功させたみたいだ。ぶつつけ本番でよく成功させるよなあ。

俺は器用じゃないから試合中に成長や進化するのなんて不可能だ。だからこそ、過剰なまでに普段から修行しているんだけどな。

——どんな力が働いても、絶対的な勝利を得られるように。ただ自分の力を磨く。それが俺のサッカー論だ。

「5対3! 5対3で雷門中が尾刈斗中に大逆転勝利だア!!」

角間君が熱の入った実況をする。雷門中の生徒だし、最初の雷門ファンでもある彼だから、勝利が嬉しいのだろう。

最後の染岡君の執念のこもった『ドラゴンクラッシュ』なんかは特に、ゆがむ空間の催眠効果もものともせず、単独で打ち破って見せた。すごい気迫の籠ったいいシュートだったよ。

隣では木野さんと音無が手を繋いで雷門中の勝利を祝っている。微笑ましいな。

あと、将来的にマネージャーになるであろう夏末さんも観戦していたようだが……一緒にいるのはムクロと……誰だ? 見覚えがあのような気がするんだけど……わかんない。そんな女の子達が3人で試合を観戦していたようだ。

観戦してるだけでも、雷門中の試合はワクワクするなあ。俺今まで試合を楽しんでいたことがないから、早く楽しみたい。ま、そのためにもそろそろ動き始めないといけないな。

喜びを分かち合っているサッカー部のメンバーの輪から抜け出し、俺は人気のない校舎裏へと向かう。そして、胸ポケットにしまっているガラケーを取り出した。

「あ、アトリ？　なんか黒幕っぽくて怪しいフード付きのクロークを作ってくれない？　顔をちゃんと隠せるやつをさ」

「あ、うん。材料は俺が買って帰るよ。——なんでそんなの作るのかって？」

「——面白そうだからさ」

## 18話：交錯する影

雷門中サッカー部は尾刈斗中に無事勝利し、廃部を免れた。

それに尾刈斗中に勝利したということは、次はフットボールフロンティア地区予選に挑むことができる。初戦の相手は勿論……

「野生中ですよ」

……に決まってるよな。部室に入ってきた顧問の冬海が眠たそうな声で断言する。こういう時にしか顔を出さないのに偉そうだなこの人。

あと来訪者は、先生だけじゃなくて……

「ちいーす!! 俺土門飛鳥。一応DF希望ね」

新入部員が新たに加わったわけだ。彼は土門飛鳥。現在は帝国のスパイだけど、将来

的には雷門中の頼れるDFとして長く活躍し、世界編ではアメリカ代表に選ばれるぐらいの成長性を秘めている選手だ。

スパイであつたとしても不足しがちな守備層を補えるから、総合的に見てプラスだろう。どうせ心を入れ替えてくれるしね。

「瞬発力・機動力共大会屈指だ。特に高さ勝負には滅法強いのが特徴だ」

土門君は皆に自己紹介しながら、次戦の野生中について忠告をくれる。野生中の高さに要注意……か。『イナズマ落とし』が必要になるわけだな。そのために、秘伝書を手に入れて練習すると……

でも別に野生中の高さという長所に対し、同じ分野で真正面から闘わなくてもいいと思うんだけどなあ……例えば、絶対に奪われない位置からシュートを打つとか……相手の長所を避けて戦うってのも一種の戦法だ。

まあ、まだ雷門中の頭脳は帝国にいるわけだから致し方ないところはあるけどさ。ここは俺が内緒で手を出しても良いかもしれない。

俺はそうして野生中の攻略法を考えながら黙って壁に寄りかかっていたのだが……新入部員である土門君がこちらに顔を向けながら近づいてきた。

「ちよつと君！ これここまで来る途中にあつた人に、サッカー部のアインスつて人に渡してくれたつて頼まれたんだけど、君で合つてるよね？」

「——？ 合つてるよ」

「おお！ そうか。じゃあコレ。頼まれたやつね」

土門君は制服の内ポケットにしまわれていた黒い手紙を取り出し、こちらに差し出してくる。

俺はその手紙の贈り主を考えながら受け取り、早速封を切つた。——心当たりはある。

中身は……だよな。土門君から手渡されたわけだし予想は簡単だつた。……全く露骨な真似をするなあ。俺のことバカだと思つてないかな？

まあ良いや、早速練習に取り掛かるようだ。俺も練習の様子を見にいくとしよう。後……彼に声をかけなきやな。

「ちよつと良いかな？」

「ん？ なんだい。僕に用でもあるの？」

「そうそう。マックスに提案したいことがあつてき……」

そうして雷門中は野生中の空中戦に対応するべく、新たな必殺技を模索し始めるのだった。

——河川敷——

「新必殺技！ ジャンピングサンダー！！」

「シャドウヘア！！」

「壁山スピーン！！」

サッカー部の一年生が早速必殺技の習得を目指し、それぞれの想像力を振り絞りながら模索を繰り返しているようだが……

「野生中との試合までに新必殺技なんてできるのかしら？」

隣に立ちながら練習を見つめる木野さんが、不安げに声を漏らした。



「……………あれは無理だね。まだ少林と栗松と穴戸は必殺技を覚える段階にない。もつと基礎的な技術を磨く必要があるかなあ〜」

「そうよねえ……………」

誰しもがオリジナルの必殺技を覚えたいと考えるものだが……………自分で必殺技を生み出すのつてすごく難しいんだ。誰かの指導があつたり、秘伝書を見ながら修行すると、かなり習得は楽になるんだがなあ……………俺は意地を張つてオリジナル必殺技を最初に覚えようとしたから時間がかかったけどさ。

「そういうえば、アイン先輩って必殺技を使えるんですか？ 結構詳しいみたいですけど？」

音無がこちらの顔を覗き込みながら、質問してきた。嘘を言う必要はないかな……………？

「——勿論さ。使えないんだつたらこんなに偉そうなことは言わないよ」

「だつたら私！ 見てみたいです!!」

「私も気になるわ。アイン君の怪我ってどのくらいになったら治るのかしら……?」

音無の興味津々な視線に木野さんも追隨する。あまりに純粹なその視線に、嘘をついている俺は心を痛めた。何度も嘘をついて生きてきているわけだが、未だに慣れないなあ……この感覚。

「股関節にちよつと問題があつてね……そうだなあ。フットボールフロンティアを優勝する頃にはサッカーやつてもいいって言われるくらいかなあ……?」

「それは残念ですね……」

脅威の侵略者編ぐらいの時になれば、俺も参加できるだろう。あの時期つてかなり欠員が出てしまうはずだからなあ。そこを補いながら、実力を底上げしていきたい。

「まあいつか楽しみにしててよ。面白いとは思うからさ」

「楽しみにしてますね! カッコいいの期待してます!」

「完全に治してからよ? アイン君はしっかりしていそうだけど、どこか無茶しそうで  
もの」

木野さんは人に対する理解力が頭抜けているよね。本当に中学2年生なのだろうか。俺は守君と木野さんがお似合いだと思う……野暮な思考に陥ってしまったな。伝えたいこともあったし、この機に話しておくことで挙動不審を誤魔化そう。

「気をつけるよ。——そうだ。暫く部活を休んでいいかな？」

「あら、どうかしたの？」

「ちよつと用事があつてね。野生中の試合を見るのは難しいかもしれない」  
「ええっ！ アイン先輩の解説を楽しみにしていたのに」

音無は試合中に気になることがあると、どんどん質問してくる。だから色々と知識を教えているんだ。吸収が早いから頼りになるマネージャーだ。

「じゃあ私！ 試合を録画しておきますね！」

「おお！ 助かるよ」

こんな風に気がきく後輩だしね。……よし。2人の許しも得たことだし、呼び出しに

応じるとしようか。

俺がいなくとも、原作通り無事に秘伝書を見つけてイナズマ落としを習得できると良いなあ。

それに……マックス君も必殺技を無事に習得してくれると良いんだけど。彼、センスあるからちよつと教えただけでもキツカケを掴んでいたし、期待できるだろ？

別に空中戦に付き合う必要なんてない。野生中程度じゃシユートブロック技を持っていないんだから、自陣からシユートを打ってしまえば良いんだ。

—— 帝国 ——

暗い部屋で影山はただ一人、ボンヤリと光るディスプレイに照らされながら送信されてきたデータを確認していた。

マルチディスプレイに表示されていたのは、一人の選手のデータ。影山が取り急ぎ協力者の力を借りて、入手した情報だった。慣れた手つきでキーボードを叩きながら、彼

は自ら分析を進めていた。

カタカタ、カタカタカタカタ……

滞りなく進んでいた作業が何故か中断された。そして影山は、不意をついたかのように口を開いた。1人しかない空間であるにも関わらず。

「君はどこから入ってきたのかね？」

——影山が座る椅子の背後から、人影が突如現れた。その人物は黒く染まった衣服を身に纏い、意図的に顔を隠していた。

「こんなところに正面から入ってくるバカなんていないだろう。抜け道を使ったただけだ」

影山は侵入者に背後から言葉をかけられ、高機能な椅子を回転させることで向き合った。そして侵入者は続け様に言葉を紡ぐ。

「それで？ 俺のことを呼び出したわけだが、何か用事でも？」

侵入者は傲岸不遜な態度で影山に迫る。しかし、影山も唐突な侵入者に動揺した態度は見せなかった。

「……オマエは何故、雷門中に潜伏している？ 何故、日本に来た？」

「質問を質問で返すなどはよく言ったものだ。かなり不快だな。……だが今回だけ特別に応えてやろう」

影山の質問に対し、侵入者はあくまでも高圧的な態度を崩さない。高身長な影山と比べると些か小柄で、中学生ぐらいの時分であると言っても過言ではないはずなのに。

侵入者は一呼吸おいて、口を開いた。

「雷門が俺のライバルになり得ると思ったから。それだけだ」

数瞬の静寂が永遠のように感じられる。それほどまでに空気が張り詰めていたのだ。

「……アインス・リヒター。ドイツ国内ではフィールドの天帝と呼ばれ、小学1年から常にフィールドに立ち続けている。生涯無失点の究極のGK。必殺技使わずに全ての

シユートを止め、試合をコントロールしてきた男……と」

影山はディスプレイに表示されている数値に目を通しながら呟いた。

「紛れもなく天才的だな……オマエはヨーロッパでもトッププレイヤーとして扱われている。そんな経歴を持つ男が、何故こんな辺境に興味を持った？ しかも何故、雷門中がお眼鏡にかなった？ 不可思議でならない。いくら考えても不合理だ」

「……………」

影山は普段よりも饒舌に語り続けた。しかし、一方のアインは微動だにせず、ただ影山の言葉を聞けばかりだ。

「あのお方にも、有望視されているその才覚。あのような弱小校においては無駄にしているとは思わんかね？」

話し終えた影山はアインを見つめながら、不敵な笑みを浮かべた。まるで、アインの全てを理解したかのように。

「……早く本題に入れ」

アインは静観をやめ、機嫌を損ねたかのように声音で影山を急かした。

「落ち着け。私がオマエの試合を見たことがある。正直に言つて驚いた。世界とはここまでなのか、とな」

「しかし、また気づいたのだ。オマエが私の手をとったならば世界一のプレイヤー、世界一のGKになれるとな」

影山は両手を開き、大仰な態度で嘯いた。

「私はサッカー界の頂に立つ。私と共に天へと至ろうではないか。手を取れ天帝よ——  
——ッッ!!」

影山が手を伸ばしたと同時に、アインからかつてないほどの怒気が溢れ落ち、空気が凍りついた。影山でさえも表情を強張らせている。帝国の理事長室に殺気が満ちた。



「……わかった。正してやろう。オマエの思い上がりを」

——グラウンドまで着いてこい。そう言い残しアインは部屋から出て行った。その後を影山は無言で追っていく。

帝国に数多く存在しているグラウンドの一つ。人氣が全くないフィールドの中心でアインと影山が相對していた。まだ昼時であるにも関わらず、薄暗いフィールドは照明によつて照らされていた。

アインと影山がそれぞれライトに照らされ、影が交差する。

「オマエのサッカーへの想いは絶望で塗り固められているのだろう。……俺はそれが悪いとは言わない。強い想いは例えネガティブなものだったとしても、強い力となる」

——だが

そう但書をつけたアインは道中で拾ってきたサッカーボールを足元に落とす。

「だが最良ではない。最強には至らない」

影山に向かって断言したアインは指を弾いた。そのルーティーンに従って、アインの影が人の形をとる。

2人デュプリを出したアインは、大地を力強く踏み締め、回転しながら仮想宇宙へと跳躍する。あまり踏み込みに土埃が舞った。

アインとデュプリが完全にシンクロした動きを取りながら、外宇宙のエネルギーに満ちたボールを踏みつける。

サッカーボールはデスゾーンを象徴する正三角形が、幾重にも積み重なり形成された螺旋を潜り抜け、その力を増幅させていく。

そして最後のデスゾーンは完成したのだ。

『ラストデスゾーン』

「希望は絶望を凌駕する。だから……オマエのサッカーはいずれ敗北する運命にあるわけだ」

影山の頬を掠めながら打ち込まれたその一撃は、ゴールを吹き飛ばし、帝国学園の外壁を破壊する。

強烈な破裂音や破砕音と共に帝国学園が揺れ、衝撃を感知した警報設備がけたたましい音をあげた。

「その技……は……」

影山が目を見開きながら、今し方目撃した必殺技の軌跡をなぞる。

「帝国の必殺技、デスゾーン。この技はその極致。俺が生み出した必殺技ではないが、サッカーの未来を守るための力の一つ」

振り返ったアインはフードが脱げ、素顔を晒していた。蒼い瞳が影山を貫く。

「この技をどう見る？ 影山。俺はお前に従うことは決してない」

再度指を弾くことでデュプリを消したアインは、警報を聞きながらフードを被り直した。

「だからと言って取引に応じないというわけではない。また来る。その時までにはもう少し建設的な話ができるように準備しておけ。例えば、プロジェクトZについて……な」

「オマエ……何処でそれを……」

その言葉を聞いた瞬間、影山は安心していた心を取り戻し、アインが居たはずの方向に目を向けるが……そこにはもう誰もいなかった。薄暗いサッカーグラウンドに残された影山は一人、額に手を当てる。

「——総帥。一体今の揺れは……ッ!! この跡は一体!?!?」  
「フフフ……フハハハ!!」

「総帥……………」

「面白い。アレがデスゾーンの末路か!! ……鬼道! 私は未来を見たぞ!!!」  
「……………」

——電話が鳴った。……………ムクロからだ。

もしもし、どうかした?

——怒ってないよ? ちょっとイラつくことはあつたけど、ストレスはすぐに発散したからさ。

……………うん。別に何も壊してないって。そんなことよりどうかしたの?  
あれ? 今日も試合見にいったの? 野生中まで行ったのかあ。

夏末さんがついて来たっていったから? アトリも暇つぶしに連れていった? あ  
と後輩ちゃんも? いいね!! 仲良くてさ。

——別に母親ズラしてるわけじゃないって。

雷門中はどうだった? ——勝ったか。当然だね! ——2対0で勝利……………必

殺技を使って得点したのかな？

……そうだね。得点源は豪炎寺君と壁山の『イナズマ落とし』とマックスの『せいシュート』か。

——ああ、彼に必殺技を教えたよ。ロングシュート技は便利だからね。彼器用だし成功させてくれたのか。

——で何か感じたかな？ 雷門中の試合を見るのも3度目だと思うけど。

——気づいたか。雷門中は試合中に常に進化し続けるんだ。絶対に勝てないであろう奴らにも諦めないから手が届いてしまう。後は根性でやり遂げる。そんな奴らなんだ。まだまだ足りないけどね。

あ、そうそう。興味があるならマネージャーやる？

——そう？ 夏未さんが興味ありそうだし、ムクロは面倒くさがりだもんね。

——夏未さんが守君を気にしているって？ 流星、乙女心はよくわかるじゃないか。

——えっ！ そんなに罵倒されること言ったかな？ これでも乙女心は理解しているつもりなんだけど。

??? 電話切られちゃった。怒らせたかな？ ……心当たりはないけど、何かお土産でも買って帰ろうかな。

## 19話：女子会と漢

夕暮れの稲妻町はレトロな雰囲気を感じられ、どこか寂しくも懐かしい感情を抱かせる。帝国学園からの帰り道は朱く照らされていた。

「ただいま〜」

俺は必殺技によつて喧騒に包まれた帝国学園から逃げ出し、雷門中から徒歩5分程度のところへ建築された一軒家へと帰宅した。ムクロのご機嫌を取るために、勿論ケーキを忘れずに買ってきた。

「お帰り」

新築の暖かな光とアトリのお気に入りのアロマの香りに包まれる。帰ってきたんだなって落ち着くから好きな匂いだ。それに……今回は珍しくムクロが出迎えてくれた

ようだ。いつもはソファーに寝転がりながら携帯をいじっているのに。

「どうも。お邪魔しているわ」

靴を脱ぎ、俯いていた顔を上げると、家にいるはずのない顔が視界に映る。……夏未さんが家にいる……だと？　なぜ……

「変な顔してるわね。友達なんだから家に呼ぶぐらいのことはするでしょうに」  
「え？　別に表情なんて一つも変わってないけれど……」

ムクロの言葉を聞いた夏未さんは不思議そうに首を傾げる。そりゃポーカーフエイスは常に維持してますから。これを貫通してくるアトリとムクロが特殊なんですよ。来客は夏未さんだけではなく、もう1人いるようだ。いつも2人と一緒にいる女の子が見える。

「君は？」



どこか彼女にずっと見覚えがあつた俺は、すぐさま疑問を口にする。

「アインス先輩。初めまして……神門杏奈と言います」

彼女は薄橙色の艶やかな髪を揺らしながら自己紹介された。涼しげな声がなんとも心地よい。

……あ!! 思い出した!! そうそう! 神門さんだよ!! アレスに出てきた雷門の女帝……だっけ? マネージャーになる夏末さんポジションの人!!

ま、まあそりや雷門中においてもおかしくないよな。別にアレス時空じゃないとは言つても、存在してはいけないうんてことはない。もしかしたら伊那国島とかもあるのかな……? オリオンの敵キャラもいたり?

でもその辺のストーリーはアニメも流し見だったし、ゲームも当然やってないから記憶が朧げだなあ。

そんなことを考えながらも、3人を連れて玄関からリビングへと移動し、ケーキを冷蔵庫にしまった。

「この子には将来的に私の後を継いでもらって、生徒会長を任せたいと考えているの」

夏未さんは神門さんの肩を優しく叩く。見どころのある後輩として彼女を認めてくれるように暖かい瞳で見つめている。

成程、この2人の関係は先輩後輩だしそうなるのか。夏未さんは生徒会長と理事長代理を兼任しているって話だったし、後任への引き継ぎも兼ねているのだろう。

「でもどうしてわざわざ俺に報告を？」

「報告……というよりも、貴方とは常々お話ししたいと考えていたのよ。だからこの機会にということ、ムクロに頼んで着いてきたの。お話できて光栄だわ。雷門中の貴公子さん？」

「ぷっー！」

煽るような夏未さんの一言にムクロが耐えかねたかのように笑いを溢す。その呼び名はなんだ？ 俺知らないんだけど。

「おい！ それ誰が言ってるんだ！！」

俺の胸中は一気に騒めいた。想定外の渾名に視界がぐらりと揺れる。ただでさえ、ドイツでつけられた二つ名も恥ずかしかつたのに……怪物だの天帝だの、貴公子だの……すぐに渾名をつけようとするんじゃないやねえ!!

「雷門中の女子生徒の中ではよく噂されていますよ？ ファンクラブなんてものもある  
そうです」

神門さんからダメ押しされる。ええ……俺の知らないところでそんなことが……？  
嬉しいような……嬉しくないような……むず痒い感覚を覚えた。

「それに私自身。ムクロお姉様の彼氏さんに興味がありましたのでお邪魔したんです」

ムクロお姉様……？ それに彼氏って何を言ってるんだ？ 俺のことだとしたらただの幼なじみだから見当違いきわまらない。

「ちよ!! 何言ってるのよ!!!」

俺はその勘違いにポカンとしていて、ムクロが焦った様子で神門さんの口を塞ぎながら部屋から出て行った。神門さんは手をあたふたとさせながら引きずられていく……クールな雰囲気だけど意外とお茶目なのかな？

そして部屋に残されたのは、俺と夏未さんと……眠たげな目を擦りながらソファから起き上がったアトリだけだった。何だか絶妙に気まずい……

「まあ……今のは忘れなさいな。人の口に戸は建てられないというものよ。所詮噂だもの」

腕を組んだ夏未さんが口を開くが……何の慰めなんだ？ てか他にも噂があるのかよ……聞きたくないな……思わぬ事態に俺は目を閉ざした。

「ハッ！ 寝ちゃってました!! アインス様おかえりです〜ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ それとも……」

するとふらふらと立ち上がったアトリが、その場の雰囲気を払拭するかのようにはしゃいだ。ナイスタイミングだけど……目が酷く赤い。まさか野生中から帰ってずっと

寝ていたのか？　じゃあ夕飯の準備は全くできていない……俺はお腹がぺこぺこだ。

「……手伝うから夕飯の準備をしようか。——夏未さんも食べていきなよ。こう見えてアトリ料理は美味しいんだ」

早く栄養素を体に取り込まないと萎びてしまう。それに客人である2人にもてなしも必要だろうし……そう考えた俺は夏未さんにウチで夕食を摂ることを提案する。話があったということだし丁度いいだろう。

悩んだように俯いた夏未さんは、自分のバックから手帳を取り出し、ペラペラと捲りながら予定を調べ始めた。

「……じゃあお言葉に甘えることにするわ。杏奈ももつと話が見たいでしょうし……私も手伝いましょうかアトリさん？」

夏未さんからはこちらを慮った言葉を聞き俺は焦りを覚えた。

まつずい?!?! どうにかそれだけは妨げないと！

「大丈夫だよ!! 俺がアトリを手伝うからさ!! お客様はゆっくりしててよ!! ちょうど2人も帰ってきたみたいだし」

俺は夏未さんの前に滑り込むようにインターセプトする。彼女に料理はさせてはいけない。食材を無駄にするような行為だ。

「あら、そうかしら。貴方が料理できるなんて意外ね」

——夏未さんがとんでもなく料理が下手な方が意外だよ……と言いたくなるのを飲み下す。

「神門さんもムクロも待っていてね夕飯を準備するからさ」

はあ……危ない……夏未さんに料理なんてさせたら倒れてしまうよ。肉体強度は高くとも胃袋を鍛えるなんてことはしてないからさ。

「早くしなさいよ」

帰ってきたムクロは偉そうにソファァーに座り込んだ。手伝う気は無し……ですか。別にムクロも料理できないわけではないんだが、俺とアトリの料理を食べてからめつきり手伝ってくれなくなってしまった。

それと……傍に先ほど連れ去られた神門さんの姿があつた。整えられた髪が乱れている。……一体何があつたんだ。

——数十分後——

「美味しそうですねー！」

雑談をしながら料理を手伝うこと一時間程度。ようやく料理の配膳まで完了し、有名なデザイナーがデザインしたというテーブルに座ることができた。品数が多くていつもより時間がかかってしまったなあ。

「でしよでしよ!! お客様がいるから張り切っちゃいました!! このソーセージだって手作りなんですよ」

「……すごいわね。家庭料理なのにとっても本格的だわ。雷門家よりもすごいかもしれない」

「えっへん！ 私は何でもできるスープパーメイドなので!! 本当ならビールがあつたら最高なんですけどねえ……私だけ飲むのもアレなので我慢します!!」

アトリは私偉い！なんて言いながら、自分のグラスにワインを注いだ。いや……飲んでるやん。

神門さんと夏未さんがアトリの料理を褒め称えていたわけだが、確かに今日はいつもとより手が込んでいる。品数も多いし、一品一品が丁寧に色鮮やかに調理されている。俺も手伝ったからわかるけど、かなり張り切っていたからなあ。

——でも俺もビール飲みたいなあ。前世は成人していたけれど、体の事情的に酒なんて飲んだことなかったからさ。

俺たちはドイツの郷土料理を食べ進めながら今一度、会話を始めた。

「それで本題に戻るのだけど、色々質問してもいいかしら？」

「いいよ」

「貴方はサッカー部がどこまで勝てると考えているのかしら？ 私には知識はないけ



ど、ドイツでもサッカーをやってきたんでしよう？」

夏末さんはムクロから色々話を聞いているのかな？ アトリの存在や家庭事情について何も聞かれなかったし、上手いこと説明してくれたのだろう。詳しいことは話さないように口止めておいたから、概要しか話していないだろうけど……

「そうだなあ。優勝できると思うよ？」

「……それは本当ですか？ 私にはとてもそうは思えません……今日だって薄氷を踏むが如し勝利です。結果的には2得点でしたけど、とても帝国中に勝てるようには……」

神門さんがそう論評する。雷門中は常に格上と戦い続けるからそう見えるのも仕方がないかもしれない。

「——妥当な評価かもね。後2回勝利すれば帝国中と戦うことになる。それまでにあたる猶予は一月程度……か。確かに時間はないし、現実味にかけるだろう」

「そうです。圧倒的に時間が足りない」

「だからこそ雷門中は勝つんだ。追い込まれた時にこそ力を発揮するのが彼らだからね」

一度負けたって、何度負けたって勝たなきゃいけない場面では絶対に勝つ。それが彼ら、雷門中なのだから。だからこそ、俺にだって勝ってくれるのではないかと願望を抱いているのだ。

「サッカーは嫌いかな？ 嫌いじゃないんだったら、これからの試合も自分の目で確かめるといい。興味が湧いたらムクロにでも俺にでも言ってくれ。マネージャーとしても選手としても歓迎だよ」

「いえ……今の所は考えてません」

結構上手く説得したかなと思っていたのだけれど、神門さんにすげなく断られちゃった。……まあ仕方ないか。あんまりマネージャーが多くても仕事ないもんな。俺もいるわけだし。

「アンタ……本当に節操のない勧誘するのね」

ムクロは呆れたかのように机に肘をついてこちらを見つめる。——マナー違反ですよ。

「……でも思ったよりもアインス君は熱い男なのね。サッカー部には暇つぶしで入っているのかと思っていたわ。怪我をしているという話でしたから」

ムツ！ 心外だなあ。これ程サッカー部に尽くしているのに。アドバイスだったりマネージャー手伝いだってちゃんとやってるんだぞ！ 修行の時間を割いてさ。

「——彼らのサッカーは面白いからね。君だって薄々気づいているだろう？ 理事長代理さん？」

「……そうね。確かに彼らはよくやっています。だけど、杏奈の言った通り、勝ち続けられるとは思いません。——だからこそ、彼らの行く末を見届けます」

サッカー部大好きじゃないですか。これだからツンデレは……さっさとマナージャーになりなさいよ。

「夏未っただらずとこんな感じでサッカー部を見てウズウズしてるのよ。毎度毎度付き合わされるこつちの身にもなれつての。早くマネージャーにでもなりなさい」

俺の代弁をムクロが代わりにしてくれたようだ。凶星を突かれた夏未さんは赤面する。神門さんとアトリはニヤニヤと彼女を見つめていた。

「でもなんでアインス君とムクロが同じ家に住んでいるのかしら？ 疑問だったのよね」

「確かに私も気になりますね。親族なのですか？」

面白がつて笑っている俺たちに対し、夏未さんからの確な反撃がきた。まあ俺はムクロがここに着いてきた理由知らないから黙っておこう。彼女がなんとか対応してくれるだろう。……と思っていたのだが……

「アインス様。サッカーの練習でもしてきてください」

「え！ 今食べ終わったばかりなのだけど……」

アトリから主人に対する態度として考えられないような言葉が飛び出した。なんでムクロといいこの家の女性陣は俺を食後に運動させようとするのだ。

「ここからは女子会です！ お邪魔虫はシツシツ!!」

ひたすらに料理を食べ進めていたアトリは手を払うかのようにして、俺を部屋から追い出した。俺一応主人……

追い出された俺は地下に降りて、いつも通りサッカーの練習を始めた。練習は最早生活の一部のようなもので、アトリに言われるまでもなかったわけだ。……追い出されたのがちよつと悲しかったけどね。

数時間練習を続けた俺は一区切りだったのでリビングに戻ると、夏未さんと神門さんの姿は既になくなっていった。おそらく夜も更けてきたということで、夏未さんの執事が

迎えにきたのかな？アトリも車に乗れるけど考えなしに酒を飲んでいたからなあ。割と完璧なメイドだけど、何処か抜けているのが彼女の魅力だ……と思う。

その後ケーキを買ってきたことを伝えるついでに俺も一つ食べようかなと冷蔵庫を覗いたのだが……

ケーキら冷蔵庫にはもうなかった。あつたのは空っぽになったケーキの箱だけ。ケーキは全て消失していた……俺も食べようと思って多めに買ってきたのに……トホホ……女子会恐るべし……

## 20話：データを超越る進化

「マックス、お疲れ様。必殺シユート上手く行ったんだね」  
「まあ僕なら当然だよねえ。君の教えもあつたことだしさ！」

野生中への勝利から数日が経過した。雷門中はいつものように河川敷での練習に取り組んでいる。俺は野生中戦の応援をできなかったけれど、試合を通じて成長を遂げたみたいで技術や連携のレベルが上がっていた。本当にスポンジみたいな吸収力だなあ。

……にしても折角日本に来たのに本当にサッカーの練習しかしてねえな……何処か観光に行きたいが……脅威の侵略者編で観光も楽しめるから我慢するかあ。

——俺は暖かな陽光に照らされながら、練習風景をぼんやりと眺めていた、のだが  
……

キィ——ゴドン！ ガダン!! バタン!!

……いつも通りの練習と言ったのは間違いだったみたいだ。凄まじい音を立てながら河川敷グラウンドの斜面を黒塗りの高級車が駆け降りてくる。練習中のグラウンドまで入り込んだ車は停車し、ドアが開かれる。

「必殺技の練習は禁止します」

降りたのは勿論雷門家のご令嬢である夏未さんだ。車から降りた彼女は、開口一番必殺技の練習を禁じるのだった。

なんでも、他校からの偵察が集まっているとのこと。

俺も言葉を聞いてから見渡してみると、グラウンドの上の橋から大勢の人に多くのカメラレンズが向けられていた。他校からのマークが激化していることは間違いない。

カメラを向けられるのは慣れているから何も感じていなかったが———そういえばこの辺から周囲からの注目が高まってくるんだったな。……確かにコレは必殺技の練習は封印した方が良さそうだ。

マークされても関係ないぐらいの必殺技———皇帝ペンギンとかイナズマブレイク———を持っていないならば気にしなくていいんだけど、未だ雷門中の最大火力はイナズマ落



としかドラゴントルネード。正直まだまだ威力が足りていない。

そこから数日は基礎練習ばかりに励むことになった。必殺技の練習にかかりきりだったかし、雷門中には基礎を見直す時間も重要だよな。どうせすぐに新たな練習場所が見つかるわけだしさ。

——数日後——

俺とムクロは練習風景を眺めながらゲームで遊んでいた。——ちゃんと練習風景は見てるし、アドバイスはしている。けどマネージャーが3人になったことでどうしても仕事が減ってしまったんだよなあ。ほとんどアドバイスをするだけの地蔵になりつつある。

早く俺も一緒にプレーしたいなあ。……もう少し我慢しておこう。帝国戦が終わったら俺も忙しくなるだろうから、こんなにくつくりとした時間を過ごせるのは今だけだろう。

「ゲームやってて気づいたけどアンタって連携技使わないわよね。リアルでもゲームでも個人技重視って感じ」

俺とサッカーゲームで対戦しながらムクロはそう言った。悔しいが状況はムクロの優勢である。……俺はあまりゲームをやってこなかったから少し下手くそなのだ。

連携技……ねえ。別に使えないわけじゃないし、寧ろたくさん使えるが……GKやらされてたから使う場面がないというか……連携をみんなと練習していないというか……連携相手が俺のデユプリだけというか……

だって一応俺の本来のポジションはFWだってことは伝えたはずなんだけど、連携技に誘われたことすらないんだよおっ!!

ってことで、デユプリの存在をムクロは知らないから、連携技を俺が使えると思わないのも道理ってわけだ。この前デユプリを影山に見せたのだってノリだし、未来の技術だから本来は秘匿している。

——あの時は影山なら分身フェイントとか分身ディフェンスみたいな必殺技と誤認してくれると思って使ったんだ。ってことは……やっぱりアトリしか知らないよね。

ムクロに教えてもいいんだけど、1人でサッカーの試合ができるってなったら、なんだかチームメイトに失礼だと思わない? ——俺でもそのぐらいの気は回るさ。

無言で思索を巡らせながらピコピコとボタンを連打していると……負けてしまった。まずったなあ気が抜けていた。

「雑魚っ!! 連携技もないボッチ君だしゲームが下手くそなのも仕方ないかあ」

こちらを覗き込むムクロの口角は上がり上がりになっており、ニンマリと笑っている。俺を挑発していることは明白だった。

「うっせ! 関係ねえだろ!! 自分だってボッチ気質で大して連携技なんてねえだろ!!」

思わず言い返してしまう。昔はムクロももう少し素直だったのになあ……いや、そんなこと……

「いいえ、私はギャラクシーもパンツァーも使えますう!」

……ないな。あくまで煽りカスの精神は変わらないようだ。俺にばかりこう言う

態度をとるんだから可愛げがない。

そういうえばムクロはFWってこともあり、連携技のレパートリーは多かつたなあ。人見知りのくせによお。

「てかなんでここにいるんだよ。今日は別に試合なんてないただの練習日だぞ。……マネージャーやるか？」

俺は都合の悪い現実から目を逸らすかのように、話題を転換する。臭いものには蓋をしておけばいいのだよ。

「……誤魔化すのが露骨だし……何回聞くのよアンタ……ならないっての。暇つぶしに來てるだけだから期待しないで」

——ほらそんなことよりも。

ムクロはそう言い残し、グラウンドに目線を送る。

「あれほつといていいの？　なんだか、アンタのお気に入り君がいじめられてるみたい

「だけど」

なんだろうか。そう思いながら、指の向く方向に目をやると、河川敷のゴールの前に立つ守君と……ごちやごちやした機械を頭につけたピンク髪の男。

——御影専農の偵察が来たってことか。

アイツは下鶴だっけ？ 初代をやったのは本当に小さな頃だった筈なんだけど、御影専農には苦戦した覚えがあるからよく記憶に残っている。

『ファイアトルネード』

下鶴は豪炎寺君の魂の必殺技をコピーし、味方であるはずの守君のゴールを狙う。……完全なコピーではなさそうだが、随分器用だなあ。利き足が逆に見えるのだが……あ、守君は予想外のシュートに動揺したのか、ゴッドハンドが発動できなかつた……けど咄嗟に発動した熱血パンチでボールを弾く。……ゴールラインをボールは割ってはいない。

「あれ？ 決まると思ったわ」

どうやらムクロの予想は外れたようだ。俺も……原作を知っているからそういう結末になると思っていたが……予想外だな。守君は想像以上に成長していたらしい。

下鶴もデータとは違う守君の能力に動揺しているようで、ヨロヨロと足を後退させる。データを超えるの早くないか守君？

……まあ俺も守君の練習によく付き合っているし、アドバイスもしているから強くなって当然だがな！

——なんて俺も天狗になっていたが、考えてみれば下鶴の本来のシールドはパトリオットシールドだったはず。俺も使えるからわかるけど、威力的な話だけでいえばフアイアトルネードの方がパトリオットシールドよりも高い。——が、この世界は数値だけで語ることでできるゲームの世界ではないんだ。

必殺技の威力には人それぞれに必殺技との親和性や、技進化のように慣れという要素もある。だから多分パトリオットシールドの方が威力もあるし、早いんじゃないかな？  
油断はできない……か？

守君はゴールを守り切ったわけだが、豪炎寺君の方はどうだろう？

守君に代わって杉森が、下鶴に代わって豪炎寺君がグラウンドに立つ。

『ファイアトルネード』

もはやお馴染みの必殺技を豪炎寺君が放つ。偽物の下鶴のシユートには負けるわけにはいかない、いつも以上に力がこもっているように思えた。

火属性の力が籠ったシユートは、トゲトゲ頭の男が守るゴールを貫こうと猛進していく。

『シユートポケット』

対するGK杉森威は、水色の空間を展開しシユートの威力を減衰させる。炎を纏ったサッカーボールは勢いと回転数を失い……炎が消化されると同時に制止……した。シユートは完全に止められてしまったというわけだ。

杉森は勝利を確かめるかのように、ボールを意気揚々と掴み、豪炎寺君に見せつける。

守君の勝利に続いて、豪炎寺君もシユートを決めてくれればと思っていたのだが、そうはいかないか。データなんて覆してくればなあなんて希望的観測をしていたのだ

が。

……豪炎寺君とは未だに全然話していないから、練習を手伝っていない。原作通りの実力というわけだからコレも仕方ないか。——話す機会がなかったんだよお。

うーん。杉森さんってゲームでは最強格だし、ポテンシャルもあるから油断できない相手なんだよなあ。豪炎寺君とも少しお話ししておく必要があると思う。

——イナビカリ修練場——

うわあ……こういう雰囲気的空間。懐かしいなあ。実家の地下特訓場のことを思い出す。ここはあそこより古いし、もっとアナログだけど……

夏未さんが改修工事を手配してくれたとはいえ、流石に40年以上前の施設だから古臭いし、実家のものより高機能ではない。だが、難易度も危険性も負荷相応に低いから、実力はまだまだ足りない彼らにとってはちょうどいい施設と言えるだろう。

でもこんなに無駄でお金のかかる施設……誰が作ったんだろうか？ 先代の理事長とかだったりするのかなあ？ ロマンを追い求める俺の父さんと気が合いそうだ。



そういえば……実家の施設みんな使ってるかなあ……？ 自由に使っていないよと言つて鍵を渡しておいたから有効活用してくれているといいなあ。

俺はイナビカリ修練場での過酷なトレーニングに疲弊し、座り込んでいる豪炎寺君にこっそりと話しかける。

「豪炎寺くん。少しいいかな？」

「……アインどうした？ 何か用か？」

名前は覚えてくれていたようだ。ギリギリだったけど。サッカーの練習が出来ずにフラストレーションが溜まっている彼らは少しイラついている。

「豪炎寺君に向いていそうな必殺技が書かれた秘伝書を偶々拾ったんだ」

俺は父さんに取り寄せてもらった書類を豪炎寺君に手渡した。年季の入ったその紙束は血と汗で滲んでいた。歴史が積み重ねられているのだろうか……汚ねえ。

「その秘伝書に書かれた必殺技は、火属性ブロック技、」  
———  
『豪炎

寺君に向けた必殺技だと思うから上手く活用してほしい」

それだけ言い残し、俺は豪炎寺君の元を離れる。練習場所も制限され、時間も少ないが彼ならば上手く扱ってくれるだろう。

彼がデイフェンス技を覚えたら凶悪だぞお！あの必殺技は地面にファイアトルネード撃っているようなものだから、彼に向いていると思うんだ。ゲームと違って必殺技の枠なんてないんだから、積極的に色々な種類の技を覚えてほしいよね。

シユート技は教えないのかって？確かに俺はファイアトルネードよりも強い必殺技を知っているかもしれない。だけど、FWってプライドが必要なポジションなんだよ？豪炎寺君ほどのプレイヤーに指図するのも申し訳ないから自重したのだ。なによ、彼はそんな力欲しくないだろうからね。

——試合当日——

俺は御影専農と雷門の試合を観戦するために、マネージャーたちと共にベンチに座っていた。

「帝国学園の近くで不思議な地震が発生ですつて！ 地下で秘密の実験が行われているんじゃないかと噂になっていますよ!!」

「音無ちゃんそんなこと調べていないで、ほら応援に集中よ!!」

「だって先輩、帝国学園がなにか企んでいるんじゃないかと思つて」

ギクリ?! 心当たりがある話題を音無さんが持ち出した。元新聞部の好奇心がくすぐられたんだろうが……俺には都合の悪い噂だから調べないでほしい……影山が捻り潰してくれると思うんだけど……

「ほら、みんな試合に集中しなさい! 負けたら終わりなんだから」

「すみませえーん……」

そんな気の緩みも夏未さんの一喝により、引き締められる。

もうベンチの環境に馴染んだな。あんなにツンケンすることなかったじゃないか。最初はサッカー部を潰そうとしていたのに、短期間でここまで心変わりするとは……守君恐るべし。

「フットボールフロンティア、予選二回戦の開始でえーす!! 本日は雷門中学と御影専修農業高校附属中学の試合です。実況は私、角間……」

ピ——ツツツ!!

高らかな笛の音が青空に響き、試合は無事開始された。さて今回も楽勝してくれると応援する側としては気が楽なんだが……

「随分とシステマチックな動きですねえ。隙がないというか、すごい統率力を感じると言いますか。こちらを分析し尽くした動きと言いますか……不気味ですねえ」

隣で俺と共にベンチを暖めるメガネが試合を分析する。やはり、彼はフィールドプレイヤーこそ苦手ではあるものの、サポートメンバーとしての才覚を備えているようだ。

「でもこっちだって負けていませんよ! なってったってイナビカリ修練場で過酷な訓

練に耐えてきたんですから!!」

音無はポジティブで良いねえ。マネージャーはモチベーションも大切な役割だし、彼女は根っからの陽キャラだから雰囲気明るくしてくれている。

はてさて試合の状況は、前半が終わるまでお互いに様子見をしていたところだが……そろそろ動きがありそうだ。味方からのパスを受けた下鶴が、先日の雪辱を果たすべくゴール前に駆け上がっていく。

でも、俺は試合を見ていてわかったよ。雷門中のメンバーの動きは短期間でかなりのレベルアップを見せている。——あれならば以前のデータなど当てにはならないだろう……つてね。

『パトリオットシユート』

下鶴は真上にボールを蹴り上げ、左腕の前に突き出した。そして、左腕の親指をボタンを押すかのように握る。ボールが突如ジェット機のように火花を散らしながらゴー

ルへ迫る。

『ゴッドハンド』

が、雷門中。日本の守護神はゴールを許さない。彼の必殺技はデスゾーンをも止める力を持っているのだ。万全な状態であれば、必殺シユートを止められない道理はない。

「雷門中のG K円堂守!! 御影専農のFW下鶴の必殺技を見事にキヤーツチ!!」

御影専農全体が計算外の事態に狼狽えている。大方先制点をもぎ取った後は遅延する……という心算だったのだろうが、その程度の積極性では勝利の女神は微笑まない。データが狂ってしまうと、データキャラって本来の動きができなくなるんだよなあ。ここからは一気に雷門中のペースだ。

……てか本当に守君強いな。全然失点してねえぞ。

「反撃だ!! 行くぞ!!」

守君はキャッチしたボールを足元に落とし、敵陣に駆け上がっていく。

「なっ！ 円堂ゴールはあ?!?!」

「あのような動きっ！ データにないぞ!!」

土門は手をあたふたとさせながらも、DFの意地からかゴール前に立ち塞がる。そして敵だけでなく、味方をも動揺させる衝撃的なプレーには、御影専農の選手達もたまらず立ち尽くすばかり。

なんと守君はゴール前までフリーでたどり着いてしまった。傍にはもう一人守君と一緒に駆け上がる人影が見える。勿論彼は雷門中のFW。絶対的エースだ。

ゴール前からダツシユで上がってきた守君と豪炎寺君によつて連携必殺シュートが繰り出された。2人は交差した遠心力を使い、完璧にシンクロした蹴りをボールに打ち込む。そして、新たな必殺技はイナズマを伴いながらゴールを打ち砕いた。

『イナズマー号』

「なんと！ GKの円堂守が敵陣ゴールまで迫り、FWの豪炎寺と共に、新たな必殺技で

ゴールをもぎ取ったあ!!!」

御影専農は予想外の失点により動揺しているようだ。そして、ベンチに座っていた御影専農の監督がその奇妙なゴールを投げ捨て、逃げ出していくのが見えた。……デー  
タチームがこうなったら終わりだね。

『ドラゴントルネード』

連携の乱れたDF陣をイナビカリ修練場での修行によって得た身体能力で突破し、染岡君と豪炎寺君の連携技でダメ押しの一点を入れて……

ピッピッピ——!!

試合終了を告げる笛がフィールドに響き渡ることとなった。

試合終了直前には雷門中のサッカーを楽しむ姿に感化されたのか、御影専農も積極的なサッカーを始めたがそれこそ雷門中の領分だ。いきなりチーム方針を変更して勝てるほど今の雷門中は甘くはなかつた。



「俺たちの勝ちだあ!!」

守君のバカデカイ声が大気を揺らす。

俺の心配はいらなかったみたいだね。快勝だあ!! 守君も原作では失点していたはずだったけど、この試合はなんと無失点で、ボールの支配率も終始雷門中優勢だった。

明らかにチーム全体が成長したと言えるだろう。……寧ろ順調すぎて、豪炎寺君は秘伝書の技を使ってくれなかったけど……

GKがしっかりしている雷門中は御影専農にとって相性が悪かったなあ。御影戦農は攻撃力に乏しいチームだから、守君のゴッドハンドは破れない時点でひとりでの得点は難しい。となると連携によって守君の大勢を崩す必要があるわけだが……イナビカリ修練場での必死の修行により、キーパーとしての地力も上がっている守君には生半可な崩しは通じない。失点の気配すら感じさせない完璧な試合だった。

相手の杉森さんもかなり良いGKなんだけどなあ。点が取れないじゃ勝つのは不可能だ。

「2対0で雷門中は御影専農に勝利い!!! 準決勝進出を果たしたのは雷門中だあ!!」

まあなんにせよ、無事に快勝することができてよかった。次は秋葉名戸……だったよな。小手先の技だったり、小狡い技ばかり使用してきた印象だ。大した実力はないだろうし、こちら心配はいらないだろう。

## 閑話：イタリアVSドイツ 前半

——ドイツ——

「快晴の空の元、イタリアとドイツの交流試合が今始まろうとしています!! 実況は私、マクスター・ランドがお送りします。解説はレビン・マードックさんです。本日はよろしく願いましたます!」

「よろしく願います」

ドイツの首都ベルリンにて、イタリア代表とドイツ代表の試合が行われようとしていた。

「久しぶりの国際交流試合ということもありまして、このグレイブランドスタジアムも超満員となっております。ドイツの皆さんにとっても、イタリアの皆さんにとっても、すごく注目度の高い試合となっておりますのではないのでしょうか!!」

実況者の言葉通り、スタジアムの収容可能人数ギリギリの人々が押しかけ、未だかつて無い賑わいを見せている。席がないにも関わらず押しかけた人々は、スタジアム外周に設置された巨大モニターでパブリックビューイングを楽しんでいる。

「マードックさん。本日の試合はどのような点に注目して観戦するべきでしょうか？」  
「そうですねえ。やはりイタリアの絶対的エース兼キャプテンであるヒデ・ナカタ選手と、公式試合で未だゴールを許したことがない守護神であるアインス・リヒター選手の直接対決に注目するべき……と言いたかったんですが、急遽出場を取りやめということになってしまいましたので……イタリアとドイツがお互いどれだけ攻め切ることができるか、という点に注目するべきだと考えます」

実況者は試合の前に、解説者に試合の見所を聞いた。そして、サッカー選手として世界的に有名であったマードックは自らの見解を述べる。

「ありがとうございます。マードックさん。確かにドイツは当初予定されていた登録メンバーから変更されており、ドイツ側はGKのアインス選手、FWのムクロ・アスマ選手

を欠いた陣営となっております。そして、キャプテンがアインス選手からヨナス・ポラック選手に変更されています」

実況者は早口に言葉を連ねた。試合の開始が刻一刻と近づいているにも関わらず、人々のざわめきがスタジアム中に反響する。誰しもが、ドイツ代表のベストメンバ―の登場を望んでいたのだ。

「急遽出場辞退となりましたお二人はドイツ国内だけでなく、ヨーロッパの中でも有名な選手となっておりますので残念ですが、それでもお互いのチーム共に将来を有望視されるスター選手揃いとなっております。まさに世界最高峰の試合が期待できるでしょう!!!」

しかし、実況は予期せぬ事態に動揺する会場を落ち着かせ、ボルテージを高めるべく力強く場を盛り立てる。流石は有名実況者である。人々の心を掴むその声は、人々の心をこの試合に繋ぎ止めることに成功した。

「フィールドの中央ではイタリアのキャプテン、ヒデ・ナカタとドイツのキャプテン、ヨ

ナス・ポラックが固く握手を交わしています!!」

そして試合開始直前となり、選手達がフィールドに整列し始める。実況や観客が注目したのはグラウンドの中心に立つキャプテン2人だった。イタリア、ドイツ両キャプテンは今後のサッカー界を担うであろう俊英達である。

「今日はよろしくお願ひします」

「こちらこそ……でもそちらはベストメンバーじゃないみたいだね。こちらはどうか揃えたのだけど……」

ヒデとヨナスは握手をすると同時に、挨拶を交わす。しかし、何処かヒデは不服そうに意味ありげな言葉を並べた。

「——アインとムクロのことですかね。彼らは今ドイツにはいませんから当然出場できません」

ヒデの言わんとしていたことを理解したヨナスは眉間に皺を寄せながら、強く手を

握った。

「全力の君たちと戦いたかったが、仕方ないか……」

「——確かに彼らがいなくなった穴は大きいです。だからと言って貴方たちが強くなつたわけではないでしょう？ 私たちを舐めないでいただきたい」

ヨナスのあからさまな挑発にあえて乗ったヒデはさらに強くヨナスの手を握り返す。

2人ともにこやかに会話を交わしてはいるものの、溢れる闘志を御しきれていない。彼らの瞳には燃え尽きる事のない炎が燃え盛っていた。

「おーっと!! 早くも2人のキャプテンはバチバチと火花を散らしております!! そんな緊迫感がこちらでも感じられ、私もどこか緊張してしまいます!!」

「良いことだと思えますよ。彼らにとつては初の国際試合でしょうし、ガチガチに緊張してしまふよりも覇気に溢れている方が力を発揮しやすいはずです」

数多の経験を持つマードックは、優しげな瞳で試合に臨む子供達を見守っていた。

「確かにそうですね! 私はただ、この試合が白熱した試合となることを祈るばかりで

す。両キャプテンは早速コイントスをして、コートとキックオフを決定しました。……  
キックオフはイタリヤ代表のようですね——まもなく試合開始です」

ピ——ツツツ!!!

イタリヤとドイツの試合はつつがなく始まった。果たしてどのような試合になるのか、彼らの戦いは世界中の人々の心を高鳴らせた。

その試合を遠く離れた日本から観戦する人々がいる。

——日本——

「そろそろ試合始まるけどアンタ見ないの?」

テレビのリモコンを手に持ったムクロは、ヨーロッパの有名ブランドのソファアーに身を委ねながら、リビングを出て行こうとするアインに声をかけた。



「ああ。観戦する必要性を感じないからな」

「……あつそ、チームメイトに随分と薄情ね」

しかしアインから返ってきたのはつれない返事だった。アトリは呆れたようにアインに向けていた視線をテレビの液晶へと移す。

「それよりも俺にはすべきことがある」

「どうせいつもの練習でしょうに」

ムクロの問いかけにも、アインは決して振り返らない。ただ前を向いて歩き続ける。

「残された時間は少ない。俺は負けるわけにはいかないんだ」

アインはそう言い残し、リビングから離れて行った。行き先は書斎にある本棚の前。そして本棚の前に立ったアインは詰め込まれた分厚い書籍の内、一冊を押し込む。

——ガタガタと音を立てながら部屋が揺れ、本棚が動くことで本棚の裏に隠された階段が現れる。

アインはその暗がり繋がる階段を一人、降って行った。

「………つたく。何を怖がってるんだか。今のままだつて世界一なんて簡単でしょうに」

ムクロは物憂げな表情で携帯電話を開く。その待ち受け画面はヒンメルクラウンのメンバーたちとの思い出だった。

ドイツの国内大会で優勝した時に撮った写真が、既に懐かしく思える。まだ、あれから2年も経っていない。ドイツを離れて半年も経っていないのにも関わらず……

「あれ？ アインス様はどこに行ってしまったんですか？」

感傷に浸るムクロを他所目に、入浴を済ませたアトリがリビングに戻る。裸にバスタオルを巻いただけの彼女は、思春期の少年と同居しているとは思えない程に無防備だった。

「アンタその格好で出てくるのやめなさいよ……」

ムクロは呆れたように半眼を向ける。ごく一般的な感性を持つ彼女にとって、同居人のアトリはだらしく見えてしまった。まるで、名家の使用人であるとは思えないほどに。

「アイツはこれから練習だつてき。全く……これからイタリア戦があるつていうのに……」

「そうでしたね！ 私も妹から見ろつてメールが入っていました。危ない危ない」

扇情的な格好のままキッチンに歩く彼女は、熱った体を冷ますために、冷蔵庫で冷やされた水をグラスに注いだ。

「観戦しないのもアインス様らしいじゃないですか。興味のないものにはとことん興味がありませんから」

「そんなの長い付き合いになるから私だつてわかつてるわ。……それでも頑張つてるアイツらに冷たすぎるつて話」

「——そうですね。サツカー仲間の皆さんが必死だったのは私も知っています。アレもアインス様に追いつくためなんですかねえ？」

グラスの中の氷がカラリと涼しげな音を立てる。

アトリはグラスを持ちながらムクロの隣のソファアに腰かけた。眼前には70インチの大型テレビ。そして、試合中継に映るのはフィールドを全力で駆け回るドイツ代表の姿。

試合はすでに始まっていた。

ドイツ代表とイタリヤ代表の実力は拮抗しているようだ。一進一退の白熱した試合は人々の心を震わせる。

——とは言っても彼女達は試合だけでなく、会話にも意識を向けているようだが。

「……ま、細かい理由は人それぞれでしょうけど……そういう奴が多いんじゃない?」

アトリの含みを持たせた問いに対し、ムクロは試合を注視しながらボソリと呟いた。

ドイツ代表、彼らの心境を誰よりもよく知るムクロは、フィールドに立つ選手たちの顔を見ながら思いを馳せる。

(アイツに憧れたやつ)

(アイツに誇りを委ねた奴)

(アイツに夢を託した奴)

(……アイツを好きになっちゃったバカ)

「全員バカだけどさ……それでも諦められないのよ」

自分自身が当事者であるかのように、自分に決意を思い出させるかのように噛み締めながらムクロは言った。

———そうですか。無駄だと思えますけどねえ。

アトリは問いへの答えを聞き流すかのようにあつさりを受け流し、いつのまにか取り出したスナック菓子を口に運ぶ。

「……アンタってアインが居ないとキャラ変わるわよね……冷めてるって言うか……」

ムクロは自分の想いに対し、随分と軽い対応を見せたアトリに苦言を呈する。

「性格悪いって正直に言ってくれて構いませんよ。人って所詮そんなものです。私、ア

インス様以外に興味ないので」

「……あつそ」

「ムクロさんはまだ好感度高めですし、恋路は邪魔しませんよ……どうぞ勝手に……ほら試合見なくていいんですか？ 点取られそうですよお〜」

警告を聞いたムクロはハツとしたように、テレビから離れていた視線を正した。中継されている試合では、イタリヤ代表が絶好の得点機会を得ていたのだ。FWのヒデナカタがドイツのDF陣を軽やかに交わし、ゴール前に立つ。

『ブレイブショット』

ヒデナカタは足元のサッカーボールに足先を擦り付けることで、ボールをリフトアップする。そして、軽やかな身のこなしをもってボールにバイシクルを叩き込んだのだ。

——蒼い燐光を放つシュートがゴールを貫いた。シンブルながらも窮極まで突き詰められたその一撃は、生半可な力では遮ることすら不可能だろう。

「先制点はヒデナカタの必殺シュートだあ!! ドイツのゴールキーパーは反応でき

なあーい?!?!?  
!?!?!  
——ゴール!! 先制点はイタリア代表!! 硬直した試合を動かしましたあ!!」

「——ツチ! うつぎ……」

ムクロとアトリ。仲の良いはずの2人の間には、意外にも険悪な雰囲気か漂っていた。

「——でもチームの雰囲気変わりましたねえ。以前はピリピリとしていたっていうか、規律正しかったというか。軍隊みたいなチームでしたけど今はすごく楽しそうにプレーしてます」

「……まあ確かにそう感じるかもね。別に楽しくなかったというわけじゃないけど、それだけアインの存在感は大きかったのよ。背後にアイツが立ってるのって結構プレッシャーなの。——うまくやったわね」

話を中断したムクロが見つめるのは、アインに変わってドイツのキャプテンとなったヨナスの姿。先ほどの失点を取り返すために反撃を見せる。

## 『ガンシヨット』

ヨナスは上空へと蹴り上げたボールを両足で挟み込み、捻りを加えることで、自身の体を擬似的な銃へと変え、射出する。ボールはライフリングの施された銃身を通り抜ける弾丸のように、猛烈な回転を帯びながらゴールを撃ち抜いた。

「負けじとドイツ代表も反撃だア!! キャプテンのヨナスが取り返し、1対1と同点に戻します!!」

スタジアムは熱狂の渦に包まれていた。少年少女が互いを高め合いながらサッカーという競技に向き合う光景はひたすらに心を打つ。観客は各々の国家の威信を賭けて戦う子供達に精一杯の声援を送る。

「アトリも知ってるでしょうけど、サッカーをしている時のアイツって人が変わるの。普段は無口なインキヤだけど、その時だけは人なのか怪しいぐらい存在感が違う。だから油断なんてしてる暇は無かった」



「アインス様をインキヤって言える人の方が少ないと思いますけど……でも皆さんいじっぱりですねえ。どれだけ頑張っても意味なんてないのに」

「——真実だとはいえ、ほんつと性格悪い……」

試合を観戦しながらも、会話は止まらない。彼が、アインがない時こそ語るべきことなのだから。

一方その頃、ドイツ代表はまたも危機に陥っていた。

「おおつと!! 前半終了直前にイタリアのFWファイデオ・アルデナがドイツの固いディフェンスを突破したあ!? シュート体制にはいったぞお!?!?」

『オーディンソード』

ファイデオの周りに光が収束し、足元に魔法陣が描き出される。そしてファイデオは引き絞った脚をボールへ叩きつけた。

シュートは黄金の剣と化し、ゴールを貫く。

「ゴール!! イタリア代表がここで点差を広げます!! ——そしてここで前半終了だあ!! 1対2でイタリア代表のリードとなりましたが、劣勢のドイツ代表は後半どう動くのかあ!!」

「……思ったよりもやるわね。私があそこにいればこんなことはなかったのに……いや、仕方がないか」

ムクロはただ見ているだけの自分に齒痒そうに、ただテレビを見つめる。だが、自分の決断を後悔することは許されない。仲間を置いてまで、あの男についてきたのだから。

「なんかまずそうな雰囲気ですわね……イタリアってそんなに強いですか?」

「そりゃね。キャプテンのヒデは世界でも有数のストライカーとして扱われてる。それにさつきゴールを決めたフィディオだって、ヨーロッパ屈指のストライカーって話だから……私と、アインがないんじゃないじゃ少し厳しいのも仕方ないわ」

彼女は最初からチームの勝利に不安を持っていた。だからこそ、応援をしようとしな

い彼の行いが悲しかったのだ。

「……負けはダメですよねえ？ アインス様に顔向けできませんからあ……」

しかし、アトリにそのような道理は通じない。

彼女の瞳は仄暗く濁って見える。ムクロはその薄らな笑いが恐ろしい。

だが、彼女は自らの仲間達がこの程度では終わらないことを知っている。あの男に追いつくのは彼女だけではないのだから。

「——見てなさいよ。サッカーはこれで試合が終わるほど懐が狭いスポーツじゃないわ。アイツらもね」

——だといいですねえ。

アトリはそう囁きながら、新たに菓子袋を開くのだった。

## 閑話：イタリアVSドイツ 後半

——ドイツ——

日本で2人の女性が仲良く語らっている頃。ドイツで行われているイタリア戦はハーフタイムを迎えていた。それぞれのチームの選手達は休息のためにベンチへと戻り、水分補給を行う。

前半が終わって1対2。イタリア代表が一点リードという試合状況となっていた。

観客席の人々はハーフタイムであるにも関わらず、選手達に大きな歓声を送っていた。チケットの倍率も10倍以上と注目度の高いこの試合は、ドイツ・イタリア両国から多くのファン達を集めていた。中学生サッカー界がこれほど盛り上がるのは、サッカー全盛期を迎えた昨今の情勢においても非常に稀な現象であるといえよう。

観客はファン達だけではない。耳聡い者達は今後予想されるある大会に備え情報収

集を開始していた。

ある者は自身のライバルの力量を把握するために。

ある者は自身の主催する大会を思惑通りに進めるために。

ある者は自身の監督として対峙することになるであろうチームを見定めるために。

しかし、彼らが持つ思惑はフィールドに立つ選手達には関係なかった。自らの力を出し切り、勝利の栄光を掴む。そのために彼らは努力を重ねてきたのだから。

ドイツ代表のメンバーはベンチの前で円陣を組みながら士気を高めている。どうやら後半の作戦を話し合っているようだ。

「前半終了段階で、我々は1点ビハインド。不利な状況だ……が。これで終わる我々ではない。まともなゴールキーパーがいけないこともあつて致し方ない結果であるといえよう」

キャプテンとしてドイツ代表をまとめるヨナスは、前半をそう振り返る。彼にとってこの状況は想定内のものである。

「そもそもっ！　なんで俺がキーパーやってんだよ!!」

しかし、納得できない者もいた。

アインの代わりにG Kを務めていたのは本職DFのアレクだった。守護神が抜けた穴を埋めるかのようにG Kに収まった彼はフラストレーションが溜まっているかのようにはイライラしていた。

「アインがずっとその役を務めていたからな……外れることなど想定すらしなかったし、サブはいない。誰かがG Kを努めなければいけない以上、文句を言っても仕方のないことだ。——だが……」

一息でそう言い切り、アレクを宥めたキャプテンだが、彼の活躍には不満を持っているようで言葉尻を濁した。眼帯で隠されていない右眼を細め、隣に立つアレクを見据える。

「なんだあの体たらくは。シュートに触れることすらしなかったじゃないか。少しはお前にG Kを任せた意味を考えたらどうだ？」

「おいおい！　なんだよその言い草は!!　普段は手なんて使われねえからどう止めたらいいのかわからねえんだ!!　大目に見ろよな?！」

嫌味を言ったヨナスに対して返ってきたのはアレクのあまりにお粗末な言い訳。呆れたヨナスは額に手を当てたため息を漏らす。

「——ハア……オマエは普段DFなんだから……足を使ってボールをセーブすればいいじゃないか。手に固執する必要はない……GKだって足を使っても構わないんだぞ?！」

「!!」——その手があったわ!!」

漸く彼にGKを任せたヨナスの真意を理解したのか、納得したかのように手を叩く。

「今日はアインがないから気が抜けているのか？　普段はもつとまともだった気がするが……これは要報告だな」

「てめえ!!　チクるんじゃないぞ!!」

アレクは隣に立つヨナスを睨みつけた。だが、ヨナスはその視線を意に介さず語り続

けるのだった。お小言はまだ終わらなそうだ。

「ならば最初から試合に集中しろとあれほど……」

彼らの仲が良いことはよくわかる。だが、今はそのようなコミュニケーションをとっている場合ではない。試合は未だ終わっていないのだから。

「まあまあ、ヨナスさんアレクさんその辺にしておきませんか？ 作戦を話し合う前に後半が始まってしまいます」

いつものことのように聞き流すチームメイトの内、喧嘩を始めた2人の間に割って入った人物がいた。彼女は今にも掴み合いをしようとする2人を制しながら話を戻す。

「——そうだな。私としたことが、このバカに流されてしまった。それでは早速後半について命令を下す」

「……黙っとけよな」



平静に戻ったヨナスは後半の動きについて話し始める。監督がお飾りのドイツ代表にとつて、指示を考えるのはキャプテンである彼の役割だった。

「さて、作戦だが……なんてことはない。そろそろ、本気で攻めるとしようじゃないか。  
——舞台は整った」

——オマエの力を見せる時だぞ

大仰な仕事でアレクとは反対側に立つメンバーの肩に手を添える。先程2人の喧嘩に割って入った彼女だ。

「今まで隠れて頑張ってきたんだし、やっぱ試合で活躍しねえとなあ!! 頑張れよ!!」  
「ええ任せてください。必ず点を取ります」

アレクの激励と共に、チームメイトは後半より試合に加わる彼女へ暖かく声をかけた。FWとしてフィールドにたつ彼女に求められるのはチームの点取り屋としての活躍——その点において彼女はヨナスと同レベルの信頼を得ている。

それ程までに才能を持つ選手なのだ。

「後半開始直後に動く。気を引き締めろ」

——応!!

キャプテンであるヨナスの号令の元ドイツ代表は新たな力を受け入れ、後半へ臨む。

一方のイタリア代表は既に監督からの指示を聞き終え、疲労を少しでも軽減することに努めていた。

「悪くない試合展開だね。——今の所は」

スタジアムの電光掲示板に表示された数字を見ながらイタリアのキャプテン、ヒデナカタはそう告げる。

「そうですね。彼らも中々手強いですが、それでも俺たちの方が強いです。でも……彼らは話しているんでしょようか？ 暗い雰囲気は全くありませんし……それどころか勝利を疑っていないかのように明るい表情です」

傍に立つのはイタリアの副キャプテン、フィデイオ。彼はドイツの面々を視界に入れながら分析していた。

——ドイツ代表の笑い声がイタリアのベンチまで響く。

「……恐らく秘密兵器でも用意していたのかな？ ——ああ彼女のことみたいだね……困ったなあ」

ヒデはその慧眼を彼らは向け、小さな声で呟いた。

「秘密兵器……ですか。——キャプテン。どうかしましたか？」

ヒデはタオルで汗を拭い、ドリンクを一口飲み下す。その瞳には少しの焦りと不安が浮かんでいた。

「——これは厳しい戦いになりそうだと思つてね。フィデイオ、彼らのことをよく見ておくといい。君のためになるはずだ」

「はい。わかりました」

ハーフタイムはまもなく終わる。試合は折り返しを迎え、再開されようとしていた。選手達はベンチからフィールドへと歩き出している。

「ドイツ代表はFWの——に変わって——が入るようです………ええ、こちらのデータを確認したところ、彼女は公式戦への参加経験がないようで全くの白紙となっております。どのような選手なのか全くわかりません」

「まさに、ドイツ代表の隠し玉といったところでしょうか。不利なムードを払拭すべく投入されたわけですから、彼女の攻撃に期待ですね。——でも彼女のラストネーム……少し気になりますね」

少しの休憩が挟まれたことで、会場のボルテージは落ち着きを見せると思われたが、その熱狂に際限はない。益々、人々の応援は激しさを増していた。

今、後半が始まる。

ピ——ツツツ!!!

後半開始の笛が鳴り、ドイツのキックオフで試合が再開された。

ドイツ代表は笛と同時にバックパスを行い、キャプテンのヨナスへボールを回した。ついに彼らの本当の攻撃が始まる。

「早速我々の力を披露するでしょう。各員隊列を組め」

ドイツ代表の中心に立つヨナスは、ボールを保持した瞬間手を大空に掲げた。その瞬間、ドイツのオーソドックスなフォーメーションが大きく様変わりし、GKを除く10人がそれぞれ近くのメンバーと集まり始めた。

「作戦開始」

そしてその一言と共に、キャプテンは手を振り下ろした。ドイツ代表全員が防御を捨て、電撃のように斬り込んでいく。

【必殺タクティクス

ブリッツレイド  
電撃作戦】

「おおっと!! ドイツの選手たちが猛烈な勢いでフィールドを駆け上がっていくう!!  
2人1組となった選手達が、有機的に結合したかのような動きをみせているぞお!!」

彼らはツーマンセルを組むことで互いのプレーの隙を補いながら、激みないパスやドリブルで戦線を押上げていく。そんなドイツ代表の連携は、まるで特殊部隊の軍人であるかのように精密で、一片の狂いもなかった。互いが互いの力量を理解し、それぞれの限界ギリギリのプレーを引き出しているのだ。

ドイツ代表それぞれが全力疾走、減速無しでボールを回していくため、イタリア代表は全く対応できなかった。

「まずは1点だ、きめろよお!! ——」

ドイツ代表のMFから後半から新たにフィールドに立ったFWへボールが渡る。

「格好の決定機がドイツ代表に訪れたぞお!! なんとという攻撃速度だあ!! 先程までのドイツ代表の動きとは全くの別物! 先程交代したFW、シエル・リヒターがすでにゴール前に抜け出したあ!?!?」

「まずい?!?!? 止めろ!!」

イタリアはリードしているものの、決して安全圏にいるわけではない。ここは非戦闘区域ではないのだ。クールなフィデオが血相を変えてゴール前まで戻り、仲間に指示を出した。

——だがもう遅い。

太陽の恵みに照らされ、銀糸のような頭髮は天使の冠する光輪かのように瞬いた。スタジアム中の観衆の視線がイタリアゴールの前に立つ彼女の元へと集う。

そんな多くの熱視線を受けとめた彼女は徐にボールを蹴り上げ、自らも上空へと飛び

立った。

瞬間——闇がスタジアムを、世界を覆いつくした。

宙に浮かび上がったボールがブラックホールと化したのだ。

漆黒の闇が世界を覆い尽くそうと光を吸い込み続ける。そしてスタジアムに開いた空隙の重量によって大地が軋み、時空の唸りによって大気が唸りを上げる。

そんな暗闇の中でも、決して彼女の光は翳りを見せなかった。自らが纏う白銀の光を溜め込み、黄金の光として昇華させる。決して潰えることのない希望が絶望を打ち砕く。

一筋の光条と化した彼女は闇の中心に存在するボールへ、後ろ回し蹴りを叩き込んだのだ。

陰は灼かれ、暗黒点は貫かれる。

そしてブラックホールを貫いた光は、渦を巻きながら周囲に光子を飛散させ、光の槍のようにゴールへと飛翔するのだ。



とめどない夢のように。

飽くなき向上心を満たすために。

——兄に追い続けるために。

『ターミネイトクエーサー』

——光は闇をも照らしながらゴールを貫いた。

サッカーゴールがシュートの余波によって数メートル後退し、ゴールネットがギチギチと限界を告げる音を立てる。

スタジアム中がシュートによって生じた優しい光に包まれ、歓声が響き渡った。

「ゴール!! ドイツ代表決めました!! 後半から登場した、シエル・リヒターが決めましたあ!!! なんと幻想的な光景でしょうか! 私、とても感動しております!!!」

「驚きました……ここまでの隠された才能が存在しているとは。——本当にサッカー界の未来は明るいですね！」

思わず実況解説からも歓喜の言葉が漏れる。中立な立場である彼らからしても、その必殺シュートは美しく、余りに完成された一撃だったのだ。

「ほら、アインの妹が活躍してるわよ。——あの子、時間なかつたのにもうあそこまで強くなつてたのね。綺麗な必殺技だわ」

ドイツのもう一人のストライカー、ムクロも映像を通じて友人の一撃を讃える。彼女の努力を身をもって知っているからこそ、心からシエルの苦悩を理解し、賞賛できるのだ。

「曲がりなりにもアインス様の妹様ですから……才能はあつて然るべきです」

「……そこだけで評価するのはやめなさいよ。あの子多分嫌と言うほど、兄と比べられてきてるんだから……後、あの子がサッカーやつてるとはアインに言わないようにね」

「はて？　なんででしょう？　アインス様といえど流石に喜ぶとは思いますが？」

しかしもう一人の観客アトリは、アインにしか興味がないと言う言葉の通り、主人の妹を讚える言葉すらなかった。彼女の判断基準はどこまで行ってもアインに依存しているのだ。

「——妹のお披露目戦を見てあげないバカな兄貴を驚かせるためよ。わかるでしょう？」

「一理あります。私ですら妹様の努力に気づいたのに全く気づかない鈍感な主人ですから。それに……ドツキリは面白そうです」

「そうよ。アイツの意思であの子を見てあげないといけないの。だからこそ私はアイツを強く引き止めなかったってわけ」

「なるほど。そう言うことでしたか。楽しみですねぇ」

凄絶な一撃により振り出しに戻された試合は、再度膠着状態に陥っていた。攻めの起点となるヨナスと、得点源となるシエルに対し多くの人数を割くことで、イタリアはド

イツの苛烈な攻撃を凌ぎ切っていたのだ。時にはフィディオとヒデもゴール前まで下がる献身的なプレーを見せていた。

彼らの勝利への執念は実を結んだ。ドイツの緻密な連携の綻びを見つけたヒデはパスをカットし、1人でゴール前に持ち込んだのだ。イタリヤの人々の期待を背に、彼はその才覚を見せつける。

「なんとなんとお!!」 ヒデ・ナカタ選手、1人でドイツの堅固な守りを突破ア! 世界に類を見ないレベルの個人技を見せつけます!!」

「こちらだって負けるわけにはいかないさ! もう一点頂くよ!!」

『ブレイブショット』

そう宣言したヒデナカタは、前半に一度得点を決めたシュートを再度放ち得点を狙った。

しかし、今のドイツは前半までのそれと守備の面でも異なっていた。ゴールとヒデの間にはGK……否、DFが1人立ち塞がっていたのだ。

「二度みたシュートを決めさせるわけにはいかねえよなあ！ キーパーとしてはちと邪道だが止めさせてもらうぜ!!」

アレクはGKらしくゴールの前に仁王立ちして、シュートを待ち受けた。右足を引き、シュートに対し半身を向ける。

——シュートブロック——

彼は力強く左足を踏み込んだ。

——視線を感じる。我々を獲物として見定めるかのような気配を。

——気配を感じる。主人以外を認めない排他的な忠誠を。

人々が其れの存在に気づいた瞬間。身をすくませる雄叫びが轟いた。

アレクの背後に百獣の王が顕現したのだ。王者の風格を見せるその体軀は強靱で、全てを噛み砕く鋭利な牙は捕食者としての威容を誇る。

『カイゼリン・レーベ』

アレクが右足をボールに対し振りかざすと同時に、獅子が必殺シユートに喰らいつく。

勇猛なる一撃と獰猛なる忠誠がぶつかり合い、スタジアムを揺るがす。

そして数秒の均衡の後。獅子は哀れな被食者を絶命させたのだ。

「GK、アレクサンダー・ハウゼン！ ヒデ・ナカタ選手のシユートを見事にブロックしましたあ!! なんと無慈悲な一撃ダア!? 私も背筋が凍りつくかのように恐ろしかったです!! まるで健康診断の結果が届いた時のように!!」

実況席まで必殺技の臨場感が伝わっていたようだ。ふくよかな彼の戯けた言葉は、スタジアムの張り詰めた空気を弛緩させた。

しかし、まだまだ気は抜けない。試合終了がすぐそこ迫っている。

「試合も終わっちゃう。そろそろ決めるぞお前ら!! アレいくぞお!!!」

アレクは止めたボールを自陣ゴール前まで戻ってきていたヨナスに送りながらそう宣言する。隣に立つのはFWのポジションから降りてきたシエル。連携必殺技の発動を狙っていることは誰の目にも明らかだった。

だが誰も発動を止められない。ここはドイツ陣営の奥深くゴール前であるからだ。近くにいるのは数秒前にシュートを打ったヒデのみだった。

「わかってる!」

「はい! 任せてください!!」

ヨナスとシエルの力強い答えを聞き届けたアレクは、地面に拳を打ちつけた。

ゴッドハンドとも呼ばれる巨大な拳が、並び立つシエルとヨナスの足元から出現し2人を擬似宇宙へと射出する。

『ザ・ギャラクシー』

2人は地球を臨めるその空間で同時にシュートを叩きこみ、地球に向かって落下させる。

そのシュートは青空の雲を弾きながら、大気圏を突破し赤熱した状態で隕石のようにゴールに降り注ぐ。

ゴールネットが引きちぎれ、大地が抉れた。

「ゴール!! ドイツ代表が自陣ゴール前から超ロングシュートを決めましたああ!!!」

ドイツ代表が得点し、試合終了直前にイタリア代表を突き放した。  
そして数分が経過した……

ピッピッピ———!!



「ここで試合終了〜!! 2対3でドイツの勝利となりました!! シエル・リヒター！  
初試合、2得点と見事期待に応えました!!」

笛が鳴り響き勝利が確定したと同時に、アレクは仲間の元へと駆け寄り大声で叫んだ。

「ナイスだあオマエ達いいー!!!」

ドイツの選手達はシエルを中心に据え勝利を祝う。

観客の歓声が試合を終え最高潮を迎えた。それほどまでに観客の心を揺さぶる良い試合だったのだ。サッカー界の歴史に名を残すことは間違いない。

「実にいい試合でした。私はこれからも彼らの勇姿を楽しみにしていきたいと思えます。それに現役のプロ選手ですら彼らから学べることは多いと思います。この試合によつてさらに中学サッカー界の注目が高まることは間違い無いでしょうね」

解説が試合を高く評価したところ。それぞれのチームのキャプテンはチームの輪から

抜け出し、健闘を称え合っていた。

「まさか、ここまでは驚いたよ。もつと僕たちも修行しないといけないね」

「こちらこそ、最後までずつとヒヤヒヤしていました」

「最初は失礼なことを言ってしまったてすまなかつた。それだけ彼と戦いたかつたんだ。まあ、負けてしまった立場で言う言葉じゃないと思うけどね」

ヒデは苦笑しながらヨナスに謝罪する。試合開始前に挑発的なことを言ってしまったことを後悔して肩身が狭いのだろう。

「構いませんよ。もし、私が貴方の立場であつたとしたら、私もそう考えていたでしょうから」

「……ありがとう。また会おう。その時はきつと私たちが勝つからね」  
「負けませんよ。——絶対に」

試合を終えた両チームのキャプテンは互いに称賛の握手を送る。最も両者の間には試合前以上にバチバチの火花が散っていたのだが。

「白熱した試合を演じた選手たちに万雷の拍手が送られています!! 実に良い試合でしたあ!!」 是非ともまた見てみたいものです!!」

「……その日は意外と近いかもしれないよ?」

解説のマードックは最後に意味深な言葉を残すのだった。

——日本——

「なんとか勝てましたねえ。よかったよかった」

「……怖いからやめてよ。アンタ目が笑ってないのよ」

試合が終了し、遠くの日本にいる2人の間には弛緩した空気が流れていた。なんだかんだ言いつつも、2人とも緊張を見せていたのだ。

ドイツ代表の勝利を見届けたムクロはため息をつきながら携帯でメールを送信する。中身はシエルへ宛てた労いの言葉だった。……加えて彼女の兄のあんまりな言動の報

告も、だ。

彼女がこのメールを確認した暁には、兄の元へと謎の怒りが向けられることは間違いないであろう。

そんな無慈悲な行動を起こしたムクロは、試合を振り返りドイツの戦力を客観的に評価し始めた。

「シエルがいなかったら少し厳しかったかもしれないわね。後キーパーゴミ」

「キーパーはサブを探せば済む話だとは思いますがF W ……妹様は本来出さないつもりだったんですかねえ？」

「——いや、シエルに聞いた話だと元々後半から出場予定だったって。ヨナスとアレクに派手なデビューにしたいって説得されたらしいわ」

「兄君へのお披露目ということですか？」

「……そういうことよ。バカは見てなかったけどね」

観戦中に酒を飲み、ほろ酔いのアトリはソファーに寝そべりながら、隣に座るムクロの膝に頭を乗せる。そんな彼女をムクロは拒否せずに頭を撫でるのだった。そして、壁にかけられた時計に目をやった。

「——今頃温泉にでも入ってるんじゃない？ アイツ妙に綺麗好きだし、温泉好きだし……まだ暫く出てこないわね」

「アインス様の潔癖は小さな頃からずつとですからねえ。それに……まさか地下に温泉を掘らせるとは思ってたんです。それを了承しちゃうご両親の判断にも驚きですが……」

「アイツの両親も本当に親バカよねえ。てか、なんでこんなところに温泉が沸くだったの。私も好きだから嬉しいけどさ」

彼女は日本人であると言うこともあり、温泉には親しみを持っていた。だからこそ、アインの温泉好きは理解できる……が、それにしても彼の、彼の家族の行いは異常だった。

「使用人の間でも綺麗好きだつて言われてましたから。私もアインス様の部屋は丁寧に掃除するようにしました」

アトリは使用人の裏事情を語る。彼女なりに主人に真摯に向き合ってきたのだ。

少々距離感はおかしなことになってはいるが。

「……最初から丁寧にやりなさいよ。最近私は家に家事ほとんど任せる始末だし」  
「いいじゃないですかあく私とムクロちゃんの仲なんですからあ」

アトリは隣に座るムクロに抱きついた。ムクロはそんな不真面目な使用人に呆れるように苦笑を漏らすのだった。

「コイツ……実家から解放されてイキイキしてやがる……」

アトリが仕えるアインの家系は歴史の長い由緒正しい家系。当然使用人への視線も厳しいものとなる。根が一般人……？ な彼女にとつて生きづらい立場であったことはムクロにも理解できた。彼女も煩わしい人間関係や両親に翻弄される人生には理解があつたから。

「ま、かしこまって壁作られるよりはいいか。キモいし」

「ひっどおい!! 女の子にそんなことを言うなんて」

「女の子っていう歳じゃないでしょ。もうにじゅ……」

アトリは抱きついていたムクロの口を手で抑える。

「気にしてるんだからやめなさい！」

ある意味で似たもの同士の人。

なんだかんだ仲はいいの……かもしれない。

試合が終了し、自宅へ帰宅したシエルは自室の窓から身を乗り出した。シャワーによつて濡れた髪をそのままに夕暮れの空を見つめる。

「兄さん……私強くなりました。見ていてくれましたか？」

胸に手を当てながらシエルは遠くにいる家族に思い馳せる。子供の頃に見た憧憬に

少しでも近づくことができればと夢を追いながら。

シエルはあの日知った光に天命を見たのだ。

兄に追いつき、兄と同じ次元で同じ夢を語る。それが彼女の理想なのだから。

数分間、薄明の空を背景に黄昏ていた彼女は、親愛なる友人の言葉によって現実に取り戻された。

「シエル様、髪を濡れたままにしておくとお身体に障りますよ」

「ごめんなさい。今そっちに行くわ」

空を見上げる彼女に声をかけたのは、専属の使用人であるアトリの妹【クロエ】だった。声をかけられたシエルは窓を閉め、部屋の中へと戻って行く。

シエルは——ムクロからのメールにはまだ気づいていない。

怒りのこもった電話を兄にかけ、叩き起こすまで後数分。



## 21話：埋もれてしまった者達へ

「ええっ!? ドクターストップう!?!?」

御影専農戦の翌日、次の対戦相手やこれからの練習について話し合おうと部室に集まった俺たちは衝撃の事態を目の当たりにしていた。

足をギプスで固め、松葉杖をついた豪炎寺君が部員に対し謝り倒している。

「すまん。次の準決勝には出場できない……」

そういえば……豪炎寺君は怪我をして離脱してしまうんだっか。俺はサッカーがでなくなるといふような怪我とは無縁だったから忘れてたわ。

切り傷や擦り傷なんかはいつものことだったけど。

部員達は動揺した様子を見せているが……今後を知っている俺からしたら怪我したのが今で良かったというところだ。帝国戦前に治るわけだし、全く問題ないだろう。

……だつて相手……オタク集団だし。

でも予想外の出来事はそれだけに止まらなかつた。

「尾刈斗中が負けた?!?!」

円堂君の驚きの声と共に部室内が響めく。かつて練習試合で戦つた彼らが、メイド喫茶に入り浸っている連中に負けたという事実は信じ難いようだ。

ま、彼らも地方レベルならそこそこの強さだったからね。種を見破つたり、圧倒的な実力差がないならば完封できる必殺タクティクスもあることだし、下馬評は割と高かつたはずだ。驚くのも無理はない。

そうして原作通り次戦の相手が秋葉名戸に決まつたわけだが……相手の情報は元新聞部の音無をしても皆無だった。全くマークされていない無名校だったのだから致し方ない。

どうするべきだろうかと困惑した空気が流れる。

それを払拭したのはいつも俺と共にベンチの守り人となつている彼だった。

「これは行つてみるしかないようですね。メイド喫茶に」

メガネくんが眼鏡を定位置に戻しながら語り出す。

「秋葉名戸学園のことを僕たちは何も知りません。コレは試合を有利に進めるための情報収集なのですよ!!」

どう考えてもメイド喫茶に行きたいだけだね？ サッカー部の面々はメガネの熱

意に驚き、女性陣はそれぞれ苦笑いやジト目でメガネを見つめている。オタク君さあ

……

メガネくんはそんな反応も意に介さず、部長という責任者である守くんを説得し……

「調査に行くぞー!!」

……説得される守君もどうかと思うけど。

まあ時間がかかって練習の邪魔になるわけでもないし放っておこう。この世界の彼らはゲームのように薬を仕込んだり、ハッキングをしてくるのだろうか？ アニメの方

向性だったら、そんなことはしてこないと思うんだけど……

ま、なんとかなるっしょ!!

皆がメイド喫茶に向かうということで俺は存在感を消し、漂う空気と同化する。

行きたくないんだよね。メイド喫茶。

所謂キャラ違い、解釈違いというやつだ。俺はクールなキャラを目指しているんだ。前世ならまだしも、今世では生まれた国も違う上にオタク文化に触れる時間はなかったんだ。行ったとしても何もわからない。

——てか、リアルメイドなんていくらでも見てきたから見飽きたんだよなあ。前世なら喜んだかもしれないけど……今は食傷気味だ。

男としての成長なのか退化なのか……心に小さな穴が空いたような感覚を覚えながら、こっそりと部室を抜け出した。

——雷門中校庭——

目的のメイド喫茶までは少し距離がある。暫くは帰ってこないだろうということで、



「アインスですけど……急にどうしたんですか？」

何かしてしまっただろうか？ 話しかけられる理由なんてないと思うのだが。

「いやな！　なんかビビツときたんだよ!!　お前に話しかけた方がいいってな!!」

「——いや意味がわからないよ……」

——図書室——

全く……今日はなんなんだ？　個性の強い人たちによく話しかけられる。友人が増

えるのは嬉しいが、あの先輩が言いたいことは結局よくわからなかった。

ほとんどの答えがビビツときた!!　だもんな。とりあえず連絡先だけ交換させられたけど……使うことはあるのだろうか？

俺は不思議な出来事に首を傾げながら、授業中に読む本を手に入れるために図書室を訪れた。大きな声を聞いていたら眠気なんてどっかいつちやつたよ。

本は好きだ。学校での暇な時間を潰せるからな。授業なんてただの時間の無駄だし、時間を潰せる本は必需品だ。

コレと……コレと……コレでいいか。

足りなくなったらすぐに借りることが出来るから図書室は便利だ。静かで居心地もいいから暇な時はよくここにいる。

数冊の本を重ねて持った俺は本を借りるために図書館のカウンターを訪れる。

——いつもの司書さんではないみたいだ。生徒みたいだし図書委員の人なのかな？

「すみません。この本を借りたいんですけど……」

「わかりました。すぐに手続きしますね」

声をかけると彼女は慣れた手つきで本に貼り付けられたバーコードをリーダーに通し始めた。

「……いい本を選びましたね。……貴方はアインスさんですよ？」

一冊一冊本の表紙を確認しながら彼女はそう言った。まさか全部読んだことがあるとか言い出さないだろうか？ そんな口ぶりだけ……

それに俺の名前知ってるんだ。……同じクラスじゃなかったと思うけど。

「そうですけど、何か？」

「失礼しました。私は図書委員を務めております中目葉といいます。お声掛けした理由なんです……少しお願いしたいことがあります……あ、こちらお近づきの印です」

彼女は懐に忍ばせていた何かを差し出してくる。薄く、細長い……

「コレは……葉？」

「そうです。サクラソウを押し花にした自信作です。もらってください」

桜のようなピンクの花びらを丁寧に乾燥させた一品だった。葉や押し花についての知識はないけれど、綺麗な発色で欠けもないそれは純粹に嬉しい贈り物だ。

「あ、ありがとうございます。……頼みたいことってなんですか？」



どうして葉をくれたのかはわからないけど、流れて貰っちゃったし頼みを断りずらくなっちゃった。……ハツこれが目的か！——策士め!!

「それはですね……私を鍛えてくれませんか？」

「はい？」

鍛える？ 彼女はサッカープレイヤーなのか？

「私、見ての通り出不精の虚弱体質でして……それを少しでも改善できればな……と。

——あ、なぜアインスさんをお願いするのも気になりますよね？」

彼女は畳み掛けるかのように話す。

ああ、トレーナー的な意味ね。尚更意味がわからなくなっただけ……本当に今日はどうなってるんだ？ 普段話しかけられることなんてほとんどないのに。

「それはズバリ、アインスさんの身体能力が人間離れしてるって気づいたからです！」

## — 部室 —

校庭で昼寝し図書室で本を借りた俺は、間も無く帰ってくるであろう部員たちを待つために部室で本を読んでいた。マネージャーのみんなも出払っているみたいで、初めての静かな部室だった。

ガラガラと錆かけのドアが開かれ、光が差し込む。

「すまない。少しいいだろうか？」

背中越しに聞こえた声は、聞き覚えのないものだった。サッカー部の皆はメイド喫茶に行っているし……誰だろうか？ 今日話しかけられることが多いなあ。

「——君は……」

振り返った俺は彼の顔を目にする。

思わず身元を聞いてしまったが……見覚えのある人物だった。——でもまだ雷

門にいないはずでは……？

「俺は闇野カゲト」

彼はシャドウと呼ばれるストライカー。エイリア学園襲来の渦中にサッカー部に憧れて雷門中に転入するのだが、入部できずに忘れられ、ダークエンペラーズに所属することになる可哀想な人物だ。

だからまだ雷門中にいるはずはない。

彼は名乗りと共に目的を告げた。

「アインス・リヒター。俺に本当のサッカーを教えてくれないか？」

端的に語る彼は決意に漲る表情とは裏腹に不可解な目的を持っていた。

エースストライカーとして絶賛活躍中の豪炎寺君ならともかく今の俺は唯のベンチウォーマーだ。栞さんみたいに身体能力を見破った！とか言い出すのだろうか？ そんな眼を持つてる人が沢山いたら流石に困る。

「どうして俺に？ サッカー部に入れば豪炎寺君に練習を見てもらえと思うけど？」

「それではダメだ。……帝国との戦いの後、調べてみたんだ。お前の経歴を……隠されていなかったからな」

——別に隠していないからね。それに俺は遠く離れた国の代表GKというだけだ。日本では大して知名度があるわけでもないし、影響力もない。雷門中のメンバーも調べる気がなければ知る由もないだろう。

でもなあシャドウ君に余計なことを言われると困るんだよねえ。面倒なことは避けたいからさ。

できるならば世界大会。その時まで彼らには何も知らないでいてほしい。

どうするべきかなあ？

「——アインス・リヒター。どうしてお前のような存在が日本の、雷門のベンチに居る？」

「……こつちにも色々あるってことだよ。暇な時間だったら練習は見てあげるよ」

聞き飽きた問いだ。答えを告げるまでもない。彼にそこまで踏み込ませるつもりはないのだから。

「ところでさア……」

——黙っててくれない？

## 22話：余裕の勝利

——試合当日・出発前——

試合までの数日はあつという間に過ぎ去り、試合当日を迎えることになった。今頃皆はそれぞれの荷物を試合会場へと向かうキャラバンに詰め込んでいる頃だろう。

御影専農戦を経て成長した雷門メンバーの成長は著しく、ほとんどのメンバーが新たな必殺技を習得することになった。今日の試合でお披露目して形になるだろう。

一方の俺はというと皆の練習を見守り、アドバイスを送ると共に、雷門のメンバーが習得できるであろう良い必殺技の開発に着手していた。帝国戦が終わるぐらいには完成すると思う。

結局のところこの世界のサッカーって強い必殺技さえあれば、どれだけ不利な状態でも覆せるパワーバランスなんだよね。だからこそ、彼らが強くなるためには強い必殺技が必要というわけだ。

原作の技より弱い技を教えるつもりはない。相応の必殺技を開発中だ。

とは言っても順調に開発が進んでいるというわけでもないんだよね。

開発する技の難易度と威力を抑えることが難しいんだよね。俺の必殺技やドイツ代表の必殺技なんて難しすぎるし、俺の能力を前提に必殺技なんて考えても使えるわけがないし、今の日本ではオーバーパワーだ。

なんだったら技を習得してもらおうメンバーだつてエイリア編、世界編で活躍するメンバーに限らないと意味が無くなってしまうし……色々必殺技開発には障害が多いんだよね。

今後のことを考えると、雷門もさらに強くなる必要がある。じゃないとこれからの対戦相手に勝つなんて不可能に等しいからね。俺も色々手を回しているわけだし、もつと頑張らないと。

それに時間を見つけてリアにも会いに行かないといけないし、忙しいなあ。お願いした仕事の成果をこの目で確認したいからさ。

でも時間ねえな。エイリア編に入るより前に行かねば。

そうして出発前の空き時間を思索に費やしていると、実は意外と仲の良い彼にトント

ンと背中を叩かれた。

「少し良いですかね、アインス君」

「ん？ ああどうしたのメガネくん」

将来の日本代表の参謀役？ いや必殺技の命名役か？ そんなよくわからないポジションに定着する彼だけど、部員の少ない雷門にとつて貴重な部員の1人だった。

マネージャーの3人と、俺とメガネ君で暇な時間はよく話しているから割と仲が良い。彼……練習したがないし。

ま、よくムクロにゲームで勝つために助言とかもらったりしているから別に文句は言わないけどね。

「その……首にかけているカメラを少し見せてもらっても良いですか？」

「ああコレ？ はい」

頼みを聞いた俺は、首にかけていたカメラを外しメガネ君へと手渡す。するとカメラをまじまじと見つめた彼は、興奮したかのように声を荒げるのだった。



「これは!! カノンの最新型ハイエンドモデルの一眼レフじゃないですか!! これをどこで?!?」

彼の変貌は余りに唐突だった。これがオタクというやつなのか。——わかるよお……俺もサッカーの話をする時は、体感1. 2倍速で1. 3倍の音量になってる気がするから。自覚あるだけマシだよな?

そう思いつつも、俺は思わず彼の熱意に戸惑ってしまうのだった。

「う、うん? そんないやつなの? 適当に買ってきたからわかんないや」

「何をおっしゃるんです!! これは愛好家の間で数百万単位で取引されることもある超レアものですよ!! どこで手に入れたんですか?」

俺は頭に指を当てながら、数ヶ月前の記憶を呼び起こした。

「ええつと……秋葉原の観光をしていた時に路地裏の店で適当に買ったんだけど」

あの時は初めての秋葉原ということもあり、迷いに迷い見知らぬ場所へ辿り着いてしまったんだ。この時代の日本にはスマートフォンは当然ないし、ナビアプリも発達していない。だから何も見ずにぶらぶらと散歩したんだけど、結構楽しかったなあ。

「それは人類の宝ですよ！ 大切に扱ってください!!」

「あ、ああわかったよ、大事にします」

俺の肩を掴みそう告げたメガネ君の眼は、思ったよりもガチだった。壊したら怒られそうだし、大切に扱うことにしよう。

「試合風景でも撮影するんですか？」

「——多分面白いものが見れると思うんだよね。すぐにわかるよ」

——秋葉名戸スタジアム——

「誰がそんな決まりを作ったのよ!!」

夏未さんは赤面しながら、秋葉名戸のマネージャーに文句を言った。

なぜ、彼女がそこまで語気を荒くしているのか。——その理由は……

【秋葉名戸で行われる試合では、マネージャーはメイド服を着用しなければならない】

というルールを秋葉名戸の監督が定めているからである。

時代が違えばセクハラだのなんだの言われていそうだし、どうして監督にそんな権利があるんだよとかツツコミどころが多いルールだが、俺からしたら面白いのでOKである。……俺だったら監督にシユートをぶつけるぐらいのことはすると思うけど。

ムクロなんて指を指しながら友人であるはずの夏未さんを嘲笑っていた。何も言わずについてきたと思ったら全く酷いやつだ。

自分はマネージャーじゃないから助かったと思っっているのは間違いない。——ま、俺も夏美さんをイジるためにカメラを持ってきたから人のことは言えないんだけどな。

俺は持つてきた、すごく価値のあるらしい一眼レフをムクロに渡し、その場をクール

に去った。木野さんと音無はノリノリみたいだし、うまく活用してくれるだろう。

俺は良いことをしたヨネ？

「さあ、フットボールフロンティア準決勝。いよいよ試合開始です!!」

そうして、近年稀に見る酷い試合が始まるのだった。

.....

……まさか何も起きずに前半が終了するとは思ひもしなかった。秋葉名戸学園の謎のノリに雷門中は翻弄されきっていて、本来の力が全く出せていないようだ。ベンチに戻ってきた雷門メンバーは訝しげな眼差しで対戦校である秋葉名戸のメンバーを見据える。

一方の彼らはどうと……重要なハーフタイムだったのに監督はずっとスイカを

齧っているし、部員の視線は昔懐かしのDSに釘付けた。勝つ気あります？ 貴方達の方が格下ですよ？

それに純粋な疑問だけどサッカーの大会に出ているのにゲームをやるような人間が、なぜサッカー部に入部したんだ？ 優勝したら海外に行けるとかだったかな？ だからってその手段を選ぶか……？

——まあそんな相手チームのことはどうでもいいんだ。

重要なのは彼らの行動に怪しい様子はなかったということだ。つまり下剤を仕込まれたり、ハッキングによるデータの改竄といった不正行為の可能性が消えた。

そうなったらいよいよ彼らなんて今の雷門の敵じゃあない。豪炎寺君がいらないとは言え……ね？ だから本来ならば圧倒して欲しいところなのだが……どうも雷門メンバーは秋葉名戸の独特な雰囲気は翻弄されているようだ。

この程度の奴らボコボコにしてくれないとダメだよねえ？

俺は弛緩しつつある空気を引き締めるために、メンバーに声をかける。

「彼らは弱いけど、油断していい相手ではないよ？ 実力を発揮できなかったなんて、負け犬の言い草だ」

——おう!!

思ったよりもいい返事が返ってきた。これは後半に期待だなあ。

## 『フエイクボール』

後半開始早々、秋葉名戸は動きを見せる。前半温存していた体力をフルで活用し、小狡い必殺技を使ってゴール前にボールを運んだのだ。

## 『ど根性バット』

サッカーとは思えないトンデモプレイに俺も思わずため息が漏れる。超次元サッカーとはいえ……あれ普通にシュートした方が強いぞ？ だって人間を振り回してボールを野球のように打つなんて非効率極まりない。

——やめやめ！ こんなのを考えてたらキリが無い。俺の必殺技だって大概おかしなものばかりだしな。人のことは言えないわ。

『ゴッドハンド』

おっと、試合から目を離していたが守君はシュートを止めたようだ。今の守君にとってあのシュートは大した威力もないし、如何様にでも対処できるスピードだ。全く脅威ではなかったか。

『ドラゴンクラッシュ』

シュートを止め勢いづいた雷門の反撃が秋葉名戸のゴールを襲う。能力的に見れば、染岡君のシュートを止める能力をあのGKが止められるわけではないが……

秋葉名戸の選手達はゴール前に横一列に並び、地面にスパイクを擦り付け土埃をたてる。

シュートが土煙の中に消えていく。

そして、数秒経ち煙が薄くなっていくとボールが露わになった。

ゴールの外で。

シュートは明らかに外れるコースではなかったし、あのGKが止められるわけがない。それに目隠しとなった土煙。

皆不思議そうにしているが、そこまでわかれば導かれる答えはただ一つだろう。まああんなズル想像がつかないよなあ。仕方ないか。

でも、どうやらメガネ君は気付いたようだ。メガネの位置をクイクイと弄ることで、太陽の光の反射が起こり、メガネが白く輝いて見えた。

やっぱり彼目がいいね。視力的な意味ではなく、観察眼的な意味で。

「次こそ決めてやるぜ!!」

闘志のこもった声が快晴の空にこだまする。染岡君の調子は万全だ。豪炎寺君がいなければ彼がエースストライカーであったことは疑いがないだろう。それほどの成長を彼は見せていた。

『ドラゴンクラッシュ』



その証拠に、染岡君は秋葉名戸のデイフェンスを単身で突破し、再度シュート体制に入ったのだから。FWの仕事をちやんとこなしていいね！

『ごりむちゆう』

しかし、先程と同じように秋葉名戸のDF陣は小細工を弄する。数人の連携によって土煙が舞い、青竜の姿が隠された。

風が吹き——土煙が晴れていく。

露わになったのは土煙に紛れ、ゴールを本来の位置からずらすGKの姿だった。メガネ君にズボンを引っ張られ、半ケツを観客に披露していた。

あんなプレイですらカード出ないんだから、この世界のサッカーは無法だ。それが好きなんだけどさ。

メガネ君は俺と同じく、思うところがあつたのか秋葉名戸の面々に声をかけるのだつた。

「オタクとは、一つの世界を真摯に真つ直ぐに極めたもの。ゲームのルールを破つてまで勝とうとする貴方達に、オタクを名乗る資格はありません!!」

——カッコいい……かも。この言葉が刺さるチームめちやくちや多いし。ズルして  
るチームなんてごまんといえるからなあ。俺もサッカーオタクとして、彼の精神は忘れな  
いようにしたい。

再び染岡君にボールが渡った。雷門は失点していないということもあり、精神的に優  
位に立ち終始ボールを支配していた。加えて、秋葉名戸のメンバーは先程のメガネ君の  
魂の叫びを聞いたことで、動きに精彩を欠いている。実力で勝る染岡君にとつて彼らは  
絶好のカモだった。

この試合何度目のシュートだろうか。染岡君は再度眠れる竜を呼び起こす。

ゲームだったらTP切れしてそうだけど、現実だと気力次第で必殺技の回数は幾らで

も増やせる。——時代遅れな精神論だとは思うけど、気力は体力を凌駕するのだ。それを何度も経験し、殻を破ってきたからこそ今の俺がある。染岡君も続いてくれると嬉しいなあ。

『ドラゴンクラッシュ』

秋葉名戸のDF陣はメガネ君の言葉聞き、良心の呵責からか呆然と立ち尽くしたままだった。ごりむちゆうは発動しない。このままならば間違いない染岡君渾身のシュートは得点をもぎ取るだろう。

しかし、これらの最後の砦であるGKは諦めが悪かった。

『ゴールずらし』

ゴールをずらすという誰もが思いつく最強で最悪な禁止手を彼は恥ずかしげも無く使ったのだ。

これは決まらない。観戦している誰もがそう思ったことだろう。しかし、ゴールの前で光が反射し煌めいた。

彼だ。彼がゴール前に走り込んでいる

『メガネクラツシユ』

秋葉名戸の動きを読み切ったメガネ君が染岡君のシュートにヘディングで飛びつき、ずらされたゴールにドラゴンクラツシユの弾道を補正したのだ。

「ゴォ——ル!!　メガネがドラゴンクラツシユの軌道を変え、ゴールに押し込んだあ!!!  
雷門中、先制です!!!」

硬直した試合はメガネ君の献身によって動かされた。メガネがバキバキに割れ、怪我を負ったメガネ君は担架によって担ぎ出されていく。

後で彼を労ってあげるとしよう。

それに……どうやら秋葉名戸の目も覚めたようだな。どうせなら審判の目も覚めさせてくれればいいのに。

そこから始まったのはクリーンで真っ直ぐなサッカー。サッカーの楽しさ、オタクとしてのあるべき姿に気付いた秋葉名戸の生徒達は心を入れ替え、真つ当な試合が始まったのだ。

勿論今まで真面目にサッカーに向き合ってこなかった秋葉名戸のメンバーには厳しいものがある。

それでも彼らは楽しそうにサッカーをプレイしていた。俺にとってもそれは好ましい変化だった。

懐かしいねえ俺にもあんな頃があった……あったか？

強くなることに必死だったから覚えてねえや。あのくらいの初心者だったのも、もう10年前ぐらいの話だからな。

それからの試合は想像通り、雷門の圧倒的な力を見せつける結果となった。

『ドラゴンクラッシュ』

『すいせいシュート』

『グレネードショット』

## 『ローリンググキック』

メガネが五里霧中とゴールずらしのトリックに気づくのも早かったから、時間もかなりあつたし想像以上にゴールを決めることができた。

振り返ってみると秋葉名戸はズルがなければ、大会最弱。実力差がモロに出る超次元サッカーにおいて負けはあり得なかつた。

「5対0、なんと雷門中快勝です!!」

メガネ君に加え、染岡君にマックスに宍戸、半田くんが得点を決めた。本当に余裕だなあ。守君もずっと無失点だし、素晴らしい。

——でもなんか強すぎて主人公チームの試合運びじゃなくね？

## 23話：裏切り

秋葉名戸に勝利したことで帝国との決勝戦が決まり、皆のモチベーションがリベンジに向け最高潮に至った頃。雷門中の結末に水を差すような出来事が起こるのだった。

「この雷門中に入り込んだスパイが、私だけだとは思わないことだ」

——ねえ土門君。

帝国学園までの移動に使うバスへの細工を見抜かれた冬海は呪詛を残した。初めて夏末さんが権力を持っていて良かったと思えた瞬間だった。彼女がいなかったから、教師陣に握り潰されて……みたいないない一悶着もあったかもしれない。

まあ冬海に道連れにされようとしている彼にとってはたまったものではないだろうけどさ。

案の定、帝国からのスパイであった土門君は冬海の言葉を聞き、驚いたかのように硬

直している。目を見開き、表情を強張らせる彼は動揺を隠しきれていなかった。

こう考えると、俺のカチカチの表情筋はスパイ行為に向いているのかもしれない。これから更にポーカーフェイスの重要性は増すだろうし、意識しておこう。

そして、不穏な空気を感じ取ったのか部員たちからは疑いの声上がり始める。冬海の行いにより、帝国はそのような手段も辞さない卑劣な学校であるとイメージが定着してしまったのだろう。仕方のないことだ。

しかし、彼は違った。

「バカなこと言うな！　今まで一緒にサッカーをやってきたじゃないか!!　その仲間を信じられないのか!？」　俺は土門を信じる！　な、土門?」

守君はそのような雰囲気にも吞まれずに、土門君を擁護する。なんとも彼らしい無条件の信頼だ。しかし、それが全ての場合において最適解であるとは限らない。

容疑をかけられた本人は良心の呵責に苛まれていたのだろう。苦しげに言葉を漏らす。

「円堂……冬海の言う通りだよ……わりい!!」



そして彼は振り返りもせず、一目散に逃げ出していくのだった。

土門君も……なんで影山に従ってしまったんだ？ アメリカから日本へ引越して、帝学園サッカー部へと入部した彼の身には何があったのだろう。いつか聞いてみたいものだ。

土門君の言葉からスパイ行為が真実であると判明し、皆が黙りこくる中、夏未さんは一枚の手紙を守君へと手渡した。

——土門君による冬海の告発文だ。

中身を確認した守君と木野さんは逃げ出した彼の後を追いかけていく。

俺にできることはない。ゆっくりと待つとしよう。なあに、こういうのは守君の得意分野だから心配はいらない。

なんか青春してて羨ましいなあ……

——それからのことは語るまでもない。守君の説得により、土門君は真に雷門イレブンの一員となったのだ。

雷門中のメンバーは帝国戦に向け、再度団結した。しかし雷門の不運は止まる所を知らない。冬海の実在は思わぬ問題をも引き起こしていた。

「二ついいですか？ このフットボールフロンティア規約書によると、監督不在のチームは出場を認めないとあります」

そりやそうだよ。部活の大会とか引率する先生が必要なのは明らかだろう。……今まで冬海は試合会場まで付いてこなかったから今更感があるけど。

でもメガネ君がいて良かったなあ。試合当日まで知らずに過ごしていたら不戦敗になるところだった。試合もできずに負けるってのは想像もしたくないほど恐ろしい。

そうして俺たち雷門は監督のアテとして商店街にある雷雷軒を訪れることになるのだった。イナズマイレブンの監督と言ったらやっぱり響木さんだよなあ。

だって他の監督言葉が足らなすぎるんだもの。作戦の意図を告げずに選手に考えさせる。それ自体はとても大切なことだけど、放任主義がすぎると思うんだよ。

てなわけで俺のリスpektする監督は響木さんなのだ。……次に小学校時代の監督。

あの人元気にしてるかなあ？　かなりお世話になったんだよね。いつつも胃薬飲んだのが懐かしい。ヒンメルクラウンのメンバーは問題児ばかりで大変そうだった。……そんなことはいいんだ。俺も部室からゾロゾロと出て雷雷軒を目指す部員たちに付いていく。響木さんは俺のことを覚えてるかなあ？

雷門から徒歩数分。帰宅途中の聖地として中学生の憩いの場となっている雷門商店街に到着した。何処か懐かしみを感じる街並みが心安らぐ。……あと10年、20年もしたらシャッター街になってしまうのだろうか？　それは悲しいなあ。

そして、商店街の一角にある雷雷軒に雷門メンバー全員で押しかけたわけだが……

君たち何やってんのさ……

注文もせずに響木さんを問い詰めた守君達は追い出されてしまった。誰も財布を持つてないのか？　俺は持つてるけど……店の外で様子を覗き見ているだけだから、お金は出せない。

だつてみんなが追い出されて原作通り、居なくなつた方が都合が良かったから仕方ないよね。少し響さんとお話ししたかつたからさ……？

店内から追い出された雷門メンバーは肩を落としながら去つていく。

そのタイミングを見計らつて、外に立つていた俺は店内に入るのだった。

中学生の集団が押し寄せ、賑やかになつた店内は彼らが店主に追い出されたことで落ち着きを取り戻していた。書き入れ時であるにも関わらず、静かというのは些か不景気かもしれないが。

「あのキャプテンの坊や、『ゴッドハンド』を使えるぞ？」

たつた一人残された客——鬼瓦は新聞を眺めながら、静寂を破る。常連の彼は既についてものセットを食べ終え、食後の小休憩を楽しんでいた。

雷雷軒の店主である響木は、彼の言葉を聞き先程の少年を想起する。自らの恩師、円堂大介の孫。自らの尊敬する師の血脈を受け継ぐ彼はサッカーを諦めた響木にとって

妙に眩しく見えたのだ。

だからこそ、その光を闇が狙うであろうことも分かりきっていた。——師の命を奪った影山の魔の手が迫ることは明白だったから。

響木が若者の未来を憂う中、ガラガラと音を立てながらガラス戸が開かれる。来客だ。

「アイツらはイナズマイレブンにならないといけない。ゴッドハンドなど使えて当然だろう」

鬼瓦へ返答したのは響木ではなく、新たな客だった。

——10代半ばの少年だ。艶やかな白銀の髪は整えられており、妙に大人びて見える。鍛えられた身体は無駄が極限まで削ぎ落とされ、機能のみを追求した美を体現していた。

「キミは……雷門中の……」

そんな彼を見た鬼瓦は言葉を詰まらせる。彼は現在の雷門サッカー部に目をかけている。当然サッカー部の一員であるアインのことは知っていた。

だが、彼の目にはどうも普段のアインとは別人に見えて仕方なかった。普段の涼しげで静かな雰囲気は、燃えたぎるような闘志によって塗りつぶされていた。

「……アインス・リヒター。ドイツの守護神だろうか？ 随分と偉そうなことを言うじゃないか」

厨房での作業をやめ、振り返った店主は顔を歪めながらそう述べる。昔出会ったアインのことは忘れてはいなかった。寧ろ、彼のにとっては鮮烈な記憶として残されていたのだ。

「久しいな。ラーメン親父。俺は真実を告げたまでだ」

感動の再会とはいかなかったようだ。アインの態度は以前響と出会った時から改善の兆しすら見せていない。

「……響木だ。相変わらずだなお前は……」

トレードマークであるサングラスの位置を直しながら響木は呆れた様子を見せる。在りし日に見た少年と容貌は全く異なっているものの、人間性自体に変化はないように見えたのだ。

「まあそんなことはいいいんだ……お前は何故ここにいる」

「何故と言われてもこの近くに住んでいるからだか？」

「——本気か？」

気を取り直し、疑問を口にした響木の表情は直様帰ってきた回答によって再度歪んだ。まるでアインの言葉を理解できないかのように。

それも当然だろう。響木にとってアインは遠く離れたドイツのキーパーなのだから。日本にいる筈が無かった。

「その坊主の言っていることは本当だぜ？ なんせ雷門のマネージャーだからな」

「なんだと？」

アインの言葉が真実であることを鬼瓦は知っている。証人を得たアインの言葉は響木も信じざるを得なかった。

「……正確にはマネージャーではなく、ベンチだがな」

「……確かにそれならばこの前の親善試合にお前が出ていなかったことも理解できる」

「どうやら響木は以前行われた試合を観戦していたらしい。それもそのはず響木はアインの試合を観戦するため、態々有料放送を契約していたのだ。」

「何が目的だ？」

響木はアインの言葉を受け入れた上で真意を問う。

「イナズマイレブンを探していると言っただろう？ 俺は見つけたんだ。真のイナズマイレブンをな」

「お前——まだ——」



響木はアインを思い出す。幼少期、イナズマイレブンを求め稲妻町にやってきた彼は響木の拒絶にも関わらず、未だ諦めてなどいかなかったのだ。

響木はアインの狙いに気付き、薄ら寒い思いを覚える。何がこの少年を突き動かすのか、彼は全く理解できない。

だが次の一言ですぐに理解した。

「オマエはイナズマイレブンはもういないと言ったじゃあないか。ならば俺が作ってやるよ」

アインの目的は、過去の自分たち。それを現代に再現することだった。

響木の意識はアインの決意に満ちた言葉ではなく、アインの瞳が狂気に染まった瞳に向けられていた。

適当に喋りすぎたなあ。響木さんと鬼瓦さんには絶対に影山との繋がりを勘付かれてはいけない。もう少し言葉を選んで話すようにしなければ。それに流れで何も注文せずに出てきてしまった……ラーメン楽しみにしていたのに……我慢するかあ。

後は響木さんの説得は守君次第だな。伝説のゴッドハンドを見せつけてやれ。イナズマイレブンの血脈は潰えてなどいないと証明するんだ。そしたらラーメンを食べる機会なんて無限になるからね。

……まさか響木さんが俺のことを調べているとはなあ。監督になるわけだし、俺について話さないようにしてもらわないと。態々何人も口止めしてるんだから無駄にはできない。

……覚えてくれていたことに満足して今はみんなを追いかけるべきか。

そうして俺は雷門に戻ったであろう雷門メンバーを追いかけ、商店街を歩いていく。

そこで思いがけない出会いを果たすのだった。

これが仁先輩の言っていたビビツときたつてやつなのだろうか。俺は彼の元に足を進める。そして俺にしては珍しく、声をかけたのだ。

「あの〜サッカー興味ないですかね？」

俺は八百屋で荷下ろしに励む彼に出会う。相撲部で鍛えたのだらう足腰と、腕力はサッカーにも活かせる筈だ。

何より俺は、GKをやっている彼を見てみたい。鍛えてみたい。

こうして俺は新たなサッカー仲間を迎え入れたのだ。

——そんな壮大な話じゃないけどね？

そして、土門君と話したいと思っていた俺だがその機会は思ったよりも直ぐに訪れた。日が暮れサッカー部での練習が終わる頃、部員の輪から抜け出た彼が俺の元に駆け寄ってきたのだ。

「なあ、アイン。色々が悪かった。すまねえ……」

「みんなが許したんだから俺から言うことはないよ」

彼も十分に反省したことだろうし、まだまだ中学生という子供の時分だ。許されるべきだろう。それに俺は彼の行為を知っていたにも関わらず、黙認していたのだからほぼ同罪だ。責めるべき立場ではない。

……というか俺、これから殆ど裏切りみたいなことをするわけだしなんも言えるわけないんだよね。

「マジか！　ありがとな!!　これからもよろしく頼むぜ!!!　……つてことで、改めて俺の練習もみてくれね?」

流石はアメリカ育ちのコミュニケーション能力だ。俺の乏しいそれとは比べ物にならない。それにしても、土門君が改めてサッカーに向き合ってくれたのは嬉しいなあ。

「もちろん構わないよ?　それが俺の役目だからね。……今までの練習には身が入っ

ていなかったけれど、守君の影響でやる気に満ちているみたいだね」

「ギクツ!! お前気づいてたのかよ」

土門君は半身を引き、目を丸くする。大仰な振る舞いがどうにも面白くみえた。

「フフツ……俺だって何も考えずに練習を見てるわけじゃないからね」

「……悪かったな。これからもっと頑張るから勘弁してくれえ」

少し安心したのか、土門君は普段のように戯けた様子を見せた。良い傾向だろう。これから彼はもっと強くなる。

そりゃあスパイなんてしてたら練習に身が入るわけないよなあ。心のどこかでずつと自分の行いに対する不信感が疼くものだから。

俺も近いうちに似たようなことをするわけだが、良心の呵責とか感じるのだろうか………嫌、あり得ないな。俺はその程度で後悔するような生半可な覚悟じゃあない。

「じゃあ手始めに一つ必殺技を教えよう。帝国戦までに仕上げようじゃないか。時間はないけどね」

「応!!」

「あの子が……昔話していた面白い子供か?」

「そうです。よく覚えていましたね、鬼瓦さん」

「人をジジイ扱いするな。まだまだ現役だ……それで? 彼は何者なんだ? イナズマ

イレブンに強い思い入れがあることはわかったが……」

「ドイツ……いや世界最高のGKですよ。彼奴は」

「昔——もう8年ぐらい前になるのか……ドイツ人の彼奴が観光に稲妻町に来てましてね。その時ウチにメシを食いに来たんですよ。少し話したんですが……その時興味を持ちましてね。以来、ドイツのサッカー事情を定期的に調べていたんですよ」

「すると聞こえてきたんですよ、小学一年生からユースチームの正GKとして活躍し、生涯無失点だったという信じ難い逸話が。それから私は彼奴の試合の中継を追うようになったんです。最も、小学生の試合ですから観れる試合は少なかったですけどね」

「ほう? 彼がそんな経歴を持つ選手だとはおもってもみなかったよ」

「私も昔はGKを齧っていたので興味もありましたからね。だからこそなぜ日本よりも間違いなくレベルの高いヨーロッパ、ドイツから日本に来たのかが理解できなかつた」

「でもアイツの言葉を聞いて理解しました。アイツは……」

「自らのライバルを求めているんでしょう」

## 24話：新監督

「新監督だあ!!」

守君は声を張り上げ、隣に立つ人物を部員に紹介する。勿論、丸いサングラスがトレードマークのあの人である。サングラスがなんとなく可愛らしいから誤魔化されてはいるが、よく見ると厳つい顔と怖い服装をしている。

……考えてみれば、サングラスがトレードマークって影山と被ってるんだな。立場も思想も対極的な2人ではあるが、意外と共通点も多いのかもしれない。根っこの部分でサツカーが大好き……みたいなの？

「響木正剛だ。よろしく頼む」

守君は上手くやったみたいだ。こうして雷門の監督として響木さんが迎えられることになったのだ。今度からは監督と呼ぶことにしよう。



にしても相変わらず頼り甲斐のあるいい声だなあ。監督とかキャプテンって実は声も重要なフアクターだったりするから羨ましい。指示だったり、声掛けの時は声を通った方が良くからさ……

俺は声変わりも終わってあんまり通らない声になっちゃったし、性格的にも大きな声は出さないから……ゲームメイクとか苦手なんだよね……その辺はヨナスに任せちゃってたし……

「さあ決勝戦はもう直ぐだ、お前ら全員鍛えてやる。時間は無いから早速練習に移るとしよう……」

考え込む俺を尻目に、早速響木監督から指示が下されるようだ。

部室に勢ぞろいした部員達は目を輝かせながら響木監督に視線を向ける。

雷門のメンバーは小学生時代クラブにも入っていなかっただろうし、本格的な指導者に教えてもらうってのは初めてなのか？ そりゃ嬉しいだろうなあ。響木監督はイナズマイレブンの元キャプテンなわけだしね。

「まず最初に練習の前に外周を10周だ!!」

「「「「ええっ!!」」」」

響木監督の最初の指示が予想外だったのか、部員達の悲痛な声が部室の中で響き渡った。俺も基礎練は嫌いだ、それ以上に重要性を知っている。蔑ろにしていたら強くないぞー。

「ほらほら早く行った行った。グラウンドの準備はこつちでしておくからとつとつとウオーミングアップを終わらしてきな」

俺も監督に便乗して部員に声をかける。以前ならばこんなことは口に出さなかったが、流石に入部して数ヶ月経つわけだし、部員それぞれと仲が深まってきているから言うようになった。必殺技を教えたってこともあつて、豪炎寺君も土門君も俺にフィードバックを求めてくれるようになったしき。このぐらいなら大丈夫……だよな？

俺の言葉を聞いた部員達は、嫌々ながらも部室を出ていく。期待していたサッカーの練習ではなく、マラソンを指示されたサッカー部の皆は肩を落としながら気怠そうに歩いていた。

その後を追従するのはマネージャーの3人。

残されたのは俺と監督の2人だけだった。しまった……波に乗り遅れた。監督と2人つてのは……先日のこともあってちよつと気まづいよね。

居心地が悪くなつた俺は部室から逃げ出し、グラウンドの準備へと向かう。力仕事はマネージャー陣に任せるわけにもいかないからさ……ゴールを動かして……凹んだところ土を盛つてローラー掛けとくか……

やるべきことを脳内でまとめながら俺は立ち上がった。

「おい、アイン」

引き戸を開き、部室の外に一歩足を踏み出した瞬間、監督に声をかけられた。何を言われるのだろうか？ 不安に思いながらも、監督の方に向き直つた。サングラスを外しながらこちらに目を向けている。

数秒の沈黙後、監督は口を開いた。

「悪かつたな……イナズマイレブンが居ないとか言つちまつて」

思いがけない謝罪に俺は口を開けなかった。鋭い視線が此方を見透かすように射抜く。

「俺もあの後色々考えてな……」

監督は立て続けに言葉を紡ぐ。どこか迷いがはれたかのように、清々しい声音で。雲の隙間から差し込む日差しが、響木監督のサングラスを反射され、怪しく光って見えた。

「――協力してやるよ。最強のイナズマイレブン作りを……な」

そう言い残した響木監督は俺の肩をポンと叩き、部室から出ていった。

俺は監督―響木正剛をみて燻っていた焰が燃え上がる様子を幻視した。

——フットボールフロンティア地区大会決勝当日——

「ふう……もう決勝か……早かったなあ」

「地区の決勝ね。まだ全然大したことないでしょ」

「まだツンツンしてるのかいな。頑固だなあ……」

「フフツ……先輩らしいじゃないですか」

俺とムクロと神門さんは帝国学園のグラウンドを見下ろせる席に座って雑談していた。なんだかんだ言ってムクロも雷門の試合に興味はあるようで、神門さんを伴って観戦しにきたようだ。素直じゃない奴め。

今日の対戦は帝国学園で行われるということで、俺たちは目を点にしながら探索をしていたのだ。ゲストが入場できる範囲内ではあるものの、広大な帝国学園の探索は中々に興味深かった。

「それで？ なんなのよこの学校……なんでこんな創作物に出てくる脱出不可能な刑務所みたいな作りになってるの……？」

やけに詳しい例えをムクロがしているが、的を射ているように思う。帝国学園にはこの前来たばかりだけど、それでも違和感が拭えないもの。全館鉄筋造りで高い渡り廊下とか、ラスボスが最奥で待っていていそうで仕方ない。

ま、実際影山ってほぼラスボスみたいなものだから大なものだから間違っではないのか。

神門さんが手にした携帯電話を見つめながら口を開いた。

「ええと……帝国学園は学力全国一位にもなったことがある進学校で、体育に射撃の授業があつたりするようなお金持ちの学校みたいです」

「金があるからこんな変な学校にするってのも無理があるでしょ」

「まあ……確かに」

神門さんが帝国について教えてくれたが……金持ちって言っても限度があるだろ？

この校舎を建てるためには何億かかるんだろうか……天井なんて遠すぎてあんまり見えないぞ……

ああ……そういうえば、試合開始直後に鉄骨が降ってくるんだった。万が一が起きないように助けることのできる体制を維持しておかなければ。

そろそろ試合も始まるだろうしベンチに向かうとしよう。

「フットボールフロンティア地区大会決勝！ 果たして優勝は帝国か？ それとも雷門かあ!？」

ピ——!!

毎度の如く鳴り響く笛の音は、帝国の校内で甲高く反響した。

そして試合開始直後に鉄骨が降ってくる。後5秒後ぐらいに。

神経を空間把握に集中させていたこともあって、把握できたが、知らなかつたら流石に気づけないな。コレ。

万が一のことを考えて、今すぐにベンチから飛び出せる体制は整っているが……あの

方向だったら大丈夫だろう。聞き耳を立てていたが、鬼道君は雷門メンバーに忠告していたようだし。

壮絶な音を立てながら、鉄骨が降り注ぎグラウンドが揺れる。土埃が晴れ雷門メンバーの無事が確認される。

帝国メンバーと響木監督、守君がグラウンドから離れ、帝国の奥へと走っていった。影山が中学生にガン詰めされていたのだろうが、俺はついていかなかった。どうせ試合の後、顔を合わせることになるわけだし。

結構エグめの事故現場だったはずだが、マネージャーも観戦者もあまり気にはいなかったのが幸いだろう。多分超次元な必殺技で慣れてるんだろなあ。鉄骨なんかより強い必殺技はいくらでもあることだし。

グラウンドはあつという間に修復され、試合は再び再開されるのだった。

「グラウンドの修復も完了。今度こそ、正真正銘、フットボールフロンティア、地区大会



決勝の開始です!!」

雷門のリベンジマッチが始まった。

ピイイイ——  
!!!

いつもの笛も、緊張からか違って聞こえる。自分がプレーしている時は一切緊張を感じない俺ではあるが、応援する立場になってみると流石に緊張する。守君達をできる限り鍛えたつもりではあるが、俺の目には帝国と雷門の実力は拮抗しているように見えた。

試合開始早々、豪炎寺君と染岡君は飛ばしていくようだ。最初は不仲だったとは思えない連携でフィールドを駆け上がり、シュート体制に入る。

『ドラゴントルネード』

炎の力を手に入れた東洋の竜がゴールを喰らいつくそうと襲いかかる。

## 『パワーシールド』

が、流石は帝国学園のキング・オブ・ゴールキーパーを名乗るだけはある。原作よりも成長したであろう2人の連携シュートが弾き返された。

俺はルーズボールが嫌いということもあつてパンチング技を信用しないタイプなのだ、今回は運良く帝国学園のDFへとボールが渡った。

帝国学園のカウンターが始まった。

## 『百烈ショット』

FWの寺門はサッカーボールに目にも止まらぬ蹴りを幾度も叩き込んだ。上空から叩きつけられたその一撃は、上方からゴールを狙う。

## 『熱血パンチ』

一方の守君は消耗の少ない必殺技で向かいうつ。百烈ショットは出の速さと使い回しを意識した技つてこともあつて、大した威力はない。守君のパンチングによってポ-

ルが溢れた。

あちゃー……調子良くなさそうだ……守君が弾いたボールがゴールポストに当たってのは練習でも中々無い光景だった。

鬼道家の事情を聞いてしまったのだろう。いくら守君とは言っても中学生だもんな……そりや気にしちまうよ。この試合の結果が、家族関係に繋がってくるってなったらさ。

全く意地悪いぜ影山は……

だがしかし、不安な始まりを見せた試合は雷門中にとって順調な試合運びを見せることになる。

『ドラゴンクラッシュ』

帝国の一瞬の隙をつき抜け出した染岡君が必殺シュートを叩き込んだと思えば……

『ファイアトルネード』

もう一人のフォワード豪炎寺君も負けじとゴールを狙う。

『すいせいシュート』

終いにはボールを奪ったマックスが即座にロングシュートを狙ってからものだから源田としてはたまったものではないだろう。

実際に源田は思ったよりも消耗が激しいようで、拳を気にしながら息を切らしていた。俺だつて必殺技を連発できるようになるまで、どれだけ苦しんだことか。そりや耐えられるわけなどなかった。

必殺技つて気力も持つていかれるし、特訓次第ではあるけど体への負担も大きいから連発できるものではないんだよね。

この前マックスに話しておいた、削りのための必殺技の重要性を覚えてくれたみたいだ。源田は必殺技を使ってシュートを止める選択をしていることもあつて最大限に目的を果たすことができていた。

自軍のGKの状況を見てか、帝国学園はゴッドハンド対策として生み出した切り札を

切った。

雷門のゴール前で帝国の司令塔。鬼道君にボールが回る。

『皇帝ペンギン2号』

鬼道君が指笛によってペンギンを呼び出すとともに、帝国のFWである佐久間、寺門兩名が前線へと駆け出した。そして鬼道君がペンギンを伴って蹴り出したシユートに前線の2人が同時に強烈な蹴りを叩き込む。

『ゴッドハンド』

神の手が帝国の秘策と均衡する。

……が、しかしゴッドハンドの5本の指に突き刺さったペンギン達が其々の指を崩壊させ、ゴッドハンドを破壊した。

「ゴール!!帝国学園先制!!鉄壁を誇るゴッドハンドを打ち破ったのは帝国の新必殺シユートだあ!!!」

ワンチャン勝てるかと思っただけ……確かに皇帝ペンギンはゴッドハンド対策の技と言つて差し支えないな……ゴッドハンドは掌が1番力を伝えられて強いんだが、指先で止める事を強要してくる皇帝ペンギンは相性が悪そうだ。

「……で前半終了！ 終了間際に先制した帝国のリードで折り返しです！」

ハーフタイムに入った雷門ベンチでは守君の調子を憂う言葉が多く聞こえた。明らかに試合に集中できてないもんねえ。守君にとつては対戦している鬼道君だってサッカー仲間だ。蔑ろになどできないのだろう。

だけど……友達として本気でぶつかつた方がいいよなあ。豪炎寺君に守君のことを任せてもいいが……ここは友人として口を出させてもらふことにしようか。ファイアトルネードをぶつけられるのって痛そうだし。

「守君。ちよつと付いて来て」

「……なんだ？」

不思議そうな顔をしながらも、守君はついて来てくれた。  
連れションと言ったところだろうか、2人きりになれる場所で俺の想いは伝えておいた。

……そんな言い方すると一気に怪しくなるな？

## 25話：暗躍

俺の思いは伝え終わった。短い時間ではあったが守君との約束を再確認することができたし、有意義な時間になったと信じたい。守君の顔は前半と比べても、清々しいものとなっていたしね。

2人でベンチに戻ると試合開始はもう目前。守くんはピシヤリと顔を叩くと、自分のポジションに向けて駆け出すのだった。

10分のハーフタイムを終えた両チームは、後半戦を迎える。雷門中の一点ビハインドで東京地区の最強を決める試合が今、始まった。

「後半キックオフ！ 開始早々帝国が攻め上がるう!!」

帝国の怒涛の攻めは後半でも劣ることはない。帝国のシュートの嵐を全て完璧に凌



ぎ切った守君ではあるが、それでも帝国の勢いは止まらない。

『デスゾーン』

帝国の伝統の一撃が雷門のゴールを狙う……がしかし、調子を取り戻した今の守君にとって、デスゾーンはすでに攻略した必殺技であった。

『ゴッドハンド』

幾多の苦難と練習を乗り越えた神の手は、以前のそれより格段に成長していた。帝国の連携必殺シュートをがっしりとキャッチした守君は、声を張り上げながらボールを前線へと送る。

『デスサイズロー』

ボールを受け取った土門君は、足を振り払うことで衝撃波を発生させ、ぶつけることでボールを奪おうと迫ってきていた帝国の選手を突破する。必殺技を伝授した身とし

ては、上手く活用してくれて嬉しい限りだ。

『ドラゴン——』

ボールを全線で受け取った染岡君は、渾身の力で彼自慢の必殺技を発動させた。

『パワーシールド』

だが、それだけで得点を許す源田ではない。疲労感を滲ませながらも、彼の代名詞である必殺技によって染岡君のシュートを迎え打とうとする……が。

『——トルネード』

源田によって生み出された障壁が、必殺シュートとせめぎ合っている最中、駆け上がってきた豪炎寺君が追加のシュートを叩き込んだ。まだ雷門中の皆は知らないテクニクではあるが、所謂シュートチェインに近いものだろう。

豪炎寺君によって押し込まれたサッカーボールがゴールを揺らす。こういった機

転ってどんな手段を使っても得点をもぎ取らなきゃいけないストライカーに重要な資質だよな。必殺技の応用とかで土壇場で必殺技を生み出したりもするわけだしさ。

「ゴール！ 雷門同点に追いついたあ!!」

同点に追いついた雷門と帝国の戦いは苛烈さを増し、一進一退の攻防を繰り返した。息も継げぬ白熱した試合は、各々の必殺技を総動員する総力戦となっていく。

『サイクロン』

『クイックドロウ』

『疾風ダツシュ』

『キラーズライド』

すごい必殺技の応酬だ。やっぱり超次元サッカーってこれが見どころだよなあ。あとマックスはいつの間にか新必殺技を覚えたのだろうか？ やっぱりセンス○だな。

『イリュージョンボール』

雷門と帝国の均衡を破ったのはやはり試合のキーマンである鬼道君だった。巧みな足捌きで雷門中の面々を翻弄しながらボールを一人で運んでいく。そして、寺門・佐久間を呼び寄せあの必殺技のシユート体制に入るのだった。

『皇帝ペンギン2号』

指笛によって再度呼び出されたペンギン達が、試合を決定づけようとゴールを狙う。足を痛めているであろう鬼道君の決死の一撃が守君を襲った。

『ゴッドハンド』

守君は自らの持つ最強の必殺技でペンギン達を迎え撃つ。前半とは明らかに動きの違う守君ではあるが、それでも尚、皇帝ペンギン2号の力が勝っているように見える。ズリズリと、守君の足が交代しゴールラインへ迫る。

『ゴッドハンドW』

しかし、そのような苦境でも諦めないのが雷門中のキャプテン。円堂守であった。守君は土壇場で新たなゴッドハンドを完成させたのだ。流星は俺のライバルだ。

ゴッドハンドWは奇跡的に成功したものではあるけれど、後世においては明確にゴツドハンドと区別される強力な必殺技なわけだし、守君にはいずれ習得してもらいたいものだ。

試合時間はアレイシヨナルを加えて残り5分と言ったところ。筋道通りならば、ここから雷門の逆襲が始まる頃合いだと思うが……

——そろそろ俺も動き出さないと……か。最後までこの勝負を見届けたいところなんだが、俺には今しかできないことがある。アイツを助ける義理もないけれど、この機会を逃したら影山を探すところから始めなきゃならないわけだしな。

「悪い。ちよつと電話かかってきたから少し離れるわ」

「えっ!?! ……うん。わかったわ」

木野さんにそう告げた俺は、ベンチを離れ帝国の冷たい通路を歩いていく。目指すの

は影山の場所。色々と仕込んでおかないといけない。

アインがフィールドを去った後も、試合終了の笛の音が鳴り響くまで試合は終わらない。雷門のGKが魅せたのならば、それに応えるのは当然雷門のエースストライカーだった。

『スクリュードライバー』

アインから伝授された必殺技を発動させた豪炎寺は、炎を足に纏わせ、地面へと打ちつけることでボールを奪取する。アインによってファイアートルネードに似てる技だからいけるだろうと、適当に選ばれた必殺技であったが、意外にも豪炎寺には向いた必殺技であった。

ボールを前線で奪った豪炎寺はその勢いそのままフィールドを駆け抜けていく。

——前線にいるのは豪炎寺だけではない。壁山と円堂もまたフィールドを疾る。

『イナズマー号落とし』

イナズマ落としてイナズマー号を土壇場で組み合わせた必殺技が、高高度から撃ち落とされる。蒼と金の光を纏った強力な必殺シュートが試合を決定づけるためにゴールを狙う。

『フルパワーシールド』

文字通り、源田の全力がゴールを覆い保護する。源田は相当な疲労を見せていたことに加え、角度のついたイナズマー号落としてはシールド系の技と相性が悪い。万全な状態ならば結果は違った……かもしれないが、それでも今軍配が上がったのは……

「決まったああ!!! 雷門のゴォ——ル!!!」

雷門の方だった。

「なんと! キーパー円堂までシュートに絡む全員サッカーで勝利をもぎ取ったああ!!!」

ピッピッピ——

「……で試合終了！　雷門中勝利！！　40年間無敗の帝国学園やぶれるうう！！」

観客席から大きな歓声上がる。戦地は帝国学園。アウェイであったものの、この激闘を征した雷門への賛美は間違いなく心からのものだった。

「フツ……負けた………か」

拘束された影山は数人の警察官に囲まれながらそう呟いた。場所は影山を拘束した総帥室。無機質な部屋の中で、複数の視線が雷門と帝国の激闘を映し出す大型モニターに注がれていた。



「お前の思惑は外れたみたいだな影山。雷門の勝ちだ」

鬼瓦は隣に立つ影山に目を向けながら、積年の恨みが籠った嫌味を口にする。数十年前の怒りは影山を逮捕するに至っても尚冷めることなどなかった。

「私の指揮下を離れた以上、こうなる結果は見えていた。思うところなど何もない」  
「……そうかよ。オラ！ キリキリ歩け!!」

私怨がありつつも立場は刑事。念願叶って雷門の勝利を見届けた鬼瓦は職務を全うするべく、影山を連れ出した。

「試合を観戦し続けたのはお前だろうに……」

影山の呆れた声が珍しくも漏れる。鬼瓦は影山を追う刑事であるとともに、雷門中のファンでもあったのだ。

数人の足音が帝国学園の廊下にコツコツと響く。廊下はどこまでも静かで、薄暗かった。総帥室から続く道に人の気配はない。このまま影山は無事連行されるのだろう。……本来ならば。

——突如、閃光と共に耳を劈く音と爆風が暗い小道を吹き抜ける。

「なんだ!! 何が起こった!!」

予期しない出来事に鬼瓦は語気を荒げる。それもそのはず、影山という自らの宿敵を捉えた彼の心はひりついていた。

「壁際に寄って頭を庇え! 鉄骨が振ってくるかもわからんぞ!」

先程の出来事も相待ってそう注意した彼は、胸元からトランシーバーを取り出し、帝国学園外に待機している部下に指示を出す。

「停電の復旧急げ、影山を絶対に逃すなよ!」

「はい！……戻りましたっ……！！？」

「おいどうした？ 影山は!?」

「いません!! 逃げられました!!」

暗転した視界に光が戻った時。影山の姿はすでにそこにはなかった。残されたのは破壊された照明の他はたった一つ。ガラス片が突き刺さったサッカーボールのみだった。

#### 同時刻―帝国学園隠し通路

黒いクロークによって顔を隠したアインと影山は、影山が複数事前に用意していた隠し通路に身を隠し、鬼瓦ら警察官からの逃亡を図っていた。

「随分と見事な手際だ。後ろ暗い過去でもあるのかね？」

通路を早足に歩き続けながら、影山はアインに問いかける。サッカーボールによって

的確に照明を破壊した手管は、並大抵の技術では成し得ないものだった。

「ある程度サツカーをやっていたらあの程度誰にでもできる……それに戯言は後にしろ。時間はないだろう？」

雷門中对帝国学園の試合が終わり、影山が連行されるところを妨げたアインは影山に問いかける。

「ほう？ やはり私を庇うのか。雷門を潰そうとしたこの私を」

「オマエの計画が成功するとは微塵も思っていないかった。思うところはない」

影山の挑発を切って捨てたアインは無駄話を避け、本題に入ろうとする。

「それよりも俺がオマエに手を貸した意図は理解しているだろうな」

アインは終始高圧的に言葉を選ぶ。影山に主導権を握られたくない意思の表れだろう。

「…………フツ…………そう焦るな」

そう告げた影山は不敵な笑みを浮かべた。闇を讃えた表情は、終わることのない憎しみと同時に、アインへの期待も感じられるものだった。

「お前にはプロジェクトZに関わってもらいたい。その実力をもつて神子を神の頂へと到達させよ」

「随分と気取った言い方だが…………神、ね。…………いいだろう。手を貸してやる。当然対価は貰うがな」

フードによって隠されたアインの表情は影山には見えない。だが、それでも影山はアインの滲み出る喜びを感じ取るのだった。得体の知れないアインの本心に、影山は悪魔と契約を結んだかのような寒気を感じるのだった。

「…………想定済みだ。必要なのは金か？ 権力か？ それとも闇に潜む品々か？」

「いや、俺にとってそのようなものは一考の価値もない。俺が求めるのはただ一つ。――

「有る人物との繋ぎをしてもらうことだ」

裕福な生まれで目立った欲のないアインには俗物的なものは価値がない。要求するのは、知識や縁のような属人的なもの。

「ほう？ 誰だ？」

「お前のかつての弟子。——だ」

帝国学園 雷門中控室

【急に用事が入ったから、先に帰っててくれ。他のメンバーにも伝えておいてほしい】  
「アイツ何やってんの？」

ムクロは携帯電話で幼なじみからのメールを確認し、ポツリと愚痴をこぼす。幼い頃

から理解が難しい男であったが、ここ最近の彼はどこかドイツにいた頃と様子が違うように思えた。

「どうかしたかしら？ ムクロ？」

「アインの奴からメールが届いたから見た。アインの奴用事ができたから、ここで解散するらしいわ」

昔から仲間とのコミュニケーションを軽視する傾向にあった彼の性格は、日本に来てからかなり改善されたようにムクロは感じていた。だからこそ、彼が応援する雷門中の地区大会優勝を祝わないということに違和感を覚えたのだ。

「あら？ そうなの？ 忙しそうねえ」

「どうしたんだらうな？ ちゃんと勝ったぞって報告したかったんだけど……」

ムクロの言葉を聞いた木野と円堂はアインが忙しいのだろうと考える。ここ最近、アインが忙しそうにしていたこともその判断を後押しする。

「アインにはどうせ部活で会うんだし、そんな時でいいだろ。早く帰ろーぜ」

染岡は試合の疲れからか早く帰ることを促す。最も、帰ったところで待っているのはやる気に満ちた円堂による更なる練習地獄なのだ。

「まあそうだな！ 帰ろうぜ!!」

円堂の号令と共に各々の荷物を持った雷門メンバーはバスへと歩き出した。最後に部屋に残ったのは何かを考え込むムクロだった。

——なんか妙なことを企んでそうね……あのバカ。



## 26話：目覚め

「随分立派なスタジアムだなあ」

帝国を脱出後、影山が何処からか呼び寄せた車に数時間揺られた俺達は、ギリシア建築を模して作られた豪華なスタジアムへと辿り着いた。

機密保持の観点から、影山の支配が行き届いたこの場所が例の計画に適した場所なのだという。まあやってることは葉漬けだし、露出は極限まで減らして当然だろう。俺としてはもう少しこじんまりとした落ち着く空間が好きなのだけど、無駄な諍いを起こすほど馬鹿じゃあない。

「王には王座が似合うように、優れた才を持つものには優れた環境が与えられるべきだ。天帝殿はわかるだろう？」

日が暮れ始め、薄暗くなった車内で呟かれた言葉は明らかに俺を煽っていた。どうやらこの男は先程助けた恩をもう忘れてしまったらしい。

「うるせえ！ 俺をその渾名で呼ぶな!!」

「……落ち着きたまえよ。何故イラついているのかわからないが……目的地に着いたことだし、早速顔合わせと行こうじゃないか」

影山に促され、降車した俺は影山の後を追って歩いていく。不必要に身元が割れないよう、完璧に顔が隠れていることは確認済みだ。

「ようこそ我が世宇子スタジアムへ」

影山は芝居掛かった様子で振り返り様にそう告げた。眼前に広がるのはスタジアムの周囲に配置された精緻な彫刻達……この建物飛ぶんだった……よな？ どんな超技術だよ……そんなことはどうでもいいか。

世宇子スタジアムを訪れた目的は勿論、世宇子中の面々を鍛え上げるためだ。影山の依頼を建前に、彼らを雷門の壁として相応しい存在へ昇華する……つまり俺はあの私の

強い世宇子中の面々を手懐け、指導しなければならぬというわけだ。

実力的には現時点の世宇子ならば圧倒できる自信はあるが……疲れそうだよなあ……今更だけど嫌だなあ……

「どうした早く行くぞ。既に集合しているはずだ」

影山の催促する声が聞こえる。覚悟を決めた俺は足を踏み出した。厳かな雰囲気滲ませるそのスタジアムは、静寂に満ちていてどうにも居心地が悪かった。

「こりやー試合必要になりそうだ」

「何か言ったか?」

「なにも?」

---

黄昏の空の下、影山によって集められた精鋭達は、破壊されたグラウンドに座り込み

ながら思考に耽っていた。世宇子のキャプテンである彼も例外ではない。

「ああ……これ程までに空は広がったのか」

僕は髪が汚れることも気にせずサッカーグラウンドに寝転がりながら、空を見上げた。太陽は西へ沈み、世界は薄明に包まれている。

初めて味わった徹底的なまでの挫折。

たった一人に対して、チームとして敗北する不覚。

本来ならば、心が折れるべきなのかもしれない。だが、僕の胸中に広がるのは漠然とした充足感だった。後は……少しの悔恨の念といったところだろうか。あまりに実力差が大きすぎて、そこまで露骨なものではない。

それ以上に僕は目覚めることができ嬉しんだ。紛い物の力が本物の力に圧倒されて……真の強さを知った。あんなものに頼って神を自称しておきながら、心の何処かで自分の行いに対する疑いがあったのかもしれないな。

僕がこうして目覚めたのは数時間前のある男との出会いまで遡る。

普段の練習を終え、宿舎へと帰宅していた僕たちの元に総帥からの連絡が入った。

「紹介したい男がいる」と。

何故この僕たちが指示されなければいけないのかと疑問に思いながらも、総帥の言葉に逆らうことはしなかった。僕たちの力は影山によって与えられたものであるとわかっていたからね。

数時間後、フィールドに集められた僕たちは本物の神と見えることになったんだ。彼の第一声は……

「影山との取引でここに来た。お前達を強くしてやる」

——というものだった。勿論増長していた僕たちがそんな不遜な言葉を許すわけがない。かなり喧嘩腰で話しかけてしまったよ。真つ黒な外套に身を包み、顔を隠している彼はひたすらに怪しかったからね。

とは言っても致し方ない点多いと自己弁護したい。総帥に選ばれた私達は神の資

格たる……いや、神だと勘違いする契機となった力に吞まれていたのだから。

―神のアクア―

何人たりとも寄せ付けぬ……圧倒的な生物としての格の違い。私達はアレを口にした時、人の枠を超え、神たる資格を得たはずだった。

今までとは比類なきパワー。アビリティ。スタミナ。それは我ら世宇子の面々に全感を抱かせるには十分だった。

……彼を紹介してくれた総帥は続け様に僕たちを焚き付けた。

「どうした？ 呆然としていないで、この男の指示に従って練習に励め」

売り言葉に買い言葉か僕は攻撃的な言葉を返し、結果的に彼との試合が決まったんだ。それも1対1。勝負が成立する筈の無いハンデキャップで。

「たかが100メートル程度のグラウンド。お前達程度ならば1人でも如何様にでもな

る」と彼は言った。

僕たちは誰もが耳を貸さなかった。それも当然だ。キャプテンを務めている僕ですらチームメイトを相手に1対2すら苦勞するのだから。僕は彼の言葉を嘲笑ったよ。彼がそれを本気で言っているとも知らずに。

『さばきのてっつい』

天から降り注ぐ、神の怒りも。彼の俊敏な動きを止めるには至らない。

『ヘブンズタイム』

神気が満ちた僕の絶対的な領域も。彼を繋ぎ止めることすら不可能だった。

『ゴッドノウズ』

僕の必殺にして最強である大神の神威も……彼は唯の一蹴りで相殺してみせた。

——僕たちの力は何一つ通用しなかった。僕たちが神を詐称したヒトだとするなら

ば、彼は、彼こそがきつと神なのだろう。

「………覚えてぞ」

そう呟いた彼は、グラウンドを強く踏み締め、漆黒の翼をためかせながら天空へと飛び立った。闇に染まった羽根が呆然とする僕の頬をくすぐった。

『ゴッドノウズ』

朱に染まった空を黒い翼が覆う。勿論僕の翼ではない。

シユートに纏われた黒雷が大気を焼きながら僕らのゴールへと迫る。

紛れもない……あれは……僕の必殺技だった。

『ギガントウォーツツツ!!!』

地を穿つ神の一撃も。彼のシユートを前にしては発動すらままならない。



ボールがゴール内をコロコロと転がった。摩擦熱で煙を上げながら。

僕たちのゴールが僕の必殺技で破られる。そんなあり得ざることがあり得てしまったんだ。

僕のものではない私の力。私唯一の特権が、誇りが今出会ったばかりの男に奪われ……汚された……

だが、なぜか清々しい。僕はまだまだ強くなれる。そう教えてもらったような気がして。

ここまでが僕たちの敗北までの軌跡。実に短く、実に充実した時間だった。今までのサッカーへの努力が走馬灯のように想起する。死ぬわけじゃ無いが、神としての僕は終わったのだろう。だが……

おや？——彼がこちらへと近づいてくる。敗北者たる僕たちに何か用でもあるのだろうか……？ いや……彼ほどの傑物に大口を叩いてしまったのだ。何を言いつけられても敗者の定めとして受け入れよう。

「おい。お前達何故倒れ込んでいる。立ち上がれ。練習を始めるぞ」

「は？？」

思わず僕の口から惚けたような言葉が飛び出した。しかし、彼の声音は至って平坦。真面目そのものだった。彼の隠された瞳と目が合ったような未知の確信が、心を駆け巡る。

どうやら彼の意味は最初から変わっていないらしい。まだこんな愚かな僕たちを導いてくれるつもりようだ。

ならば彼のその献身に報いなければ！ 時間はない。きつと、今度こそ僕達は自らの力で彼の領域へ、神の元へ至ろうでは無いか。

どうやらチームメイトも僕と同じ心境に至った様子だ。皆前を向き、彼を見据えている。

僕たちは今日ヒトとして再び立ち上がった。